

古国府遺跡群・上七曾子遺跡

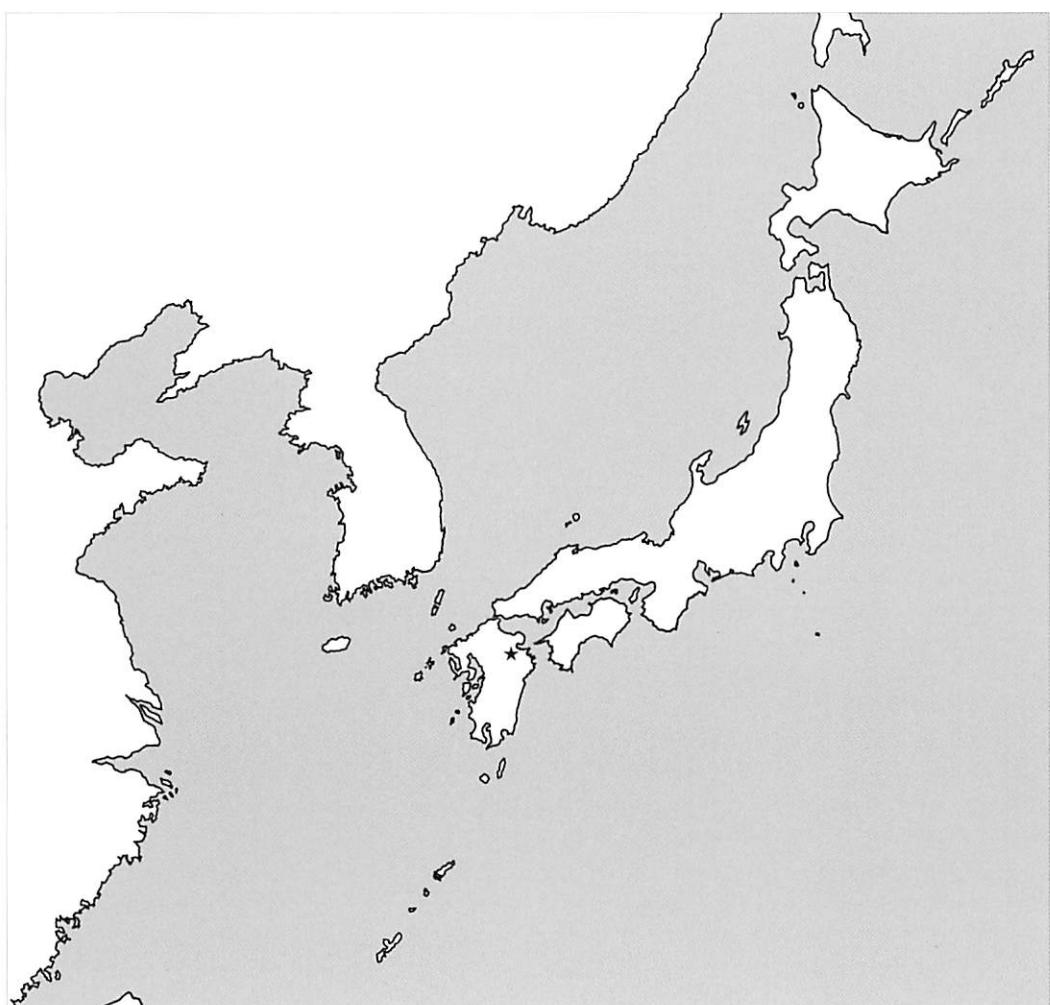
— 共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書 —

2003年3月

大分市教育委員会

古国府遺跡群・上七曾子遺跡

— 共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書 —



2003年3月

大分市教育委員会



古国府遺跡群・上七曾子遺跡遠景（南方向から）



古国府遺跡群・上七曾子遺跡調査区全景



2号溝（SD02）出土 弥生土器

序 文

本書は、平成14年度に大分市教育委員会が実施した古国府遺跡群・上七曾子遺跡の共同住宅建設工事に伴う緊急発掘調査報告書です。

上野丘陵から古国府地区周辺を取り囲む一帯は、古代から中世にかけて政治・経済・宗教の中心的な役割を果たし、豊後国府推定地としてもっとも有力視された所です。

ここ数年の発掘調査で、古国府遺跡群羽屋・井戸遺跡や園遺跡などで7世紀中頃から後半の掘立柱建物跡が区画性をもって配置された状況で発見されており、国府等の関連付ける遺構として明らかになってきました。

今回の調査で特に注目される遺構は、古代官道にあたる部分の確認と市内でも発見例の少ない弥生時代前期の溝状遺構と遺物の出土です。これらの貴重な発見が当該地域で成された事は、予想以上の成果をあげることに成りました。

本書の発刊にあたり、多大なるご配慮・ご協力を賜りました株式会社本多産建に対しまして心から謝意を表すとともに、発掘調査ならびに資料整理に協力いただいた関係各位に対しまして深くお礼を申し上げます。

なお、本報告書が学術研究に寄与するとともに、文化財保護高揚の一助になれば幸いに存じます。

平成15年3月31日

大分市教育委員会
教育長 秦 政 博

例　　言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市大字羽屋字上七曾子において、共同住宅建設に伴い調査を実施した発掘調査報告書である。
- 2 調査は、共同住宅の施主である株式会社本多産業からの委託を受け、平成14年8月5日から10月27日にかけ大分市教育委員会が実施した。
- 3 調査は讃岐和夫が行い、遺構実測・遺構写真と遺物写真は補助業務として(有)九州文化財リサーチが実施した。
- 4 遺構の空中写真は、九州航空株式会社に委託した。
- 5 出土遺物の整理・土器復元・実測及び拓本については、井口あけみ・荻 幸二(大分市文化財課嘱託職員)、伊東みほ・松葉 泉・今村信子・堤美智代(大分市臨時職員)が行い、遺構及び遺物の版組み・製図は井口と木村藍子(大分市臨時職員)が行った。
- 6 本書の執筆は第Ⅲ章のⅡ出土遺物5石器については荻 幸二が、第Ⅲ章のⅡ出土遺物6上七曾子遺跡出土の十字形石器についてと第V章については井口あけみが、その他については讃岐和史が行った。
- 7 本書の編集・校正は、讃岐・井口が行った。
- 8 発掘調査報告書作成に際して、縄文土器の分類にあたっては、坂本嘉弘氏(大分県文化課主幹)より多大な指導・助言をいただいた。

凡　　例

- 1 本書に用いた遺構略号は、SK：土抗、SD：溝、SF：道路状遺構、T：トレンチを表している。
- 2 遺構の規模はmを、遺物の法量はcmをそれぞれ用いている。
- 3 遺構対照表（）の番号は、調査時の遺構番号である。

1号溝 (SD17、SD18)	2号溝 (SD03)	3号溝 (SD02)	4号溝 (SD01)	5号溝 (SD06)
6号溝 (SD05)	7号溝 (SD13)	1号土抗 (SK04)	2号土抗 (SK08)	3号土抗 (SK07)
4号土抗 (SK09)	5号土抗 (SK11)	6号土抗 (SK16)	7号土抗 (SK20)	8号土抗 (SK21)
9号土抗 (SK22)	10号土抗 (SK19)	側溝と道路状遺構 (S-10、S-15)		

目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章 はじめに	1
I 調査に至る経過	1
II 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
第Ⅲ章 遺跡の概要	6
I 遺構	6
1 弥生時代の溝状遺構	6
1) 1号溝 (SD01)	6
2) 2号溝 (SD02)	6
2 古代・中世の溝状遺構	10
1) 3号溝 (SD03)	10
2) 4号溝 (SD04)	10
3) 5号溝 (SD05) 6号溝 (SD06)	10
4) 7号溝 (SD07)	10
3 土坑	10
1) 1号土坑 (SK01)	10
2) 2号土坑 (SK02) 3号土坑 (SK03)	11
3) 4号土坑 (SK04) 5号土坑 (SK05)	11
4) 6号土坑 (SK06)	12
5) 7号土坑 (SK07)	12
6) 8号土坑 (SK08)	12
7) 9号土坑 (SK09)	13
8) 10号土坑 (SK10)	13
4 道路状遺構	13
1) 道路状遺構 (SF01)	13
5 柱穴群	16
II 出土遺物	16
1 縄文時代後期土器 (第10~14図)	16
2 2号溝 (SD02) 出土の弥生時代前期土器 (第15・16図)	16
3 各遺構 包含層内遺物 (第17図)	26
4 第2号土坑 (SK02) 出土の遺物 (第19図)	30
5 石器	31
1) 事実記載	31
2) まとめ	37
(1) 縄文時代後期	37
(2) 弥生時代前期	37
6 上七曾子遺跡出土の十字形石器について	38
第Ⅳ章 まとめ	42
第Ⅴ章 上七曾子遺跡 2号溝 (SD02) 出土の弥生土器について	45
I 上七曾子遺跡出土土器の様相	45
II 大分市域の弥生時代早・前期土器編年案	45

挿 図 目 次

第1図 上七曾子遺跡の位置	2
第2図 古國府遺跡群・上七曾子遺跡周辺遺跡分布図(1/30,000)	3
第3図 遺跡配置図(1/250)	7~8
第4図 SD02 遺構及び遺物出土状況(遺構1/60・遺物1/12)	9
第5図 2号土坑平面・断面実測図(1/40)	11
第6図 5号土坑平面・断面実測図(1/40)	12
第7図 6号土坑平面・断面実測図(1/20)	12
第8図 土層断面図1(1/80)	14
第9図 土層断面図2(1/80)	15
第10図 繩文土器実測図1(1/3)	17
第11図 繩文土器実測図2(1/3)	18
第12図 繩文土器実測図3(1/3)	19
第13図 繩文土器実測図4(1/3)	20
第14図 繩文土器実測図5(1/3)	21
第15図 SD02 出土遺物実測図1(1/4)	23
第16図 SD02 出土遺物実測図2(1/4)	27
第17図 その他の遺構出土遺物実測図(1/2)	29
第18図 水田耕作土出土半錢実測図(1/1)	29
第19図 SK02 出土遺物実測図(1/2)	31
第20図 石器実測図1(1/2)	33
第21図 石器実測図2(9~10は1/2、11~14は2/3)	34
第22図 石器実測図3(1/2)	35
第23図 県内出土十字形石器実測図1(1/4)	38
第24図 県内出土十字形石器実測図2(1/4)	39
第25図 古國府遺跡群字図及び周辺調査地点位置図(1/5,000)	43
第26図 大分市域の弥生時代早・前期土器編年(1/12)	47

表 目 次

表1 石器器種・石材組成	37	表4 弥生土器遺物観察表	57
表2 十字形石器一覧表	40	表5 その他の遺構出土遺物観察表	59
表3 繩文土器遺物観察表	50	表6 石器観察表	60

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 1 上 古國府遺跡群・上七曾子遺跡遠景(南方向から)		中 SD04 完掘状況(西方向から)	67
卷頭図版 1 下 古國府遺跡群・上七曾子遺跡調査区全景		下 SD04 土層断面状況(東方向から)	67
卷頭図版 2 2号溝(SD02)出土 弥生土器		図版 8 上 SK02 土層断面状況(西方向から)	68
図版 1 調査区全景(空中写真)	61	中 SK02 完掘状況(南方向から)	68
図版 2 上 SD01・02 完掘状況(西方向から)	62	下 SK06 完掘状況(南方向から)	68
図版 2 中 SD01 完掘状況(西方向から)	62	図版 9 上 道路状遺構(SF01)断面状況(西方向から)	69
図版 2 下 SD02 完掘状況	62	中 発掘風景	69
図版 3 上 SD02 粘土検出状況(西方向から)	63	下 大雨後の調査区	69
図版 3 下 SD02 粘土完掘状況(西方向から)	63	図版 10 出土繩文土器 1	70
図版 4 上 SD02 遺物出土状況(西方向から)	64	図版 11 出土繩文土器 2	71
図版 4 中 SD02 遺物出土状況(南方向から)	64	図版 12 出土繩文土器 3	72
図版 4 下 SD02 遺物接写	64	図版 13 出土繩文土器 4	73
図版 5 上 SD02 遺物接写(壺)	65	図版 14 出土繩文土器 5	74
図版 5 中 SD02 遺物接写(甕)	65	図版 15 SD02 出土土器 1	75
図版 5 下 SD02 遺物接写(刻目突帯文甕)	65	図版 16 SD02 出土土器 2	76
図版 6 上 SD02 土層断面状況(東方向から)	66	図版 17 SK02 出土遺物(上段4・5)その他の遺構出土遺物(1~16)出土石器	77
図版 6 下 SD03 道路側溝状況(西方向から)	66	図版 18 出土石器 2	78
図版 7 上 SD04 検出状況(西方向から)	67	図版 19 出土石器 3	79

第Ⅰ章 はじめに

I 調査に至る経過

申請地である大分市大字羽屋字上七曾子177番地・178番地は、周知遺跡である古国府遺跡群に属しており、古くから豊後國府推定地として有力視されていた場所である。現在も条理地割が良く残っている。また、大型掘立柱建物跡群を検出した羽屋・井戸遺跡が申請地のすぐ南側に所在している。

申請地は、共同住宅建設する予定のため事業主と大分市教育委員会文化財課で事前協議を行い、平成14年6月3日から6日にかけて確認調査を実施した。その結果、遺構を確認したため、事業主と委託契約を締結し本調査を平成14年8月5日から10月27日にかけて(有)九州文化財リサーチのサポートを受けて実施した。

II 調査組織

調査主体 大分市教育委員会

調査責任者 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会 教育総務部 文化財課

課長 帯刀 修一

参事 玉永 光洋

補佐兼管理係長 熊谷 一秋

補佐兼文化財係長 讀岐 和夫(調査員)

文化財係 専門員 塔鼻 光司

管理係 主任 幸 裕美

同 上 主任 桑原 治

嘱託 萩 幸二 井口 あけみ

臨時 伊東 みほ 松葉 泉 木村 藍子 今村 信子

調査補助 (有)九州文化財リサーチ

宗 公一郎(常務取締役) 宮小路 賀宏(顧問)

三嶋 桂司(調査課係長) 岡部 美貴子(技師)

小嶋 里枝 岡部 哲也

発掘作業員 猪野 秀成 森川 秀行 坂口 忠徳 萩 松幸 後藤 トシ子

宮崎 千代子 村上 サヨ子 津村 真 水野 弘喜 中野 佑一

志堂寺 優 竹下 徹 森山 栄俊

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

古国府遺跡群は、上野丘陵の南側裾部で大分川が大きく蛇行した、左岸に広がる半月形に形成された沖積平野上に立地している。

この地域は、古代の豊後國府推定地とされる場所であり、現在も条理地割が残っているが、ここ近年宅地化が進んでおり、かつての水田地帯は住宅地として変貌している。それに伴い緊急発掘調査も数多く実施されており、遺跡の状況が判明してきているが、国府跡に関係する遺構は未だ確認されていない。特筆すべきは、羽屋・井戸・闇遺跡の狭い範囲で国府の前段と思われる7世紀代の大型掘立柱建物跡群を確認した事である。唯一この場所が、古代の遺構を検出する遺跡であることが注目されている。

また、この古国府地域一帯と上野丘陵からなる場所は、弥生時代から中世にかけての遺跡や主要な史跡等の分布が知られている。

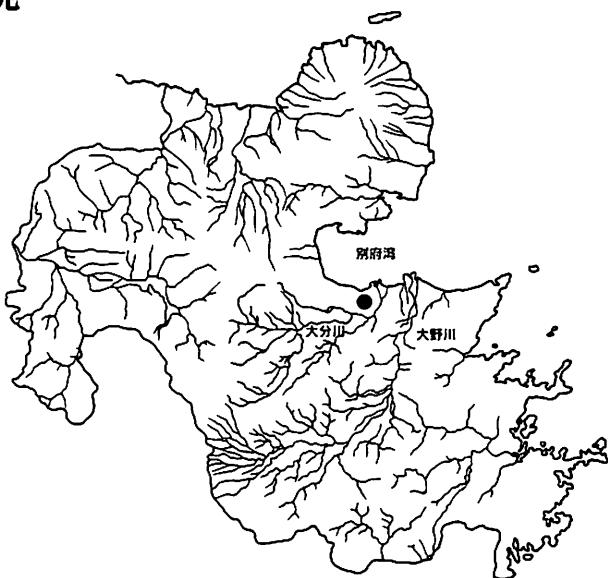
まず、上野丘陵には周知遺跡である上野遺跡群が所在しており、この地域では数少ない弥生時代の遺跡が市立美術館の建設時に発見されている。遺構については弥生時代中期のV字溝に一部埋まれた集落跡と弥生時代後期前葉に比定される、県下初例の祭祀遺構が確認された。遺構については、溝に埋まれた隅丸方形周溝遺構があり、空間地に2間×2間の掘立柱建物跡が施されている。

古国府遺跡群地域の弥生時代遺跡については、大分県教育委員会の国道210号羽屋工区道路改良工事に伴う低地の調査において、土毛地区では、弥生時代中期中頃の溝や幼児・子供・大人の足跡等が確認され注目された。

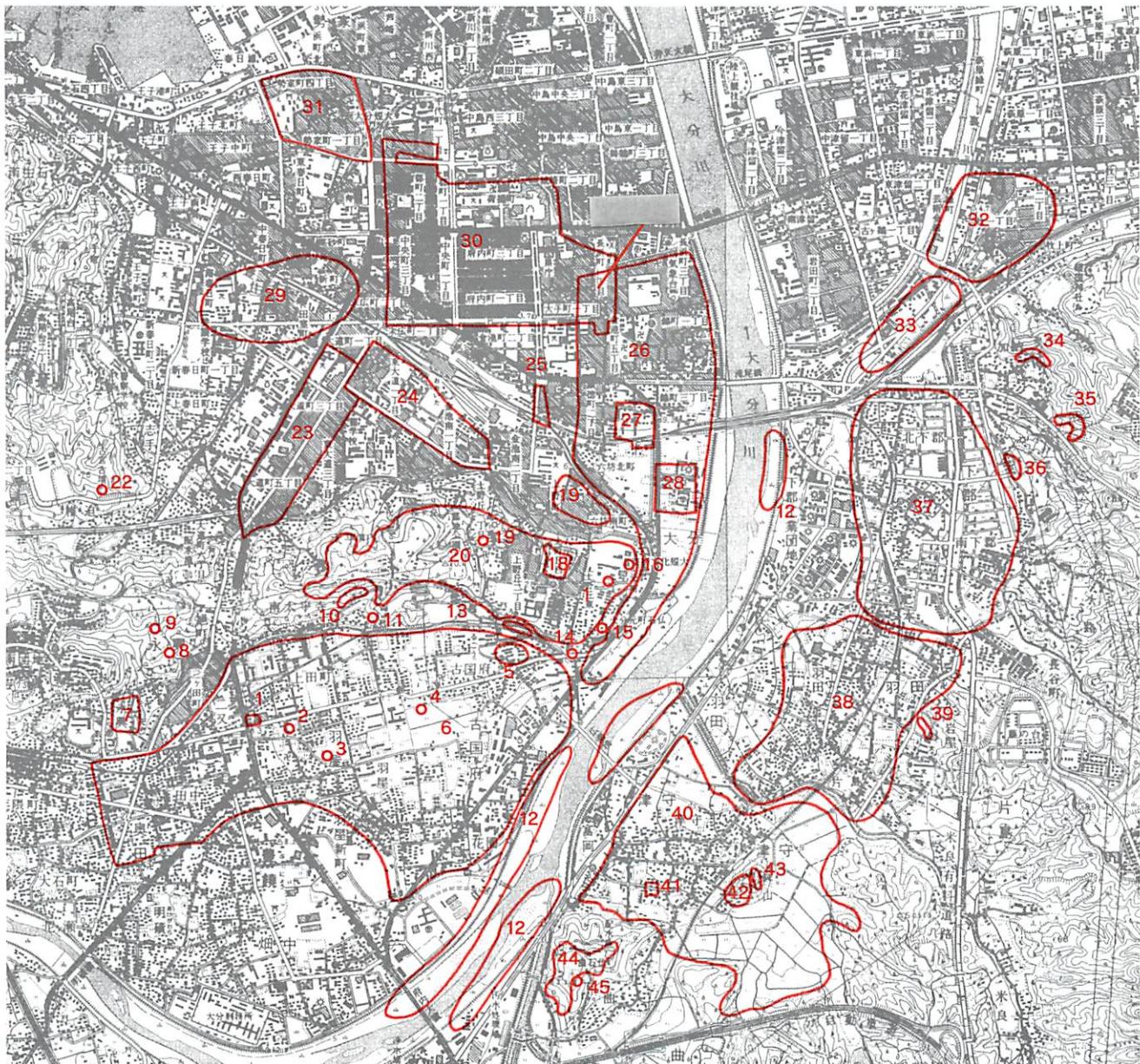
古墳時代に入ると、上野丘陵上に古式の様相が考えられる大臣塚古墳が所在している。この古墳は前方後円墳で前方部が削平されている。主体部は組み合わせ箱式石棺であり、棺内からは人骨・短甲・刀等が出土したと伝えられている。また百合若大臣の伝説にまつわる古墳でもある。時代については5世紀代の古墳である。古墳は県立芸術文化短期大学グランドの東側端部に位置している。

この古墳に続く墳墓としては、永興に所在している5世紀後半の前方後円墳である千人塚古墳が造営される。調査の結果、周溝のみの検出であった。墳丘の状況は、後円部の一部を残して墳丘部分は全て削平されており、周溝の遺存状況から、全長約47mの規模で後円部径は約33m、前方部長は短く約16mを復元できた。周溝は幅4.5m～6m・深さ1.2m～1.5m、断面は逆台形を呈していた。周溝内部には多量の葺石が流れ落ちており、周溝の底部分から須恵器の大甕が出土した。また、凝灰岩製の刳抜式石棺片が見つかっており、主体部は刳抜式石棺と思われる。

次に7世紀代になると千人塚古墳の南側斜面部に円墳である弘法穴古墳が所在している。主体部は横穴式石室である。横穴式石室をもつ古墳は、丑殿古墳と千代丸古墳が2km強の間隔で賀来宮苑ま



第1図 上七曾子遺跡の位置



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	上七曾子遺跡	16	大臣塚古墳	31	沖ノ浜遺跡
2	羽屋・戸遺跡	17	上野童王墓遺跡	32	牧遺跡
3	羽屋・園遺跡	18	上野大友氏館（上原館）跡	33	牧六分遺跡
4	町口遺跡	19	上野廃寺跡	34	下郡横穴墓群
5	岩屋寺遺跡	20	上野遺跡群	35	北下郡横穴墓群
6	古国府遺跡群	21	若宮遺跡	36	穴井前横穴墓群
7	永興遺跡	22	古宮遺跡	37	下郡遺跡群
8	弘法穴遺跡	23	大道条里跡	38	羽田遺跡
9	千人塚遺跡	24	大道遺跡群	39	滝尾百穴横穴墓群
10	南太平寺横穴墓群	25	南金池遺跡	40	津守遺跡
11	伽藍遺跡	26	中世大友府内町遺跡	41	松平忠直津守館跡
12	大分川河川敷遺跡	27	大友氏館跡	42	碇山山頂遺跡
13	岩屋寺横穴墓群	28	万寿寺跡	43	碇山横穴墓群
14	岩屋寺石仏	29	東田室遺跡	44	守岡遺跡
15	元町石仏	30	府内城・城下町跡	45	曲石仏

第2図 古国府遺跡群・上七曾子遺跡周辺遺跡分布図 (1/30,000)

でに3基築造されていた。その後、大分君恵尺の墓と目されている終末期古墳で畿内様式を持つ石郭式石室である古宮古墳が、椎迫地区に所在している。このことは、大分君一族の系譜を想定される。

また、市立美術館の南側斜面部に南太平寺横穴墓群が約170mの間に27基ほどが所在している。時代については、6世紀代の横穴墓と考えられている。

次に、古代の様子については、大臣塚古墳の南側に上野竜王畠遺跡（旧あけぼの学園跡地）が所在しており、8世紀代から9世紀代にかけての遺構・遺物が確認されている。とくに南北方向の掘立柱建物跡や築地壝に囲まれた施設等が確認され、鬼瓦の破片・赤色顔料の施された瓦片や円面鏡などが出土している。この地域は、平安時代後期頃の文献に残っている「高国府」に位置づけられおり、豊後国府の国司館等に関連づけられる遺跡として注目されている。

この竜王畠遺跡から900m西側には上野1丁目が所在しており、古くから当地周辺部は古瓦が採集できる場所として知られ、古代寺院の存在が考えられる所である。

共同住宅建設に伴う調査で、8～9世紀代と考えられる版築基壇遺構を伴う四面庇の大型礎石建物跡が確認され、古代寺院の様相をもつものと思われる。その版築下層より7世紀中頃以降の掘立柱建物跡が確認された。基壇遺構の西側には多量の瓦類や土師器の壊類を出土している。ここで特記される遺物として百濟系の单弁軒丸瓦と豊後国分寺創建時の軒平瓦、この遺跡独自の複弁七葉蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦や壇の破片、邢州窯系白磁・緑釉陶器等が出土している。このことから古代寺院の一つである上野廃寺跡の存在が明らかにされたことが窺える。

もう一つの古代寺院と考えられる、永興に所在する永興寺跡から古代の軒丸瓦が出土しており、市内には、豊後国分寺・尼寺以外に二つの古代寺院が所在していたことを窺い知ることが出来た。

県指定史跡岩屋寺石仏の北側丘陵上には、上野岩屋寺遺跡が所在しており、9世紀中頃と12世紀中頃の大規模な掘り込み遺構が確認された。この場所は、文献でみられる「高坂横道」に想定される場所でもあり、この岩屋寺石仏から三ヶ田町の方向へ直線的に延びる現道は推定古代官道を踏襲していると思われる。

次に、中世の時代になると上野丘陵上では、方形区画をもち御屋敷の字名が残る上野大友館（上原館）跡が所在しており、館の状況は高さ2.5m、幅17mの土壘がめぐり、幅10～30mの空堀と西側に虎口と思われる曲輪が存在している。内郭の状況は南北100m、東西80mを測る方一町の規模である。上野大友館跡の確認調査は、平成4年度の土壘整備に伴う調査が初例であった。その後、平成12年度の汚水雨水施設工事に伴う第5次調査まで実施されており、南側・西側・北側の土壘築造状況を把握することができた。

また、戦国期の中世府内町の様子を伝える「府内古図」は近世期に写されたもので、沖積平野部分の元町・顯徳町・錦町一帯、大分川下流左岸の南北2.2km、東西700mほどの規模で中世の町屋が描かれており、方2町の大友氏館や御蔵場、広大な敷地をもつ万寿寺、キリスト教会であるダイウス堂等が描かれていた。平成8・9年度に大友氏館跡の確認調査と横小路町の町屋の様子が把握できた。平成10年度からは大友氏館跡の本格的発掘調査を実施しており、池を伴う庭園遺構や土壘遺構・館北限の溝と築地壝遺構・基壇状の遺構と大形の建物跡などが確認している。町屋は大路・小路に面して短冊状に施されている。遺構・遺物から大友氏の往時の繁栄を窺い知ることができた。

また、古国府地区では古代の遺構を検出している羽屋・井戸・園遺跡以外の地区では13世紀から16

世紀にかけての遺構や遺物を発掘調査で確認している。

とくに、石明遺跡は印鑑社（現大国主社）の北側にあって国府跡推定地として、最も有力場所であったが、発掘調査により、北側では区画を意図した大形の溝が確認され、内部は小溝によって区画されていることが解かった。その他の遺構としては、柱穴群・12基を超える井戸跡・池状の遺構を確認しており、遺物の時期は13世紀代が中心であった。

古国府岩屋寺遺跡は、上野丘陵の南裾部に位置している。遺構は区画性のある大形の溝が東西方向に掘られており、内側にも小溝が区画をもち、角柱の建物跡に2～3回建て替えが見られた。遺物は瓦類（巴文の軒丸瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦）が多量に出土しており、瓦を葺いた建物であることから中世の寺跡などの遺跡と思われる。時期については14世紀から16世紀である。

町口遺跡は、推定官道が折れ曲る部分の南側に位置している。南北方向に溝状遺構が掘られており、短冊状地割を形成した町屋の遺構である事が確認された。

また、上野丘陵の南東壁面には、平安時代から鎌倉時代にかけて国指定史跡元町石仏と県指定の岩屋寺石仏である磨崖仏が連なる様に彫られている。

以上の様に、高国府を中心に上野丘陵では国府に関連づけられる遺構を確認し、古国府では羽屋・井戸地区でも一部国府に先行する時期の遺構を確認しており、注目される。

このように、上野丘陵から古国府地域を取り囲む一帯は、歴史的環境に恵まれており、中心的な役割を持った地域である。古代から中世にかけて政治的・経済的・宗教的な文化が華やいだ時期であると共に、この地が重要な地域であったことを窺い知ることができる。

【参考文献】

- 讀岐和夫 1985 「豊後国府推定地周辺の発掘調査」『大分県地方史 第117号』大分県地方史研究会
「大分市史」上・中巻 1987 大分市
- 讀岐和夫 1992 「上野遺跡群」「大分市埋蔵文化財調査年報3」大分市教育委員会
- 坪根伸也・池邊千太郎「園遺跡」1992 大分市教育委員会
- 塩地潤一 1995 「上野岩屋寺遺跡」「大分市埋蔵文化財調査年報6」大分市教育委員会
- 讀岐和夫他 1996 「羽屋・井戸遺跡」「大分市埋蔵文化財調査年報7」大分市教育委員会
- 塩地潤一 1997 「羽屋・園遺跡」「大分市埋蔵文化財調査年報8」大分市教育委員会
- 坪根伸也・塩地潤一 1996 「豊後国府推定地周辺の発掘調査II」「大分県地方史第163号」大分県地方史研究会
- 讀岐和夫 1998 「上野遺跡群（上野庵寺跡）」「大分市埋蔵文化財調査年報10」大分市教育委員会
- 高橋信武 1999 「44大分県大分市上野遺跡群竜王畠遺跡」「日本考古学年報50」日本考古学協会
- 村上久和・江田豊・吉田博嗣 1999 「古国府遺跡群」「大分県文化財調査報告書 第104号」 大分県教育委員会
- 秦政博他 2000 「大友館跡」「発掘調査概報I」 大分市教育委員会
- 塔鼻光司他 2001 「大友館跡」「発掘調査概報II」 大分市教育委員会
- 玉永光洋・羽田野達郎・佐藤孝則 2000 「羽屋・園遺跡確認調査」「大分市埋蔵文化財調査年報12」大分市教育委員会

第Ⅲ章 遺跡の概要

今回の調査は、試掘調査の結果、調査区の東側に遺構が集中していることから、遺構の希薄な部分と駐車場として遺構保存できる部分を除いて、調査区の約951m²について調査を実施した。

調査区は、市道（推定官道）に隣接しているため、地形に合わせて開けると真北よりN-68°-E程度振れている。調査地点は、工場跡地であったため、建物基礎によって遺構面が若干搅乱を受けていた。

その結果、調査区内から確認された遺構については、溝状遺構8条・道路状遺構・土坑10基・柱穴群（建物跡不明）が検出された。遺物については包含層から縄文時代後期の土器破片や石器が出土しており、溝状遺構から弥生時代前期の土器などが出土している。

I 遺構

1 弥生時代の溝状遺構

1) 1号溝 (SD01)

SD01は、南北方向に掘られている。直交する形でSD02より切られていた。溝の南側は東に若干弧を描きながら溝は閉じている。溝の北側では、幅0.6m、長さ1mほどの突出する部分が東側に施されている。溝の規模については、現状で幅0.6m～1.7m、深さ0.04m～0.2mを測る。断面形状は、上部面がカットされており、皿状を呈している。土層堆積は、2層が自然堆積している。土色については、上層の暗茶褐色粘質土（褐色粒子と暗灰色粘質土を若干含む）と下層は暗灰茶褐色粘質土（白灰色粘土を含む）でSD02とほぼ同様の堆積状況が窺える。遺物については、皆無である。

2) 2号溝 (SD02)

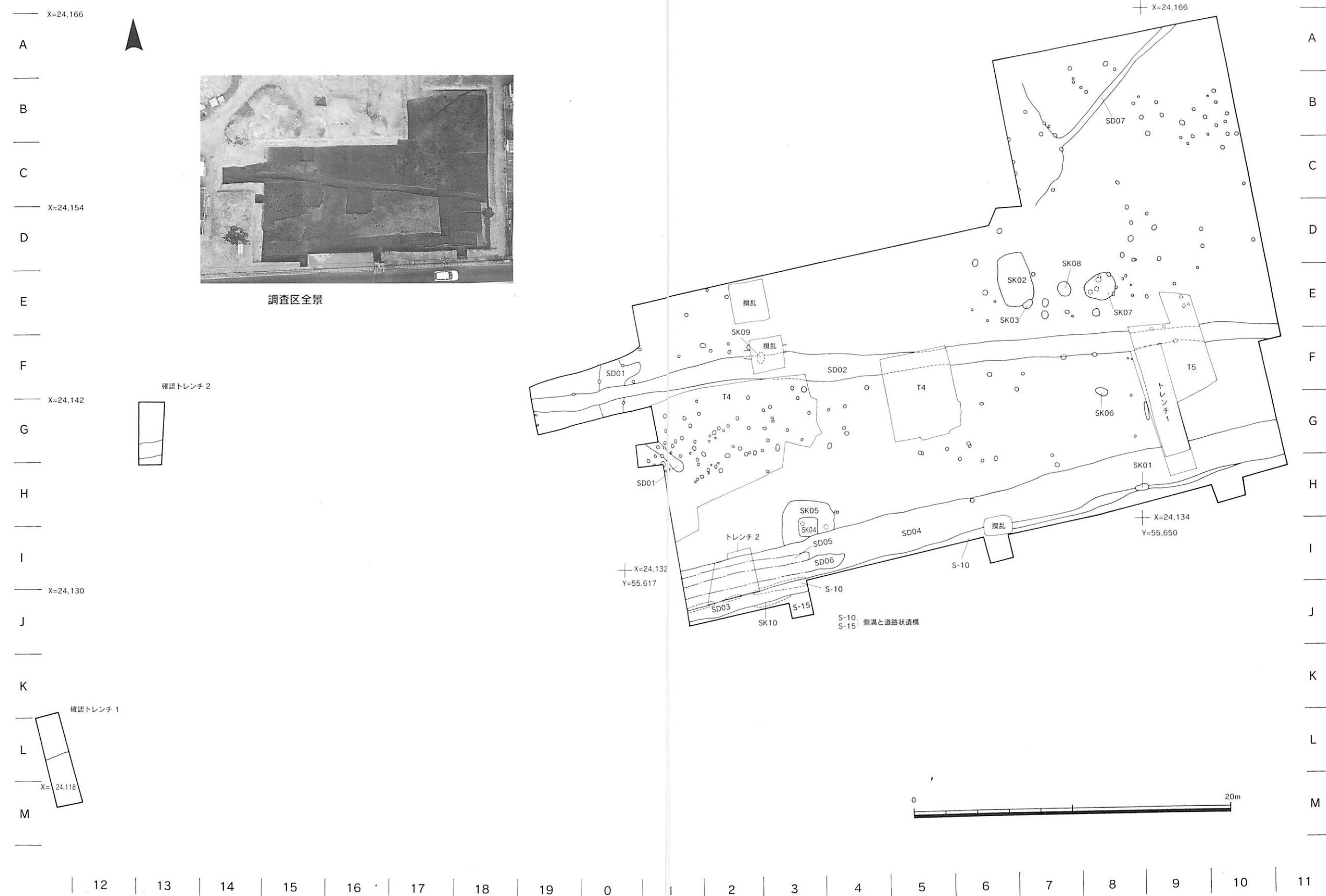
SD02は、調査区の中央寄りで直線的に東西方向N-85°-Eに振れて掘られている。溝の規模については、現状で幅1m～1.5m、深さ0.2m～0.36mを測る。断面形状は、皿状を呈している。土層堆積は、2層が自然堆積している。土色については、上層の暗茶褐色粘質土、下層は淡灰色粘質土（白灰色粘土を巻く）である。

遺構状況は、溝の壁から底にかけて白灰色粘土を巻いており、特に溝の中央部から東側にかけて良好に遺存していた。また溝の西側に集中して、弥生時代前期の土器が廃棄された状況で出土している（第4図）。

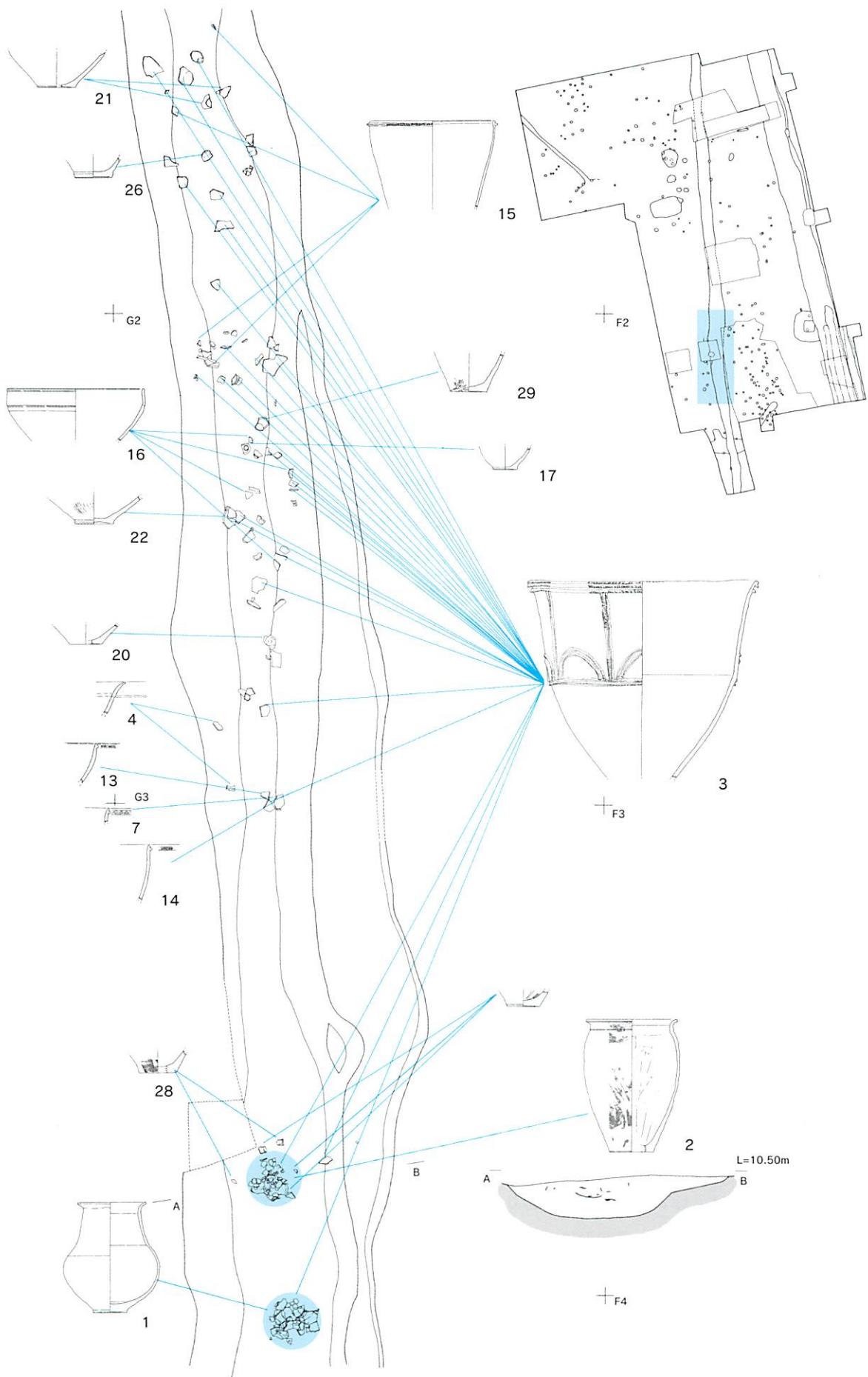
廃棄された遺物は、市内でも数少ない下城式土器成立以前のもので前期初頭から中葉にかけての時期である。

遺物の出土状況は、SD02の西側に夜臼系の壺形土器と小形の如意状の口縁部をもつ甕形土器が一個体ずつまとまった状況で出土していた。特徴のある刻目突帯文を持つ大形の甕形土器の出土状況は、全体にわたって散乱しており、前記の遺物の出土状況とは異なっている。その他の遺物は、刻目突帯文土器の口縁部と底部や鉢形土器破片が出土している。

12	13	14	15	16	17	18	19	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
								Y=55,590		Y=55,602		Y=55,614		Y=55,614		Y=55,626		Y=55,638		Y=55,650	



第3図 遺跡配置図(1/250)



第4図 SD02 遺構及び遺物出土状況（遺構1/60・遺物1/12）

2 古代・中世の溝状遺構

1) 3号溝 (SD03)

SD03は、道路状遺構を切る様に調査区の南側に掘られ、SD04から切られている。溝の方向は、SD04とほぼ同じである。溝の規模については、現状で深さ0.2mを測るが、幅は不明である。断面形状は、皿状を呈している。土層堆積は、2層が自然堆積しており、土色については、上層で黄灰褐色土（黄色ブロックと白色粒子混入）、下層は暗灰褐色土（黄色ブロックと白色粒子が混入）である。遺物については、須恵器の壊片を出土しているが、皆無に等しかった。

2) 4号溝 (SD04)

SD04は、調査区の南側に掘られている大形の溝状遺構である。切り合い関係は、SD03と道路状遺構・側溝を切って造られており、小溝のSD05・SD06から西側部分が切られている。

SD04は現道の道路とほぼ同じ方向であり、溝の中心軸はN-75°-Eであった。溝の規模については、現状で幅2.5m、深さ0.4mを測り、断面形状は逆台形を呈している。土層堆積状況は、灰色粘質土の1層で壁面と床面部分に褐色の鉄分が堆積し硬い層を成すグライ層が見られる。このことは、水が流れていたことを推測できる。水の流路方向については、溝の掘り方をみると西側方向である。遺物については、少量であるが糸切り底部の土師器片などが出土している。

3) 5号溝 (SD05) 6号溝 (SD06)

SD05とSD06は、SD04と同じ方向で埋土を切る様に掘られていた。溝状遺構は、東側に行くほど遺構面が高く成っている為か、調査区西側から約10m前後の場所で溝の掘り方が自然に消えている。

SD06は、現状での遺構幅0.8m、深さ0.28mを測る。断面形状はU字状に掘られており、土層堆積状況は、明黄灰色粘質土であった。SD05は、SD06より切られており、溝全体の規模は不明であるが、ほぼSD06と同じと思われる。土層堆積状況は、2層から成り、上層は黄灰色砂質粘土で下層は白灰色砂質粘土である。遺物については皆無に等しかった。この溝状遺構は、SD04と同じ方向の遺構であることから、規模を縮小した溝の掘り返しと思われる。

4) 7号溝 (SD07)

SD07は、調査区の北東側に掘られており、東西方向の溝遺構とは方向が異なる溝である。

溝の方向については、N-43°-Eに向けて掘られている。溝の規模は、現状の幅0.4m、深さ0.05mを測る。断面形状は、U字状に掘られており、土層堆積状況は暗茶褐色土であった。溝は南西側の遺構面が高いためか西側壁面の溝状況は、消滅していた。

遺物については、皆無に等しい。

3 土坑

1) 1号土坑 (SK01)

SK01は、調査区の南東側でSD04と道路状遺構と切り合い関係がある。土坑の規模は、長軸0.7m、短軸0.4mを呈しており、深さは現状で0.1mを測る。平面は橢円形を呈している。長軸の向きは、SD04とほぼ同じ方向である。断面形状はレンズ状に掘られており、埋土は暗灰褐色粘質土であった。遺物は皆無であった。

2) 2号土坑 (SK02) 3号土坑 (SK03)

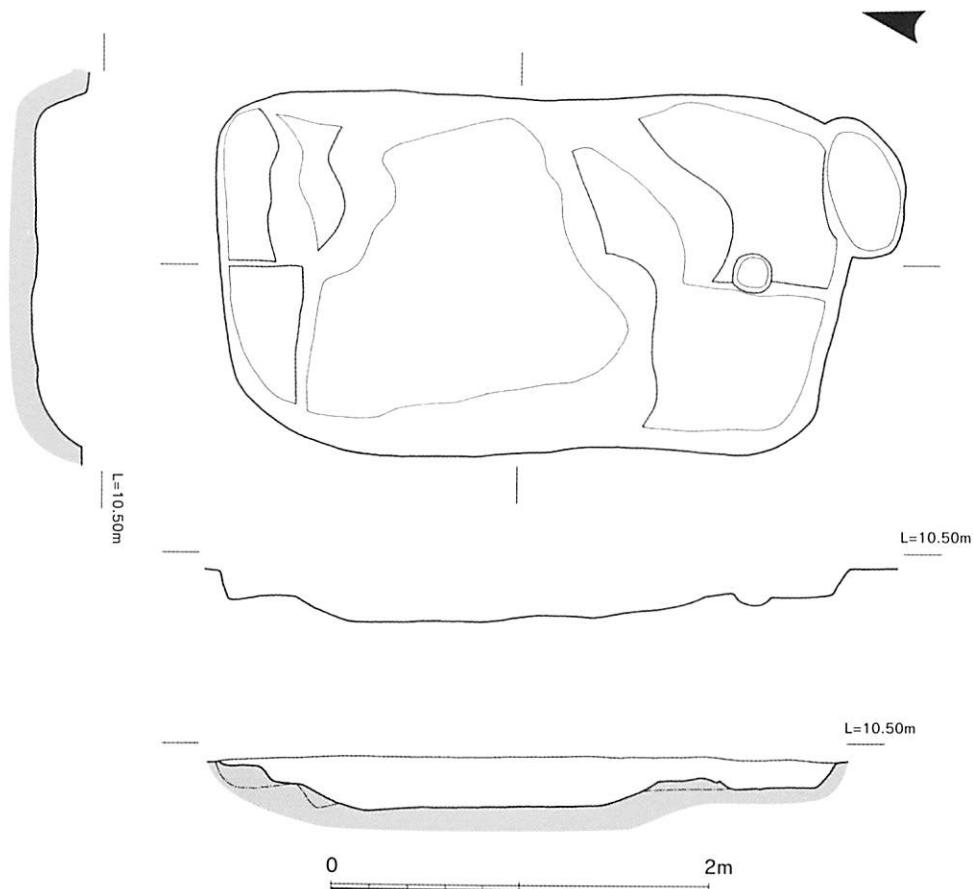
SK02は、調査区の北東側で長軸を南北方向のN-15°-Wに向けており、遺構の北側ではSK03に切られている。遺構の規模は、長軸3.3m、短軸1.9mを呈しており、深さ0.28mを測る。平面形は、隅丸長方形を呈している。床面形状は、いびつに掘られおり、両端部は一段高く掘られている。埋土は暗灰色粘土の单層である。遺物については少量であるが、糸切り底の土師器の底部や口縁部が出土している。

SK03は、長軸を東西に向けており、遺構規模は、長軸0.75m、短軸0.45mで深さ0.14mを測る。平面形は、橢円形を呈している。埋土は暗青灰粘質土の单層である。

遺物は皆無であった。

3) 4号土坑 (SK04) 5号土坑 (SK05)

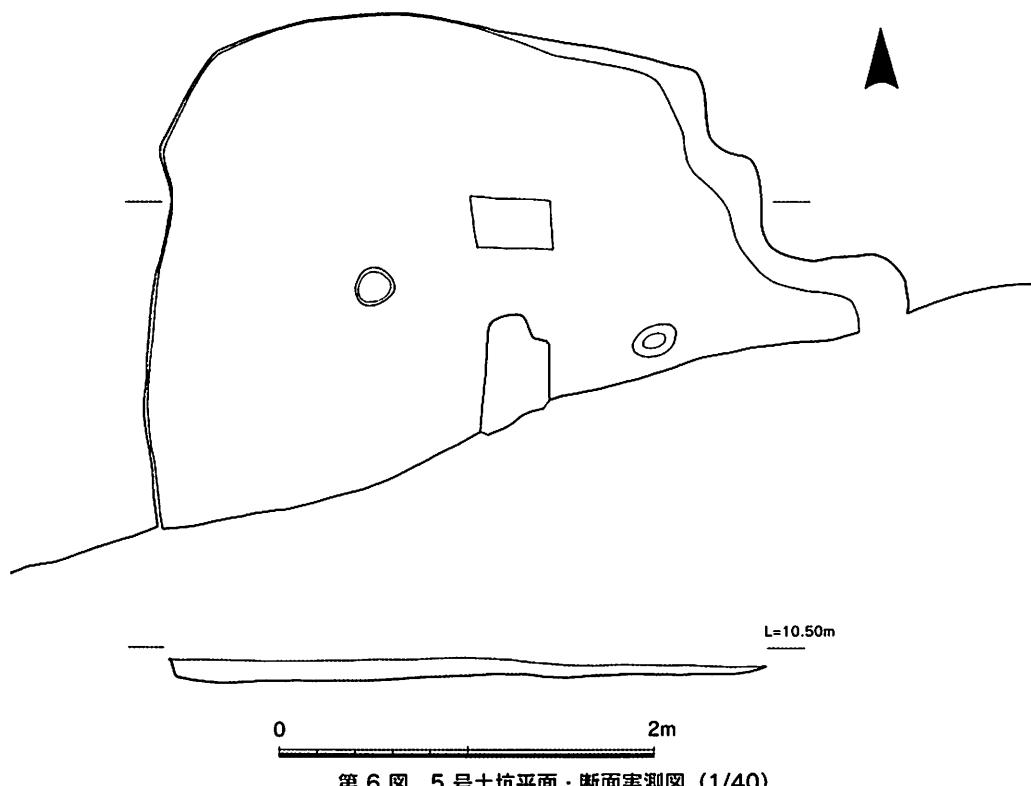
SK04は、調査区の南西側に位置しており、SK05と切り合い関係を持っている。遺構の規模は、一辺



第5図 2号土坑平面・断面実測図 (1/40)

が約1.3m、深さ0.1mの方形を呈している。埋土は暗黒灰褐色土の単層である。遺物は皆無であった。

SK05は、SD04を切って造られており、遺構の規模は、一辺が3.3m、深さ0.1mを測る。平面形は、土坑の東側が若干いびつになるが隅丸方形を呈している。埋土は黒灰褐色粘質土の単層である。遺物は少量であった。



4) 6号土坑 (SK06)

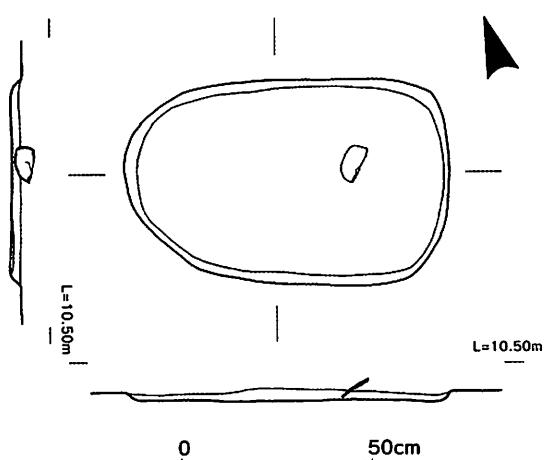
SK06は、調査区の東側に位置しており、長軸をN-62°-Wに向いている。遺構の規模は、長軸約0.8m、短軸約0.5m、深さ約0.5mを測る。平面形は、梢円形を呈している。埋土は茶褐色土の単層である。弥生時代の石器が2点出土している。石包丁状石器と砥石状の石器と思われる。

5) 7号土坑 (SK07)

SK07は、SK02の東側に位置しており、平面形は、不定形な円形状を呈している。遺構の規模は、径約1.8m、深さ0.5mを測る。埋土は暗灰褐色の単層である。遺物は皆無であった。

6) 8号土坑 (SK08)

SK08は、SK02とSK07の間に位置しており、SK02



と同じ方向を向いている。平面形は隅丸方形を呈している。遺構の規模は、長軸1m、短軸0.75m、深さ4mを測る。埋土は暗灰褐色土の単層である。遺物は皆無であった。

7) 9号土坑 (SK09)

SK09は、北西側のSD02を切っており、平面形状は、楕円形を呈している。ほぼ長軸を南北方向に向いている。遺構の規模は、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は黒灰色土の単層である。遺物は皆無であった。

8) 10号土坑 (SK10)

SK10は、南西の道路状遺構の下から検出された長土坑である。遺構の規模は、長軸約2.5m、短軸約0.5mを測る。埋土は灰褐色粘質土で黄色ブロック混入の単層である。遺物は皆無であった。

土坑の時期については、SK10は、古代の道路状遺構と同時期か若干早い段階で掘られていることが遺構検出で分かった。また、SK02の数少ない出土遺物から糸切り底部の土師器片を出土したことから、中世のものである事が判断できた。その他の土坑については、中世から中世以降に比定できるものであろう。

4 道路状遺構

1) 道路状遺構 (SF01)

道路状遺構 (SF01) は、調査区の南側に位置しており、N-75°-Eの方向に向いている。SD03と同じ方向で切り合い関係をもち、道路状遺構 (SF01) の掘り方が一部切られている。

遺構の遺存状況は、側溝遺構 (S-10) 及び道路状遺構 (SF01) の基底部埋土が3層ほど残っていた。その土層状況については、平行堆積しており、下層は青灰褐色砂質粘土で褐色粒子が混入していた。次の中層については、下層とほぼ同じ土色を見るが褐色粒子と白色粒子が混入していた。土質は若干硬めである。上層については、青灰色砂質粘土で白色粒子を多く含んでおり、黄色粘土ブロックも混入していた。土質は若干硬めである。

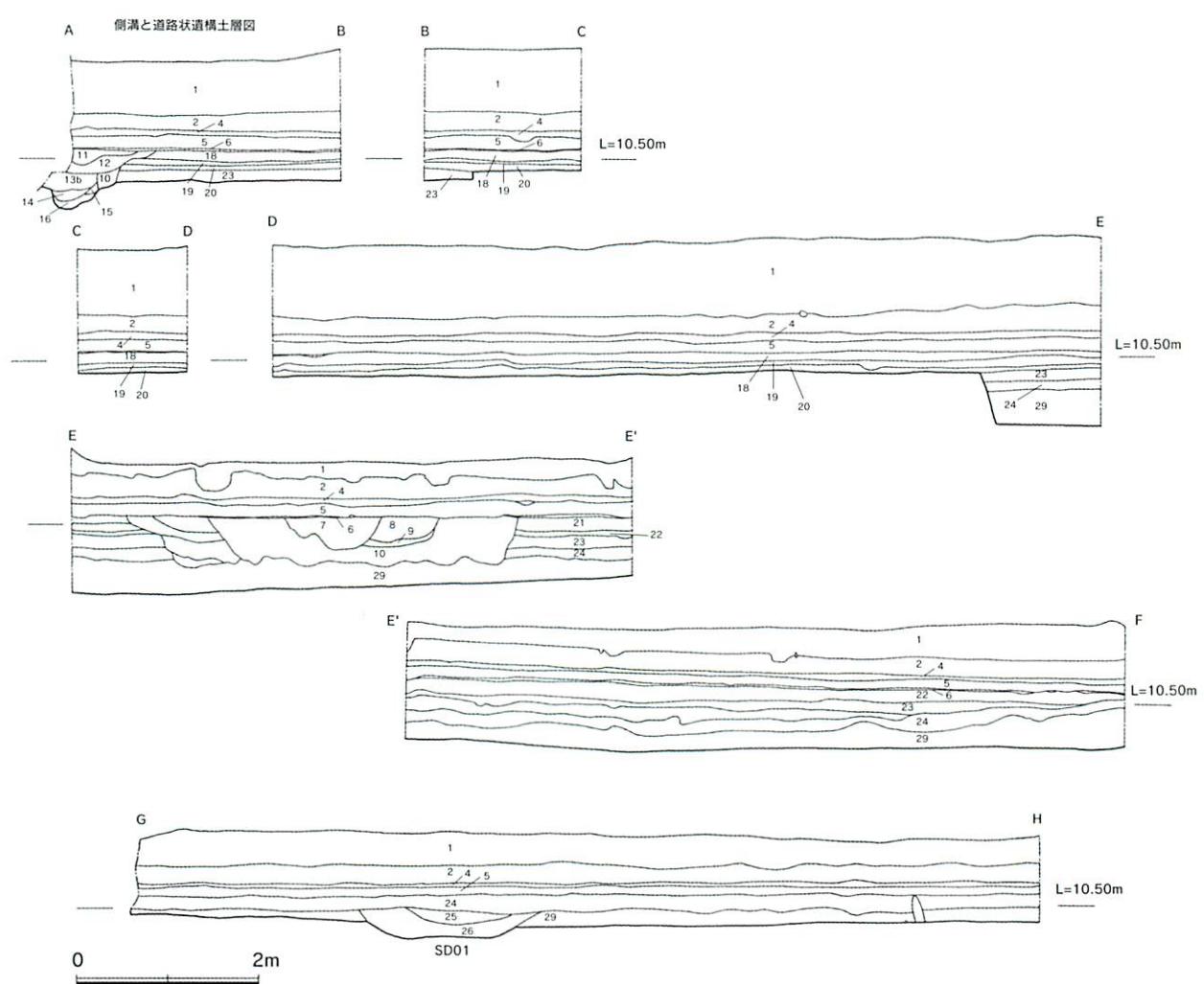
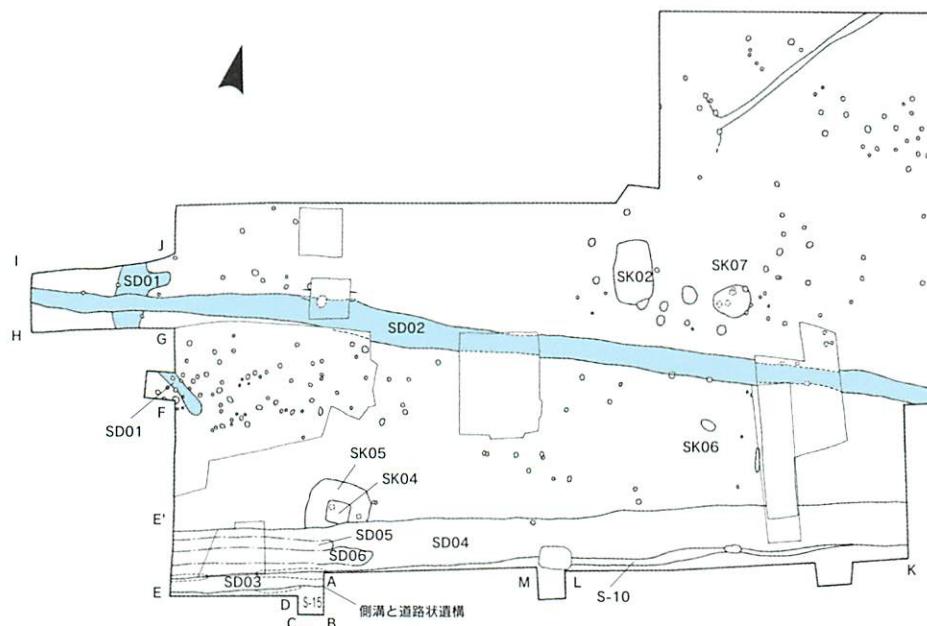
その上面は、近現代の水田層が見られ、明治18年に鋳造された半錢等の遺物が水田から検出された。

現道は、道路状遺構とほぼ同方向にのって建設されていることから、往時の位置を踏襲しながら、現在に至っていることが窺える。

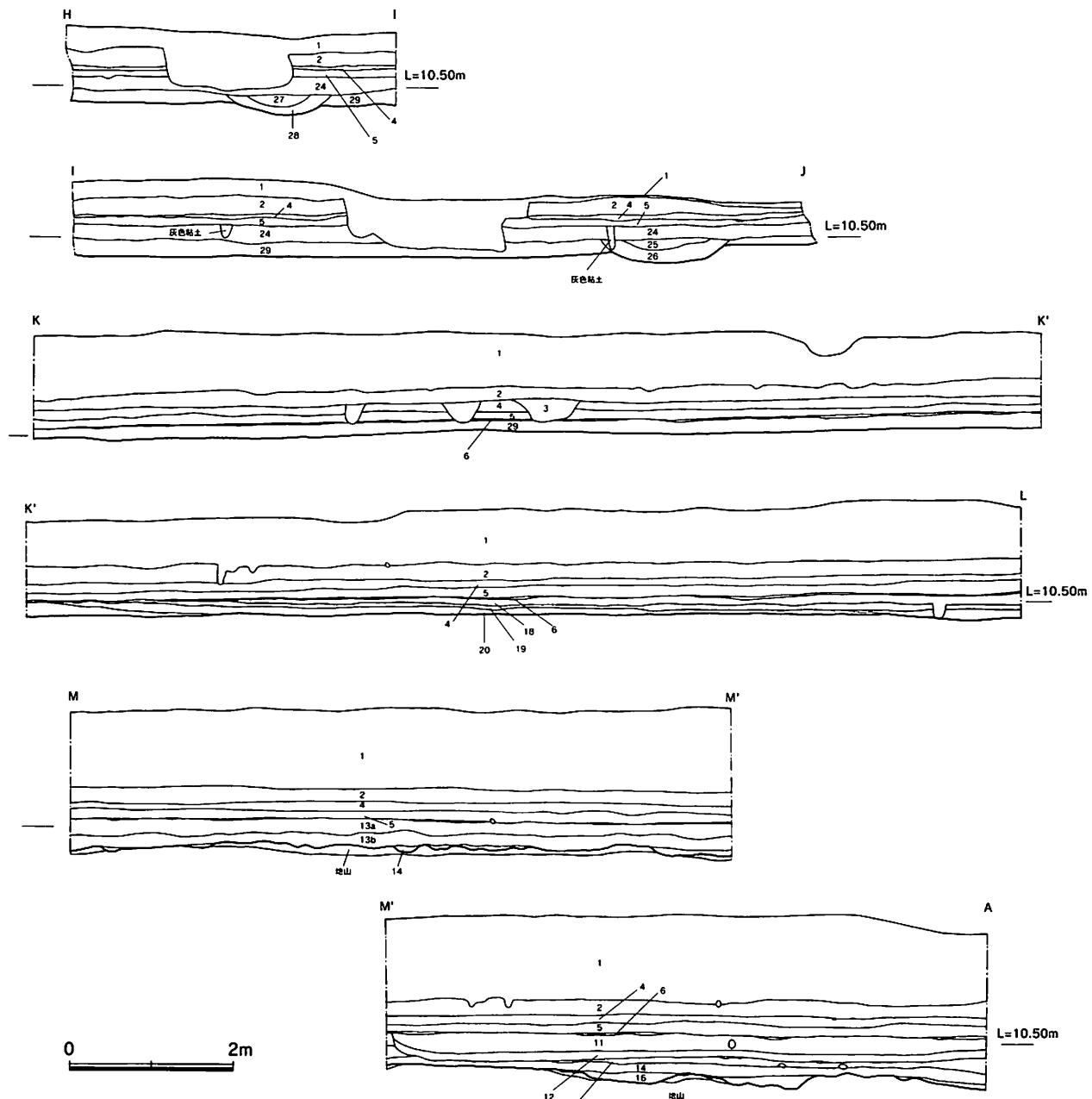
道路状遺構 (SF01) の側溝遺構については、土層断面状況から、側面が直線気味に立ち上がりつて遺存しているため、側面に何等かの施設を有したものと思われる。また、裏込め堆積状況の暗灰色粘質土層がみられる。

道路状遺構 (SF01) の土層堆積状況を見ると、調査区西側から約29m東側に行くに従って土層堆積が消滅している。もともと東側の自然地形が高いことや後世の整地等でカットされたことが、その原因と窺える。

側溝の流路方向については、西側の遺構面が深く掘られているため、西へ流れていることが窺える。



第8図 土層断面図1(1/80)



- 1. 黒土
- 2. 暗青灰色 (若干粘質含む)
- 3. 灰色粘質土
- 4. 黄褐色 (鉄分沈着あり)
- 5. 灰色粘質土 (上層からの鉄分沈下あり)
- 6. 赤褐色土 (鉄分が強い)
- SD06- 7. 黄灰色粘質土 (上層からの鉄分沈下により部分的に黄褐色化)
- SD05 { 8. 黄灰色砂質粘土 (7層より砂質が多い)
- 9. 白灰色砂質粘土 (若干粘質含む)
- SD04- 10. 灰色粘質土 (黄褐色ブロック上 (地山ブロック) を含む)
- SD03 { 11. 黄褐色 (地山ブロック 白色粒含む)
- 12. 暗褐色 (地山ブロック 白色粒含む)
- S-10 { 13. a黄灰褐色粘質土+地山ブロック
b灰色粘質土 (地山ブロック含む)
- 14. 暗灰色粘質土
- 15. 暗灰色粘質土+地山ブロック
- 16. 灰色粘質土
- 17. 暗灰色粘質土 (地山ブロック 白色粒含む)
- 18. 青灰色粘質土 (地山ブロック若干+白色粒)
- S-15 { 19. 青灰褐色砂質粘土 (褐色土粒+白色粒)
- 20. 青灰褐色砂質粘土 (褐色土粒含む)
- 21. 灰褐色粘質土 (褐色土粒含む)
- 22. 灰白色粘質土 (褐色土粒含む)
- 23. 暗黒灰色粘質土 (褐色土粒含む)
- 24. 黄灰褐色粘質土 (褐色土粒含む)
- SD01 { 25. 暗茶褐色粘質土 (褐色土粒・暗灰色粘質土を若干含む)
- 26. 暗茶褐色粘質土 (白灰色粘土を含む)
- SD02 { 27. 暗茶褐色粘質土 (褐色土粒・暗灰色粘質土を少量含む)
- 28. 白灰色粘土ブロック+暗灰褐色土
- 29. 黄褐色 (褐色土粒を密に含む)

第9図 土層断面図2 (1/80)

遺物については、皆無に等しかったが、その中でも古代に関する遺物が数点確認できた。

5 柱穴群

柱穴群については、調査区の全体にわたり少數であるが確認されている。そのため、方向性のある建物跡の把握を試みたが、建物跡の大きさや柱穴跡の並びなどから建物跡としては把握ができなかつた。ただ、一直線に数個並ぶ柱穴跡が確認されているが、柵列状に延びてはいない。

II 出土遺物

出土遺物は、包含層内から縄文時代後期の土器破片と石器類が出土している。又、2号溝（SD02）より弥生時代前期の遺物が比較的まとまって検出されたことは、注目すべき点である。壺形土器・突帯文に特徴のある大形の甕形土器・下城式土器の系譜を見る様な刻目突帯文の甕形土器・如意状口縁を持つ甕形土器がSD02より出土した。

1 縄文時代後期土器（第10～14図）

縄文土器は包含層から出土しており、大半が小破片であるが縄文時代後期の時期に比定できる遺物であった。

この縄文土器を分類してみると、口縁部では文様のある有文土器と文様のない無文土器とそれに伴う胴部と底部がみられた。

有文土器については、口縁部が内湾するものと外反する広口のものがある。文様は平行的沈線文の下に弧状沈線文を描くものや平行的沈線文の間に波状文や刺突文、弧状沈線文を描くものと平行的沈線文間に磨消縄文を施しているものがある。

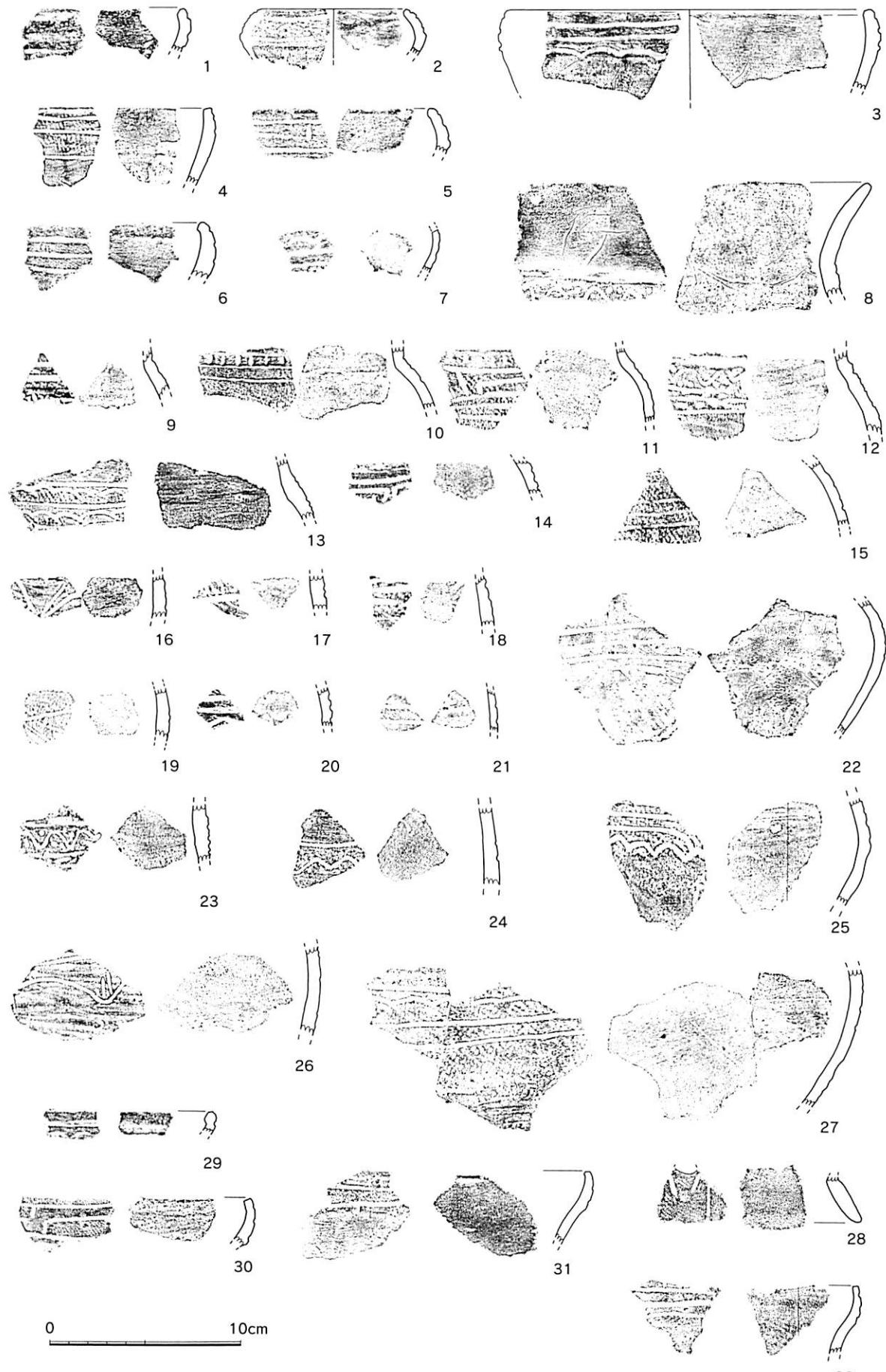
ここでは変化に富む土器と文様にA～Dの4タイプがみられる。Aは1～8、Bは28～32で北久根山式のタイプである（第10図）。Cは33～57で西平式のタイプであり、Dは58～74で口縁部等が若干退化しており、文様も磨消縄文になる（第11図）。胴部9～27はA・Bに伴うものである（第10図）。

無文土器については、2タイプがある。Aは75～103で口縁部は若干内湾気味に立ち上がるるものや直線的に立ち上がるもの、若干外反するもので器壁が厚手のものであり、A・B・Dの土器に伴うものである（第12・13図）。Bについては104～115で、Cの西平式土器に伴うものである（第13・14図）。

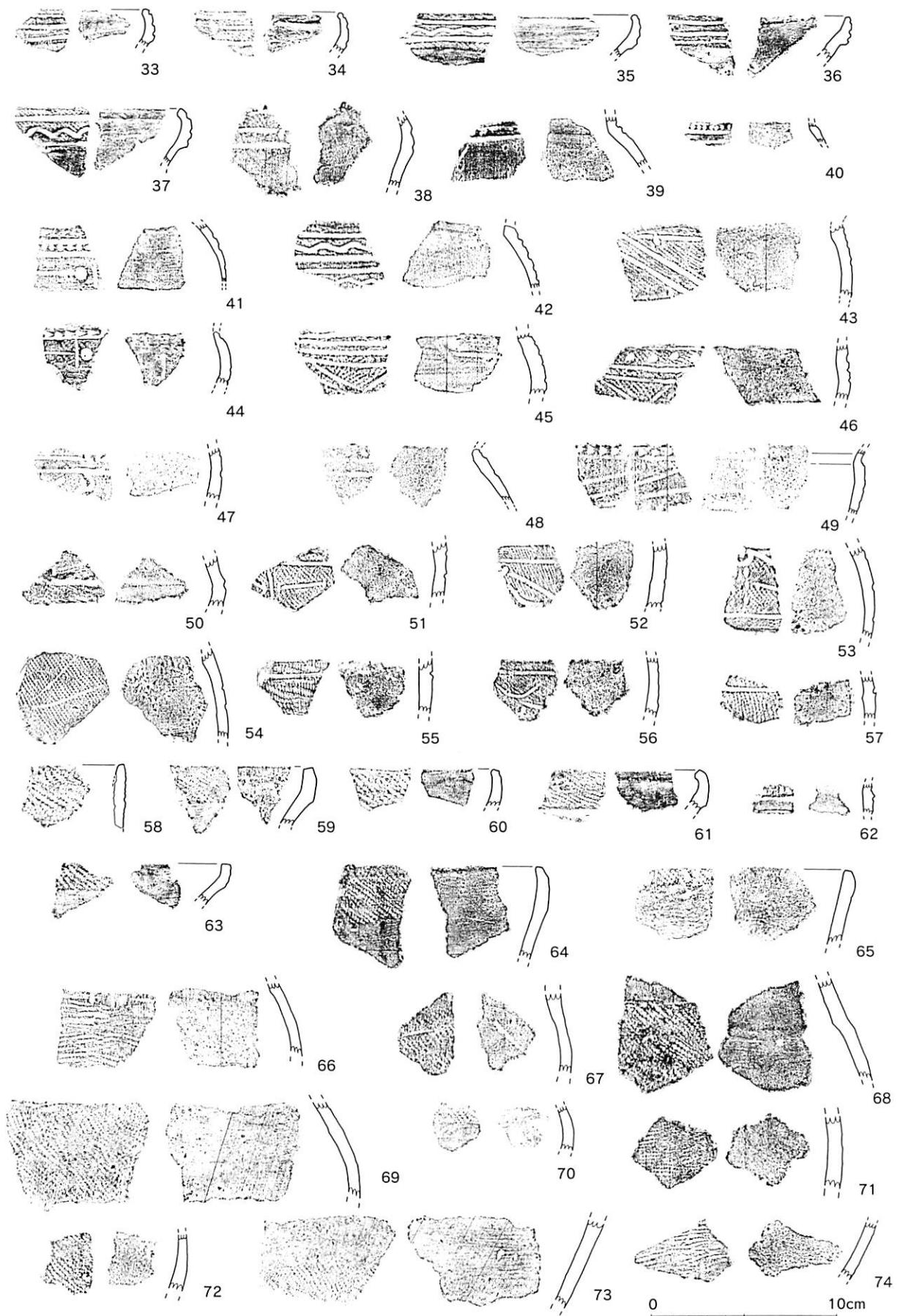
底部については、厚手のものaと薄手のbと2タイプがある。aは116～133で、A・B・Dに伴うもので、bは132～140でCに伴うものである。132は底部の底に沈線と磨消縄文が残っていた（第14図）。

2 2号溝（SD02）出土の弥生時代前期土器（第15・16図）

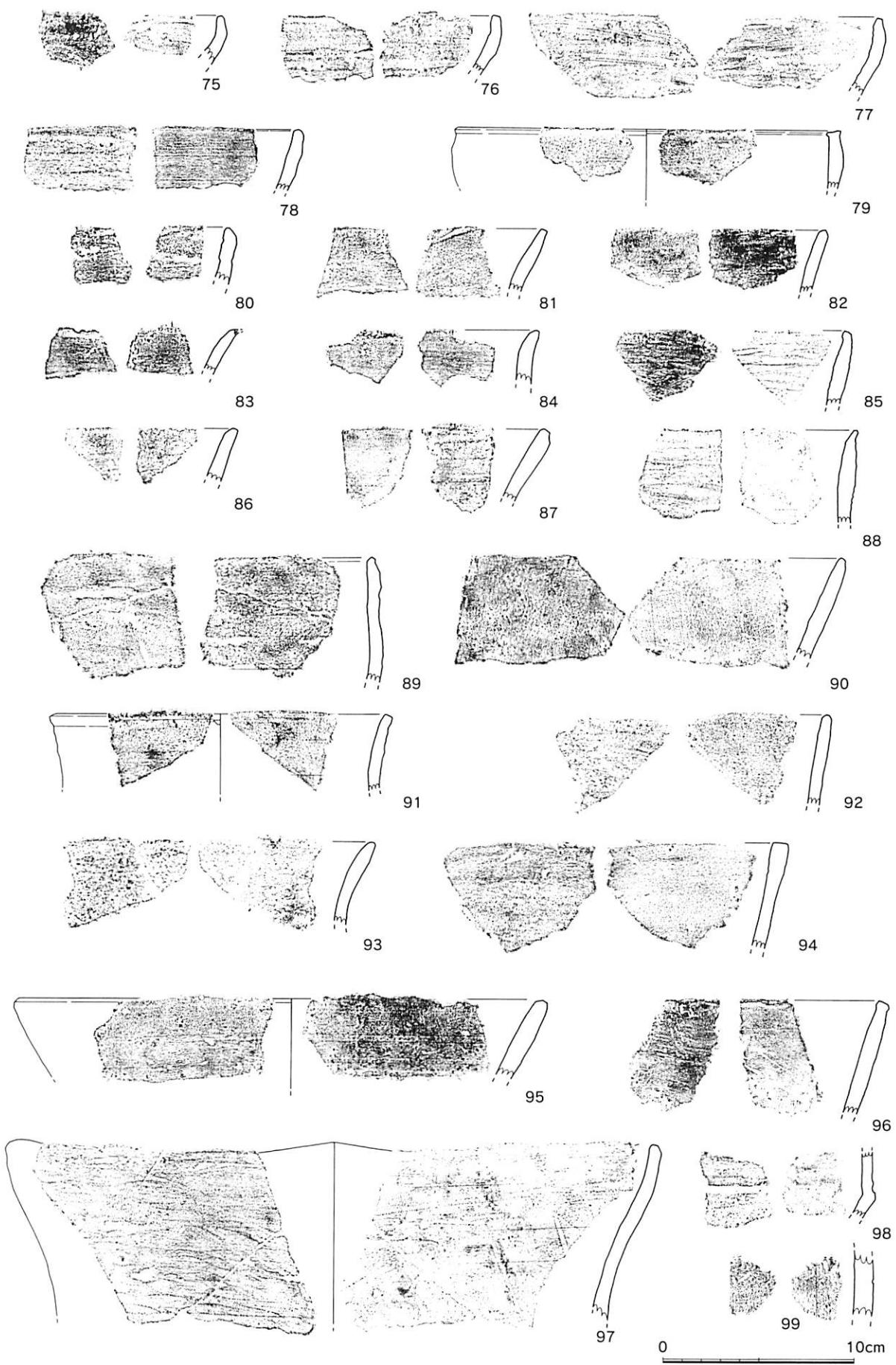
第15図1は夜臼式の特徴が残る壺形土器である。口径14.8cm・底径7.3cm・胴径21.2cm・器高24.3cmを測る。器形については、底部は若干上げ底気味である。底部の厚さは1.8cmを測る。胴部は玉葱状に張り出しており、胴部から頸部にかけて器壁は薄く仕上げている。頸部から口縁部までは、ハの字状



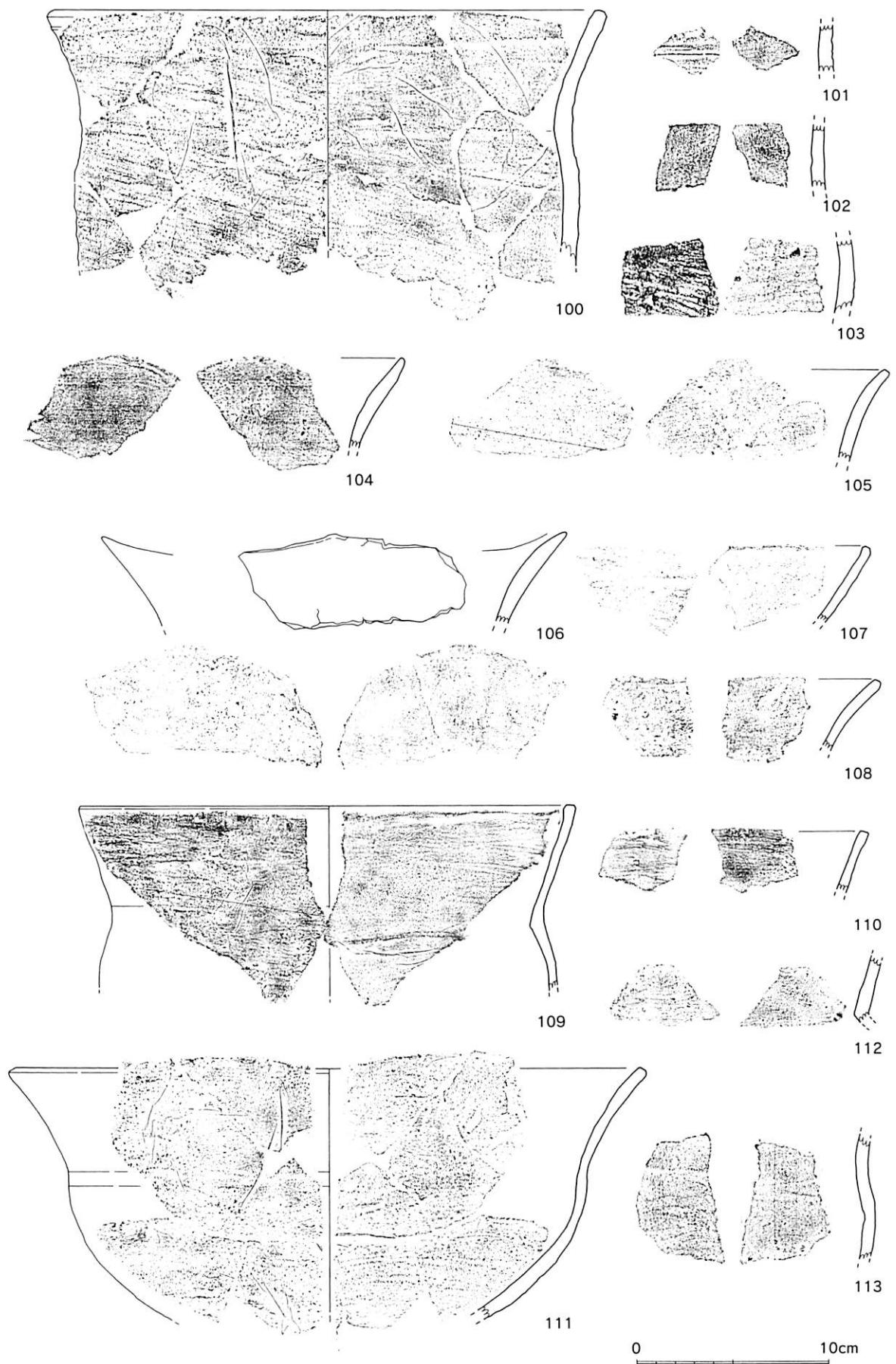
第10図 繩文土器実測図 1 (1/3)



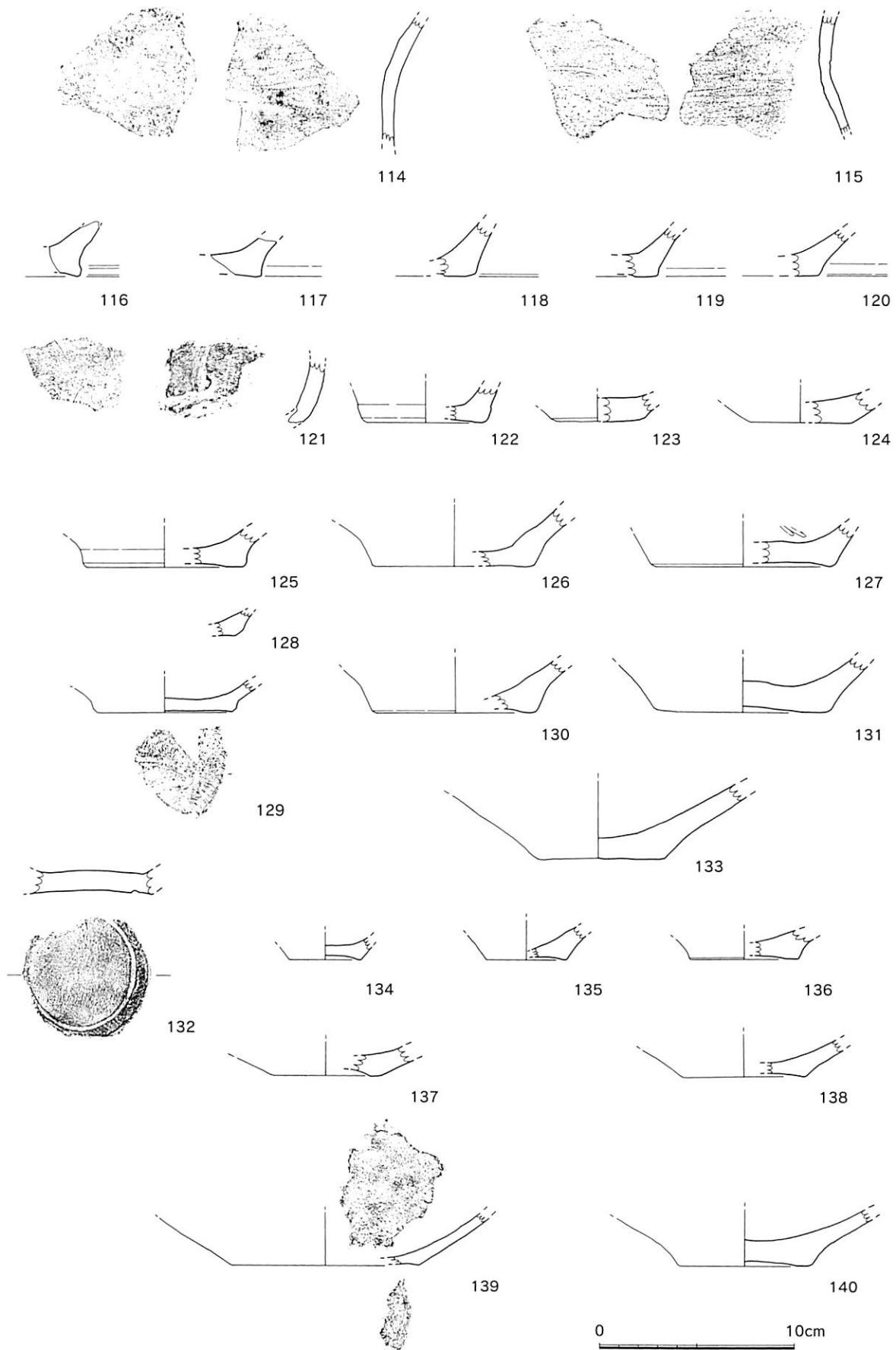
第11図 繩文土器実測図 2 (1/3)



第12図 繩文土器実測図 3 (1/3)



第13図 縄文土器実測図 4 (1/3)



第14図 繩文土器実測図 5 (1/3)

に内反し9.5cmの高さを持っている。口縁部は若干肥厚して如意状に外反している。

調整は内面ナデ、外面は器面が風化しているため不明瞭であるが、一部頸部に磨き痕が残っている。口縁部と底部の基部には横ナデを施している。色調は内・外面共に淡黄褐色を呈している。胎土は2mm程度の砂粒が混入している。

第15図2は如意状の口縁部を持つ甕形土器である。器形の規模については、復元口径19.3cm・復元底径9.3cm・復元胴部の最大幅21cm・器高28.9cmを測る。

底部は平底を呈し厚さ1.5cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、器壁は薄く、体部と口縁部の接合部はヘラで削り出したように段を有している。体部は若干内湾しながら口縁部で如意状に外反し、口唇部下端には2mm程の長さで、約4mm間隔の刻目を施している。

調整は内面横ナデ・縦ナデと指押さえ痕が残る。外面の口縁部には指押さえ痕と横ナデを施し、体部には上位から縦ハケ目・横ハケ目・斜目方向のハケ目を施し、中位と下位の底部付近はハケ目後ナデ消しを行っている。色調は淡茶褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英は小粒、角閃石は細粒、雲母は細粒が混入している。

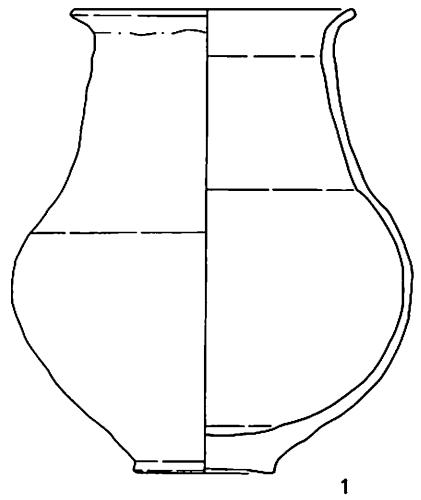
第15図3は大形の刻目突帯文甕形土器である。復元口径は49.3cm、現在高43.3cmを測る。底部を欠いており、体部はハの字状に開き中位の変化点で直線的に立ち上がり気味になる。口縁部では若干であるが外反する。口縁部に二条と変化点に二条の刻目突帯文を巡らし、上下二条の突帯間を縦に二条の刻目突帯文が等間隔に8本施されている。その空間の下位突帯に、二条の半円形刻目突帯文を施している。また口縁端部内面にも刻目が施されており、甕形土器の文様を構成している。

調整は内面ナデ、外面の突帯部分は横ナデ、体部はナデを施している。色調は淡茶褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英細粒～小粒、角閃石細粒赤色細粒子が混入している。

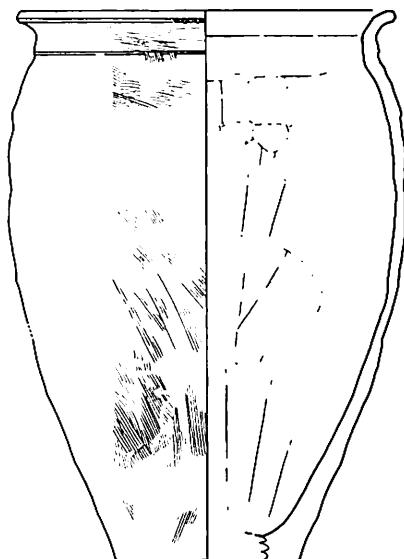
第16図4は鉢形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部で外反する。口唇先端は尖がり気味で丸味をもつていて。幅4cm程で輪積痕である繋ぎ目が見られ、段を有している。調整は内・外面共にナデを施している。色調は、内面淡黄茶褐色、外面淡灰褐色を呈しており、内面には煤が付着していた。胎土は砂粒を含む、石英小粒・角閃石微粒と赤色・白色粒子が混入している。

第16図5は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は若干いびつに仕上げている。また、口唇部直下に刻目を有しない突帯を施している。突出部分は若干長くしゃくり上がっている。調整は内面は丁寧なナデ、口唇部と外面は横ナデを施している。色調は内面黒色及び淡橙白色、外面赤褐色を呈しており、内面には煤の付着が認められる。胎土は砂粒を含む、長石・角閃石細粒と白色粒子が混入している。

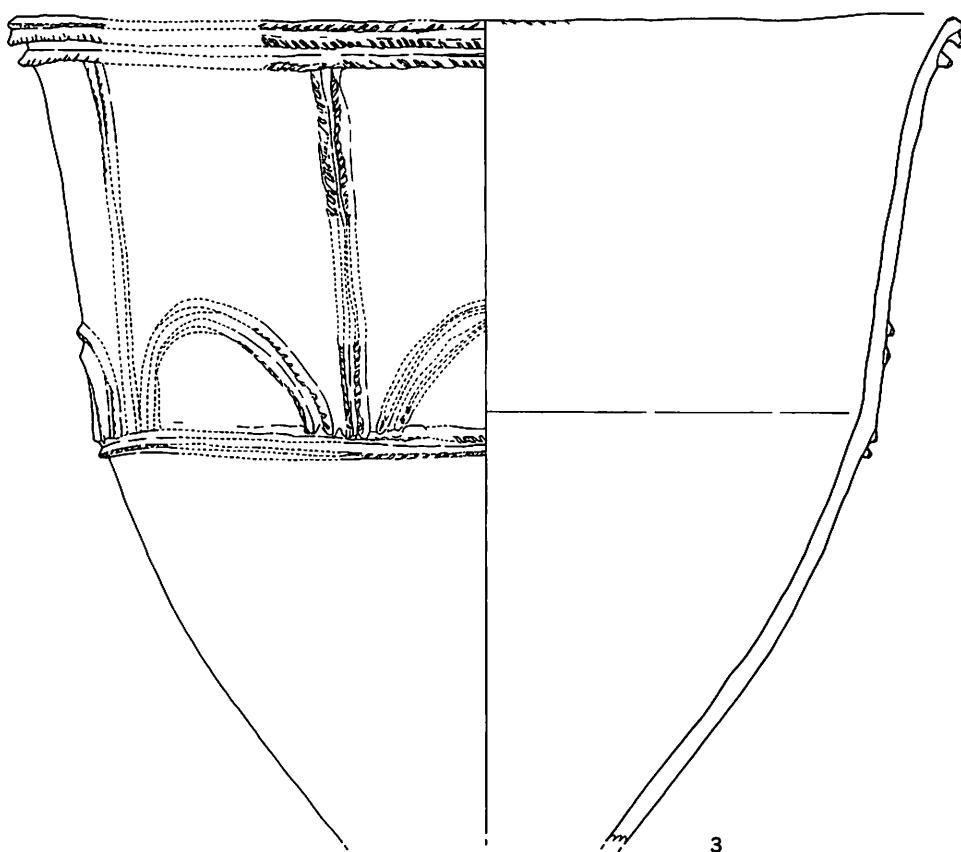
第16図6は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸味をもち直下には細かい刻目突帯を施している。調整は内外面共にナデ



1



2



3

0 20cm

第15図 SD02出土遺物実測図 1 (1/4)

を施している。色調は内面淡橙白色、外面淡橙灰色を呈しており、外面には黒班がある。胎土は砂粒を含む、石英・角閃石微粒と白色粒子が混入している。

第17図7は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は直線的に立ち上がり、口唇端部は丸味をもち、細かい刻目突帯を施している。調整は内・外面共にナデを施している。色調は内面淡茶灰色、外面淡茶褐色を呈している。胎土は石英・長石・角閃石細粒と赤色・白色粒子が混入している。

第17図8は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸味をもっている。口唇部直下に細かい刻目突帯を施している。調整は内・外面共にナデを施している。色調は淡橙白色を呈している。胎土は石英・角閃石細粒が混入している。

第16図9は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反しており、口唇部の上面は丸みを帯びている。口唇部直下に大きめの刻目を有した突帯が施されている。調整は内・外面共にナデを施している。色調は内面暗橙色、外面淡橙色を呈している。胎土は長石・角閃石微粒と白色粒子が混入している。

第16図10は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。口唇部は丸味をもち、直下に刻目突帯を施している。調整は内・外面共にナデを施している。色調は淡茶褐色を呈している。胎土は石英小粒、長石・角閃石微粒と白色粒子が混入している。

第16図11は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸味をもっている。口唇部直下に刻目突帯を施している。粘土の接合は、外傾接合である。調整は内・外面共にナデを施している。色調は淡茶褐色を呈している。胎土は砂粒を含む雲母細粒・角閃石微粒と赤色粒子が混入している。

第16図12は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は丸味をもち、口縁端部に細かい刻目突帯が施されている。調整は内・外面共にナデを施している。色調は内面淡茶褐色、外面淡茶灰色を呈している。胎土は長石・角閃石微粒と白色粒子が混入している。

第16図13は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部の器壁は厚く、若干内湾気味に立ち上がり、口唇先端部は丸味をもち、細かい刻目突帯を施している。調整は内・外面共に加工工具による縦方向の磨き風ナデを施している。色調は内面淡茶褐色、外面淡茶灰色を呈している。胎土は石英小粒、角閃石微粒と白色粒子が混入している。

第16図14は刻目突帯文甕形土器の口縁部である。小破片のため、復元口径は不明である。体部は若干内湾気味に立ち上がり、口唇先端部は尖がり気味に丸味をもち、口唇部下に刻目突帯を施している。

調整は内・外面共にナデを施しているが内面は特に丁寧である。色調は淡橙灰色を呈している。胎土は石英小粒、角閃石細粒と白色粒子が混入している。

第16図15は底部を欠いた刻目突帯文甌形土器である。復元口径27cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で若干内側に内湾し口唇部で丸味をもち、細かい刻目突帯を施している。粘土の接合は内傾接合である。調整は内面ナデ、口縁部で横ナデ、外面工具による磨き風ナデを施している。器壁は薄く仕上げている。色調は内面淡黄茶褐色、外面黒色及び淡黄茶褐色を呈しており外面に黒斑が認められる。胎土は石英小粒、角閃石細粒と黒色粒子が混入している。

第16図16は鉢形土器である。復元口径29.4cmを測る。底部は欠いているが、体部はハの字状に開き、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部と体部の接合部は沈線状に窪みが見られる。口唇部は丸味を有し、口縁の外面は加工具で削り出している。粘土の接合は外傾接合である。調整は内・外面共にナデ、口唇部は横ナデを施している。色調は淡黄褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英・角閃石微粒と赤色・白色粒子が混入している。

第16図17は小形壺形土器の底部である。底径は4.9cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、調整は内面ナデ、外面縦方向の磨き風ナデを施している。色調は灰白色を呈しており、内・外面には煤が付着している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒と赤色粒子が混入している。

第16図18は壺形土器の底部である。底径は不明である。体部は外反気味に立ち上がる。調整は内・外面共ナデを施している。色調は内面黒色、外面淡橙色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒が混入している。

第16図19は壺形土器の底部である。復元底径は7cmを測る。体部は八の字状に開き気味に立ち上がり、上げ底気味である。調整は内面磨き、外面ナデを施している。色調は内面淡褐色、外面淡赤褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石、長石細粒と黒色粒子が混入している。

第16図20は壺形土器の底部である。復元底径は6.7cmを測る。体部は八の字状に開き気味に立ち上がる。調整は内面ナデ・外面磨き風ナデを施している。色調は淡橙色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒と赤色・黒色粒子が混入している。

第16図21は壺形土器の底部である。復元底径は8.4cmを測る。体部は若干内湾気味に立ち上がる。調整は内・外面共に磨き風ナデを施している。内面に指押さえ痕がある。底部外面下端部全体に工具痕が見られる。色調は淡橙色を呈しており、内面に黒斑がある。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石・長石細粒が混入している。

第16図22は壺形土器の底部である。底部径は8.8cmを測る。底部は若干上げ底気味である。体部はハ

の字状に開いて立ち上がる。調整は底部基部で指押さえ後横ナデ、体部は内面ナデ、外面ナデ一部磨き風ナデが見られる。外面に指押さえ痕がある。色調は内面淡橙白色、外面淡橙灰色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英・角閃石細粒と赤色・白・黒粒子が混入している。

第16図23は壺形土器の底部である。底径は7cmを測る。体部は若干内湾気味に立ち上がる。調整は内面ナデ、外面ハケ目後ナデを施している。色調は内面淡橙白色、外面淡橙色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒が混入している。

第16図24は壺形土器の底部である。復元底径は9.4cmを測る。調整は内面にナデ、外面工具ナデを施している。又、外面下端部に工具痕が見られる。色調は内面灰褐色、外面淡橙白色を呈する。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒と白色粒子が混入している。

第16図25は壺形土器の底部である。底径は7.1cmを測る。調整は内・外面共工具ナデを施している。色調は内面淡橙白色、外面赤褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒が混入している。

第16図26は壺形土器の底部である。底径は7.85cmを測る。底部は円盤状の貼り付けを行っており、若干上げ底氣味である。調整は内外面共にナデを施している。色調は内面淡橙白色で外面淡赤褐色を呈している。外面には煤が付着している。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石・長石細粒と赤色・白色粒子が混入している。

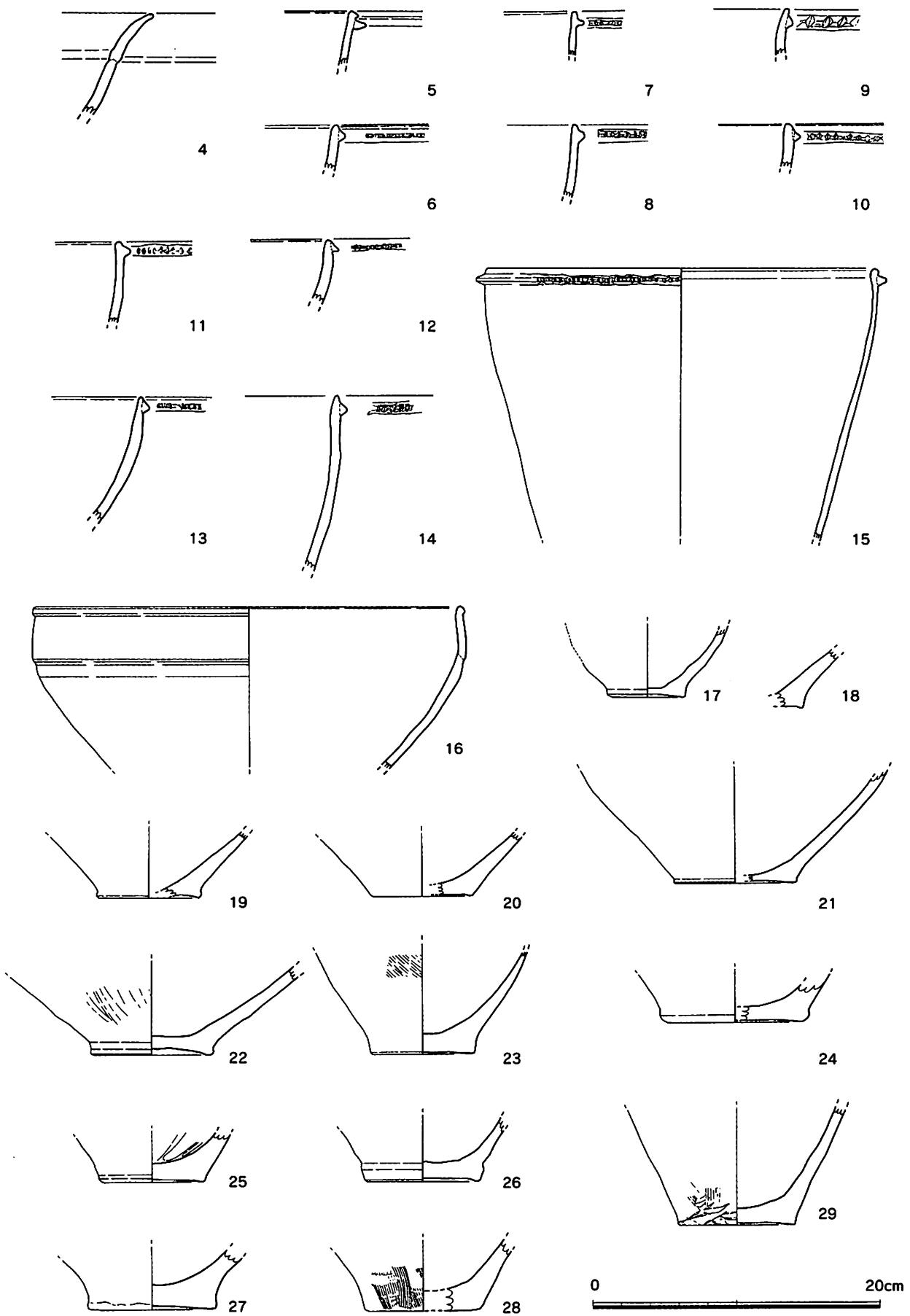
第16図27は壺形土器の底部である。底径は8.7cmを測る。体部は外反気味に立ち上がる。調整は内外面共工具ナデを施している。底部外面1cm上に工具痕が見られる。色調は暗橙色を呈している。胎土は石英小粒、角閃石微粒と赤色粒子が混入している。

第16図28は壺形土器の底部である。復元底径7.9cmを測る。調整は内面ナデ、外面ハケ目を施している。色調は内面暗橙色、外面橙色を呈している。胎土は石英小粒、角閃石細粒と白色粒子が混入している。

第16図29は壺形土器の底部である。底径7.9cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。調整は内面磨き風ナデで指押さえ痕を有し、外面ハケ目後ナデ、底部の基部にはヘラ工具による削りを施している。色調は内面黒色及び白橙色、外面白橙色を呈している。内面には黒斑がみられる。胎土は砂粒を含む、石英小粒、角閃石細粒と赤色・黒色粒子が混入している。

3 各遺構・包含層内遺物（第17図）

第17図1は下城式壺形土器の口縁部である。口唇部は平坦面を施している。口唇部と突堤に細かい刻



第16図 SD02出土遺物実測図 2 (1/4)

目が施されている。調整は内・外面共にナデ、色調は淡橙色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英小粒と黒色粒子が混入している。BCD-7地点の包含層より出土。

第17図2は古代土師器坏の口縁部小破片である。復元口径は不明である。口縁部はハの字状に立ち上がる。色調は白橙色を呈している。胎土は石英・角閃石細粒と白色粒子が混入している。出土地点は道路状遺構(SF01)の埋土中である。

第17図3は須恵器坏の口縁部である。小破片であるため復元口径は不明である。調整は内・外面共にナデ、色調は灰色を呈している。SD03より出土。

第17図4は青磁の小皿破片である。復元口径は8.8cmを測る。色調は青灰色を呈している。ABC-7・8地点の包含層より出土。

第17図5は土師器坏の口縁部小破片である。調整はナデ、色調は淡黄色を呈している。胎土は赤色・白色粒子混入している。表採である。

第17図6は瓦質ナベの突帶部分である。小破片のため、復元口径は不明である。調整はナデ、胎土は角閃石細粒が混入している。ABC7～10地点の包含層より出土。

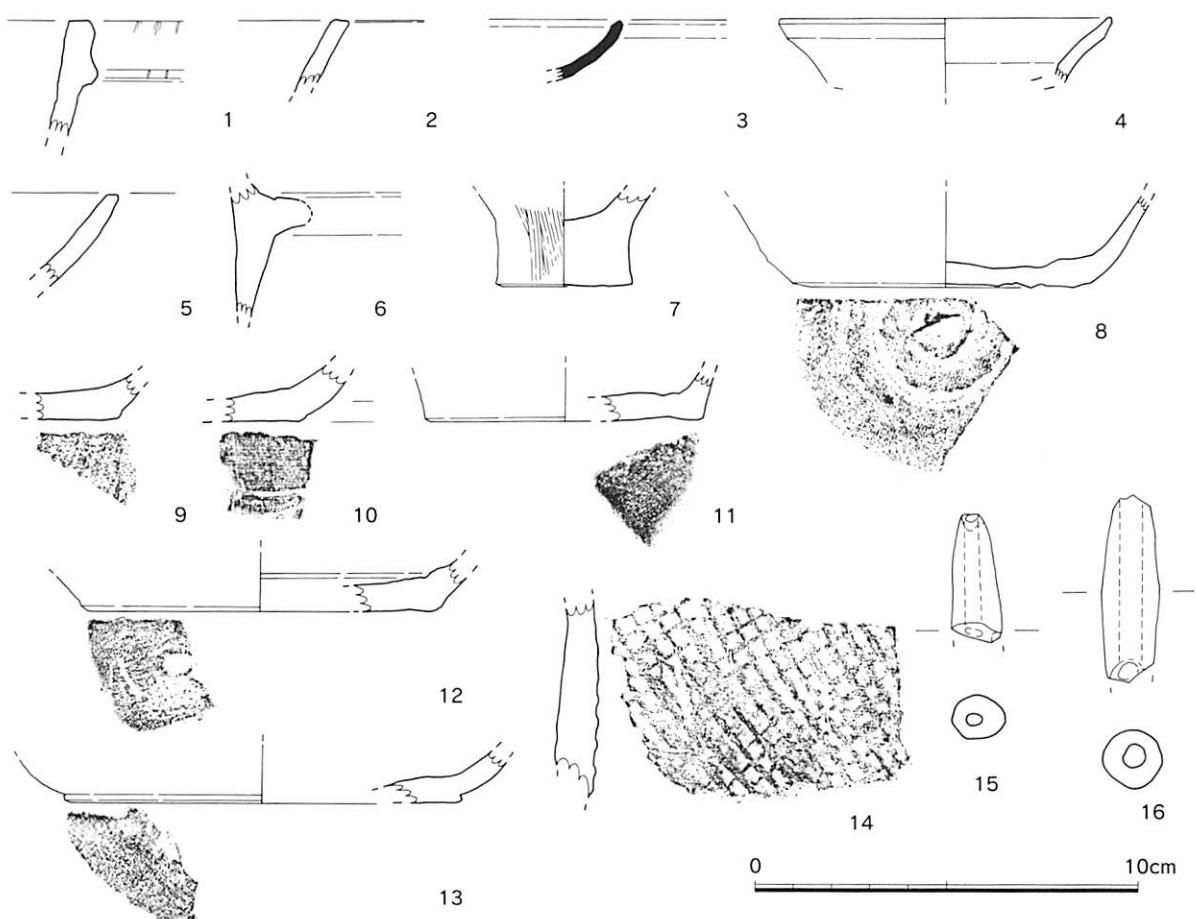
第17図7は壺形土器の底部である。底径は7.2cmを測り、底部の厚さ3.3cmを測る。調整は内面ナデ、外面ハケ目を施している。色調は内面橙色・外面淡赤褐色を呈している。胎土は石英・角閃石細粒と赤色・白色粒子が混入している。A-7地点より出土。

第17図8は古代土師器坏の口縁部を欠いた底部破片である。底部は回転ヘラ切りである。復元底径は7.8cmを測る。体部はハの字状に立ち上がっている。調整は内・外面共にナデ、色調は淡黄褐色を呈している。胎土は砂粒混入している。表採である。

第17図9は土師器坏の底部小破片である。底部は糸切り底である。調整はナデ、色調は淡茶褐色を呈している。SK04より出土。

第17図10は土師器坏の底部破片である。底部は糸切り底である。調整はナデを施している。色調は黄褐色を呈している。ABC-7・8地点の包含層より出土。

第17図11は土師器坏の底部破片である。復元底径は7.4cmを測る。底部は糸切り底である。調整は内・外面共にナデを施している。色調は黄褐色を呈している。胎土は砂粒混入している。ABC-7～10地点の包含層より出土。



第17図 その他の遺構出土遺物実測図 (1/2)



第18図 水田耕作土出土半錢実測図 (1/1)

第17図12は土師器壺の底部破片である。復元底径は9.2cmを測る。底部は糸切り底である。調整は内・外面共にナデを施している。色調は淡黄褐色を呈している。胎土は砂粒が混入している。E-6・7地点の包含層より出土。

第17図13は土師器壺の底部破片である。復元底部は10.2cmを測る。底部は糸切り底である。調整は内・外面共にナデを施している。色調は淡黄褐色を呈している。胎土は砂粒が混入している。ABC-7～10地点の包含層より出土。

第17図14は瓦質の甕形土器小破片である。調整は外面格子目叩きが施されている。胎土は白色粒子が混入している。ABC-7～10地点の包含層より出土。亀山焼きと思われる。

第17図15は土師質の土錘である。現存の長さ3.5cmで一部欠けている。最大幅1.35cmを測る。色調は淡茶褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英・角閃石細粒と赤色粒子が混入している。F-8・9地点の包含層より出土。

第17図16は土師質の土錘である。現存の長さ4.9cmで一部欠けている。最大幅1.5cmを測る。色調は茶褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英・角閃石細粒と赤色粒子混入している。F-8・9地点の包含層より出土。

第18図明治18年の半銭である。銅銭で外縁付近に1mm前後の孔を開けていた。大きさは2.25cmを測る。J-3水田耕作土中より出土。

4 第2号土坑 (SK02) 出土の遺物 (第19図)

第19図1は土師器壺の口縁部破片である。口唇部は丸味をもつていて、調整はナデ、色調は淡黄褐色を呈している。胎土は砂粒が混入している。

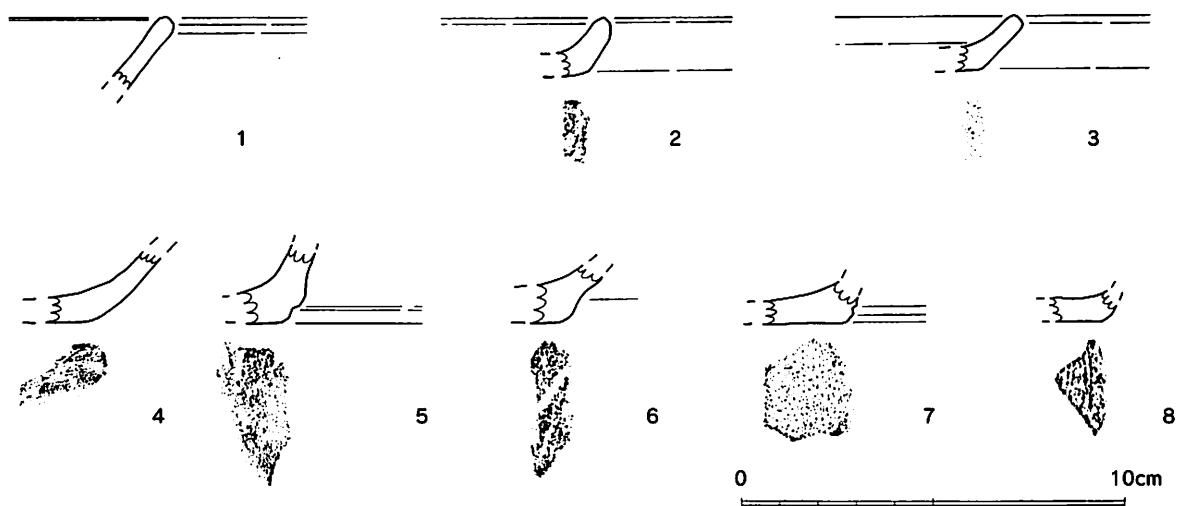
第19図2は土師器小皿の破片である。底部は糸切り底で口縁部にかけて直線的に短く立ち上がる。器壁は若干厚みをもつ。調整はナデ、色調は淡灰色を呈している。胎土はきめ細かな粘土で、石英・角閃石微粒が混入している。

第19図3は土師器小皿の小破片である。底部は糸切り底で口縁部にかけてハの字状に短く開く。口唇部は丸味をもつ、調整はナデ、色調は淡茶褐色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英・角閃石微粒と赤色粒子が混入している。

第19図4は土師器壺の底部破片である。底部は糸切り底であり、口縁部を欠いている。調整は内面横ナデ、外面ナデを施している。色調は淡黒茶色を呈している。胎土は砂粒を含む、石英細粒、角閃石微粒と赤色粒子が混入している。

第19図5は土師器壺の底部破片である。調整は内・外面共にナデを施している。色調は淡茶褐色を呈している。胎土は石英微粒、角閃石細粒と赤色粒子が混入している。

第19図6は土師器壺の底部小破片である。底部は糸切り底である。器壁は厚みをもつ。調整はナデ、色調は淡黄白色を呈している。胎土はきめ細かい粘土で石英・角閃石微粒と赤色粒子が混入している。



第19図 SK02出土遺物実測図 (1/2)

第19図 7は土師器壺の底部小破片である。底部は糸切り底で体部との接合面が見られる。調整はナデ、色調は淡黄白色を呈している。胎土は石英・角閃石細粒・長石微粒と赤色粒子が混入している。

第19図 8は土師器壺の底部小破片である。底部は糸切り底である。調整はナデ、色調は淡黄白色を呈している。胎土は石英・角閃石・長石が微粒混入している。

5 石 器

本遺跡から36点の石器が出土しており、石材・器種の面から2群に分類できる。それらは、出土した遺構や共伴した土器などから、縄文後期中葉と弥生前期の所産と考えられる。そのうち20点を実測したが、第18・19図が縄文時代後期のもので、第20図が弥生時代前期のものである。両者共に出土位置は、F・G-8・9からH・I-3～6グリッドを中心とする調査区の中央部付近に集中している。縄文時代の所産の遺構は確認されておらず、残存した包含層か、後代の遺構で攪乱された場合にはその遺構中から出土したものと推測される。弥生時代では、第1・2号溝状遺構などの遺構も検出されており、包含層ばかりでなく、それらの遺構中からも出土している。

1) 事実記載

第20図1 道路状遺構の側溝 P2

結晶片岩製の石錐。上端・下端ともに刃部の可能性あり。上端右半は折れによる欠損。内側への平坦加工の後、周縁加工が施されているが、左側縁のみ裏→表の順だが、他の周縁は表→裏の順で加工されている。また、上端中央、左側中央に打ち欠きによる抉りを入れている。

第20図2 H・I-3～6グリッド一括

角閃石安山岩製の扁平打製石斧。刃部・基部とも欠損し、中央部のみ残存。図の右側は表から裏への、左側は裏から表への折れによって欠損。表裏面とも大きく自然面を残し、扁平な礫を素材にしている

と考えられる。裏面の自然面部分は焼けによる赤化が顕著で、表面も若干赤化。

第20図3 第3号溝状遺構一括

結晶片岩製の扁平打製石斧。上端の基部側は折れによる欠損。内側への平坦加工→裏面の周縁加工→表面の周縁加工の順に加工が施されている。

第20図4 第4号溝状遺構一括

角閃石安山岩製の扁平打製石斧の欠損品ないしは未成品。上端及び右端縁は折れによる欠損。裏面も右側縁の折れと同時の剥落面の可能性大。上端は裏から表への折れ。

第20図5 F・G-9 グリッド一括

結晶片岩製の扁平打製石斧の刃部。基部側の上端は裏から表への折れによる欠損。

第20図6 F・G-9 グリッド一括

結晶片岩製の扁平打製石斧の刃部側。基部側の上半は裏から表への折れによる欠損。表面は加工以外自然面が大きく残存する。

第20図7 E・F-2 グリッド一括

砂岩製の扁平打製石斧の未成品と考えられるが、形状が一般的ではなく、左側縁の抉り状の加工から十字形石器の未成品である可能性も考えられる。下端は表から裏への折れによる欠損。表裏面とも自然面を大きく残存し、扁平な礫を素材にしていると考えられる。表面は焼けによる赤化が認められる。

第20図8 第4号溝状遺構一括

砂岩製の磨石。自然礫を用い、下端に磨り面・敲打痕が認められる。

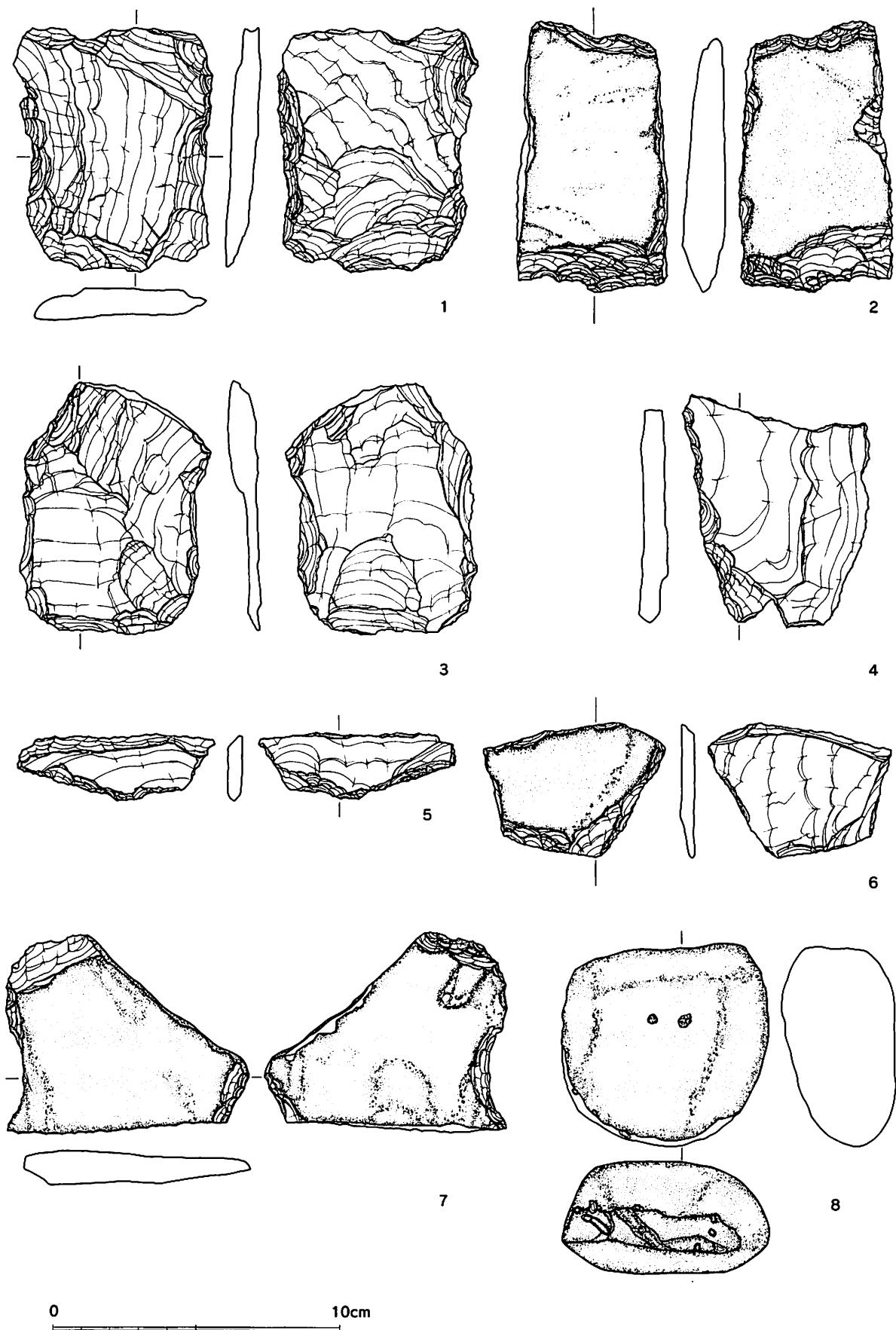
第21図9 F・G-7 グリッド一括

花崗岩製の石皿。左側縁及び右側縁の上半は折れによる欠損。表裏面共に敲打痕が見られるが、表面は殊に顕著に見られる。

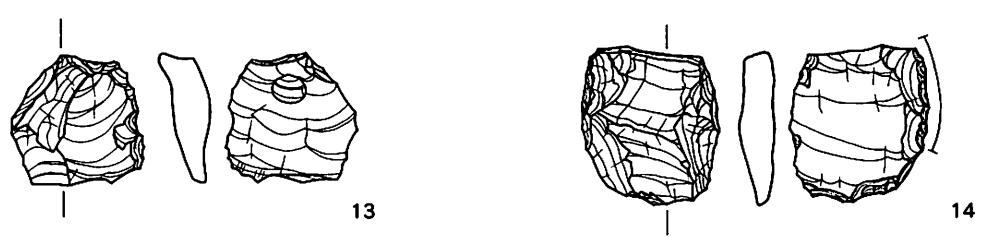
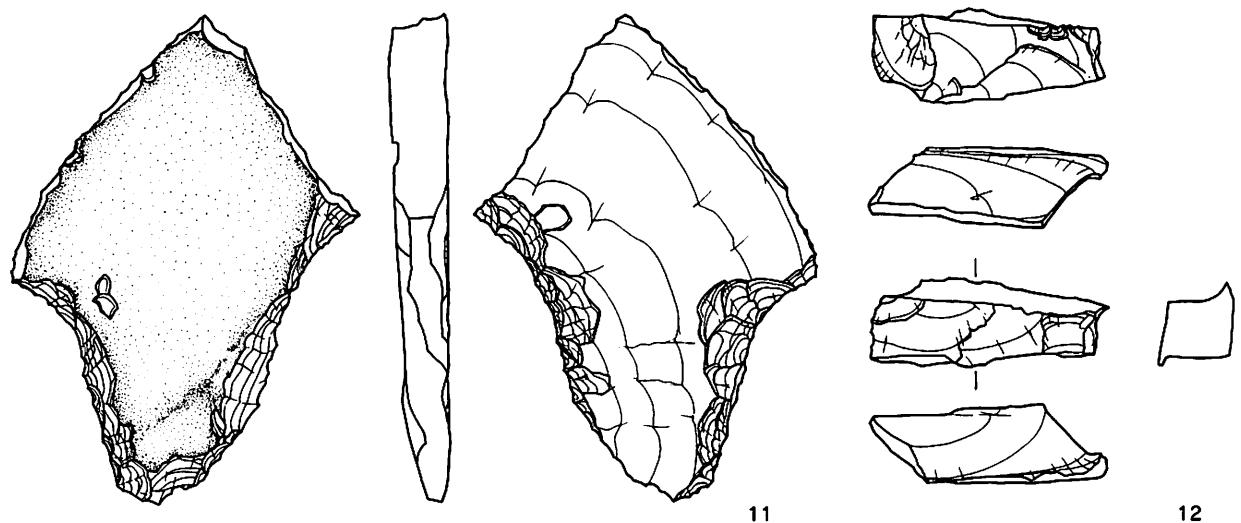
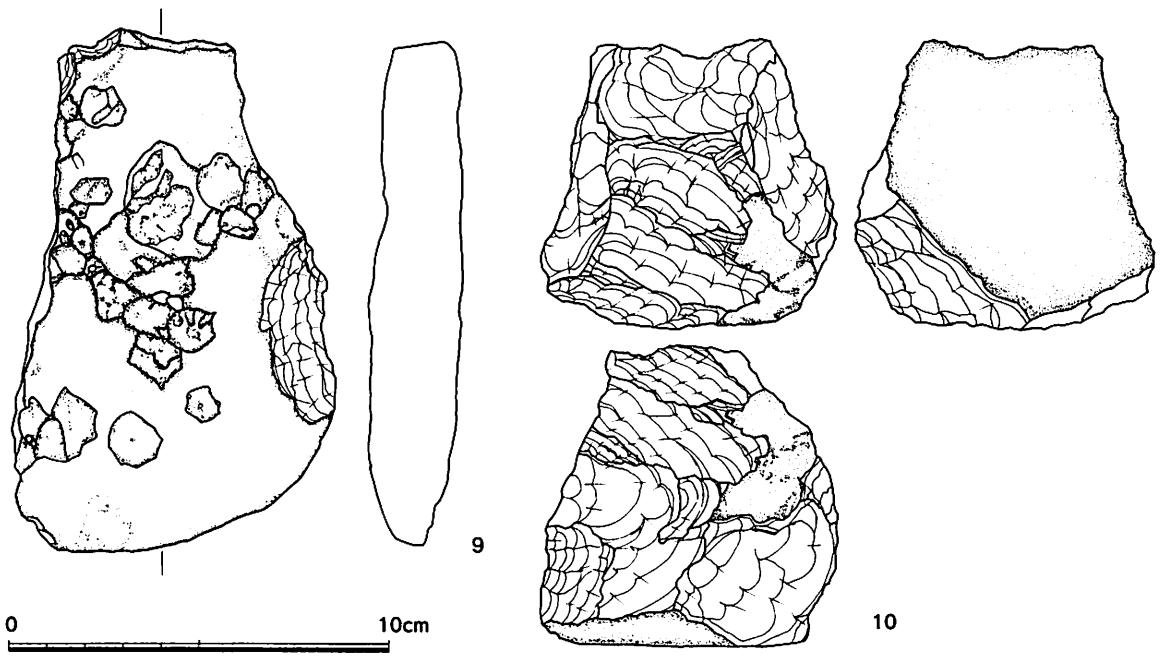
第21図10 F・G-8 グリッド一括

角閃石安山岩製の石皿。上端・左右側縁は破碎している。表面は自然面以外、焼けによる剥落した面で、下端のみ整形加工の面。左側縁の破碎面を除き、焼けによる赤化が認められる。即ち、破碎の後に焼け、左側縁のみ焼けによって破碎されたと考えられる。表裏面の自然面には使用による磨きが看取される。

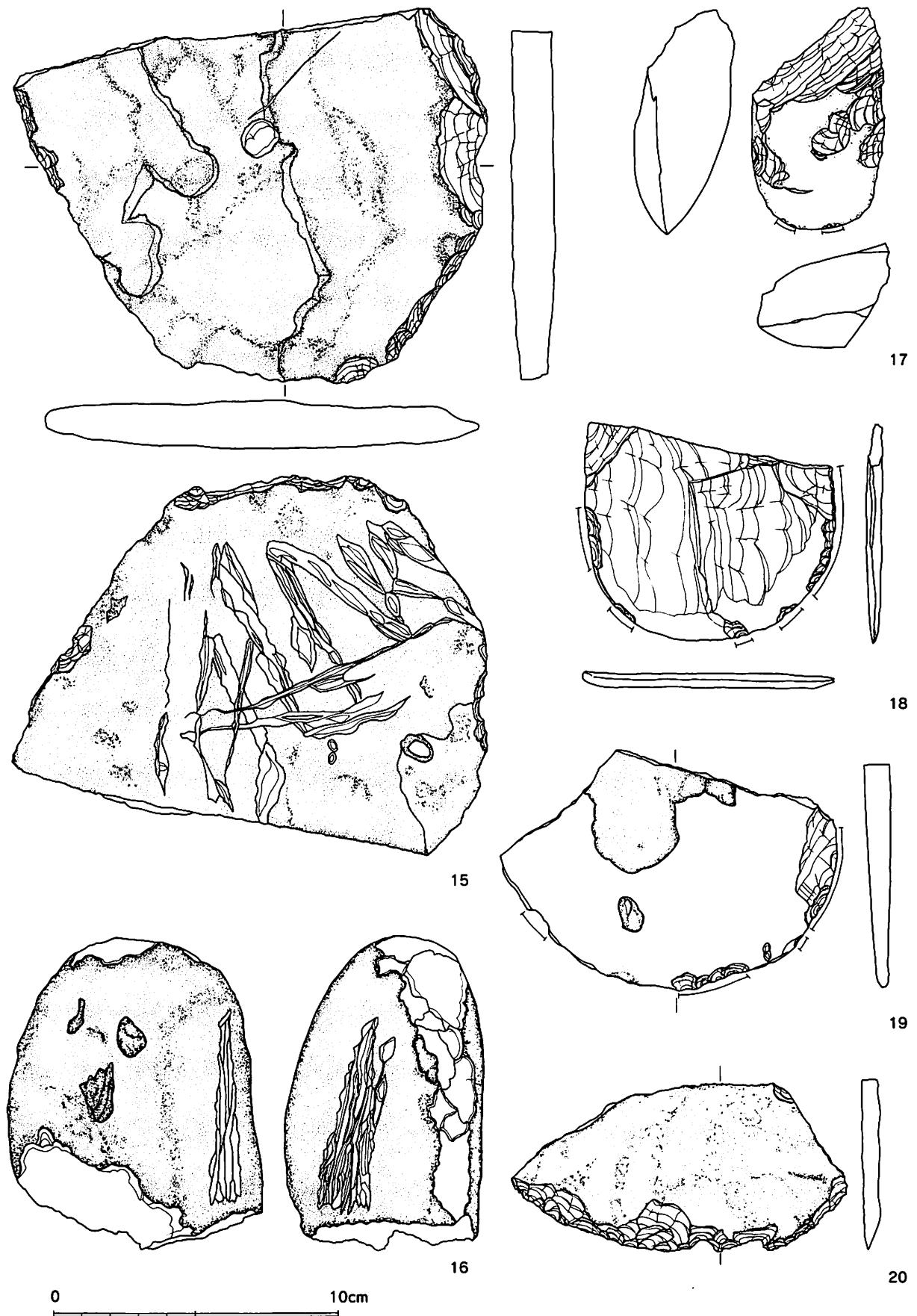
第21図11 F・G-9 トレンチ内一括



第20図 石器実測図 1 (1/2)



第21図 石器実測図 2 (9~10は1/2・11~14は2/3)



第22図 石器実測図 3 (1/2)

角閃石安山岩製の十字形石器。上半は折れによる欠損。下半稜側縁には表裏面からの入念な調整が見られる。右側縁は裏面→表面の順で、左側縁は表面→裏面の順で加工が施されている。表面には自然面が大きく残存し、輪切りに近い剥片を素材としている。

第21図12 第4号溝状遺構一括

金山製サヌカイト製の碎片。大形の剥片が剥離の衝撃の際に破碎したものと考えられる。

第21図13 第4号溝状遺構一括

姫島産黒曜石製の剥片。下端は表から裏への折れによる欠損。打面は残存し、複剥離打面。

第21図14 第4号溝状遺構一括

金山産サヌカイト製と考えられる使用痕を有する剥片。右側縁は裏から表への、上端は表から裏への折れによる欠損。

第22図15 F・G-9グリッド一括

角閃石安山岩製の砥石。上半は表から裏への折れによる欠損。下端左半は裏から表への折れによる欠損。表面は自然面、裏面は剥離面だが、周縁加工→全面磨き調整が施されている。裏面中央部に研ぎによると考えられる擦痕が認められる。

第22図16 第2号土坑一括

角閃石安山岩製の砥石。下端は破碎による欠損。右側面に金属質のものによると推測される深い擦痕が認められる。その下側には擦り面も看取される。

第22図17 第2号溝状遺構 P2

緑泥片岩製の磨製石斧の刃部側。基部側の上半は裏から表への折れによる欠損。若干の刃毀れあり。

第22図18 第6号土坑 P1

結晶片岩製の磨製石斧の刃部。基部側は表から裏への折れによる欠損。刃部から左右側縁に使用痕が顕著に認められる。かなり薄身で、用途は不明。

第22図19 第6号土坑一括

角閃石安山岩製。表裏面とも磨きによって平坦化しており、周囲が弧状となっているため、刃部はまだ形成されておらず、第22図18のような扁平な磨製石斧の未成品であると考えられるが、第22図15のような砥石である可能性もある。上半は折れによる欠損。表裏面とも使用痕と思しき剥離痕が全周縁に認められる。表面中央部は加工痕が深いための磨き残しである。

第22図20 第4号溝状遺構一括

角閃石安山岩製の扁平打製石斧の未成品ないしは石包丁状石製品と考えられる。上端・左右側縁は折れによる欠損。裏面は節理に近い剥離面で、表面は加工部位以外自然面が大きく残存。下端には表裏面からの加工が認められ、表一裏の順で加工を施している。

2)まとめ

(1) 縄文時代後期

当該期の遺構も検出されておらず、遺跡の全体が調査されたわけでもないので、器種・石材組成の全体を反映してはいないと考えられるが、それにしても縄文時代後期の一般的な組成からすると不足が多すぎると思われる。

即ち、先ず器種では、石鎌・石匙といった代表的な剥片石器を欠く。一方で、扁平打製石斧が7点とトゥールの中では最も多く、縄文後・晩期の特徴をよく示している。また、磨石・石皿といった礫石器が2点ずつ存在し、この組成の中では過不足のない現れ方と推察される。そういう状況からすると、やはり剥片石器の組成からの欠落が目立つ。だが、姫島産黒曜石や金山産サヌカイトという当該期の剥片石器の代的な石材の剥片・碎片が若干検出されており、本遺跡に剥片石器が存在しなかったとは考えられない。とすると、剥片石器を製作・加工した地点は、調査が及ばなかった区域に存在したと推測される。

次いで、石材であるが、縄文後・晩期の剥片石器の代的な石材である姫島産黒曜石と金山産サヌカイトの両者が認められる。が、大分平野では圧倒的な比率を占める一般的な姫島産黒曜石（志賀智史2002）が僅か3点の出土に留まり、約10%を占めるに過ぎない。やはり、剥片石器を製作する別の地点を想定するのが妥当だと考えられる。香川県の金山産サヌカイトは、約20%を占有し比率的には申し分ないが、やはりトゥールが存在したものと思われる。一方で、扁平打製石斧の過半を占める結晶片岩であるが、縄文時代以降も大分県域では大形石器の代的な石材であり、佐賀関町の海岸地域を中心として採取され、搬入されたと推測される。

最後に、器種と石材の関係から見てみる。剥片・碎片の存在する姫島産黒曜石・金山産サヌカイト・結晶片岩は本遺跡で実際に石器の製作が行われたと推察される。即ち、前・中者は別地点で石鎌などの剥片石器が、後者は扁平打製石斧が製作される。しかし、扁平打製石斧や十字形石器の石材となっている角閃石安山岩は剥片・碎片が見られず、本遺跡へは製品の形で搬入された可能性が高い。扁平打製石斧・石皿の素材となっている砂岩も同様である。

(2) 弥生時代前期

明確に弥生時代の所産と考えられる石器は、6点のトゥールとそれらに近い石材の剥片類2点の計8点である。うち2点は砥石で、第22図16は深い擦痕から金属製品の研ぎに用いられたと考えられる。

残りのうち3点は磨製石斧であるが、一般的なものは第22図17の蛤刃のものだけで、他の2点（第

表1 石器器種・石材組成

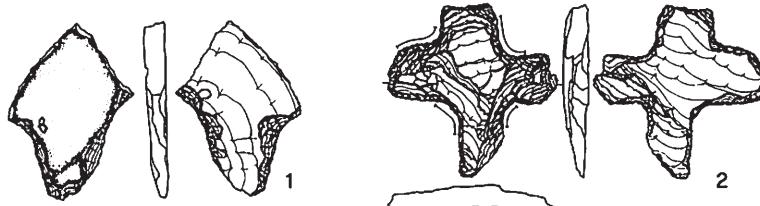
器種	石材	姫島産黒曜石	金山産サヌカイト	結晶片岩	角閃石安山岩	安山岩	砂岩	花崗岩	合計
扁平打製石斧			3	3		1			7
十字形石器				1					1
石錐			1						1
使用痕剥片		1							1
剥片	2	4	4		1		1		12
碎片	1	1							2
磨石						2			2
石皿				1			1		2
合計	3	6	8	5	1	3	2	28	

22図18・19) は扁平で割合大形であると想定され、他遺跡では殆ど見出せない種類のものである。その用途であるが、とうてい樹木の伐採とは考えられない。形状・扁平さ、また石包丁状石器とした第22図20の存在を考え併せてみると、穿孔は認められず、大きさの面でも一般的ではないが、磨製の石包丁状石器であり、稲の穂摘み用ではないだろうか。すると、3点の石包丁状石器からして、本遺跡の水稻耕作との関連が推測され、弥生時代前期の所産とされた第1・2号溝状遺跡が水田の用水路である可能性も示唆される。いずれにしろ、磨製扁平石斧が2点とも欠損品ないし未成品であり、これから同様な石器の完形品の出土と集積が望まれる。

6 上七曾子遺跡出土の十字形石器について

上七曾子遺跡の縄文包含層において1点の十字形石器が、北久根式土器、西平式土器を伴い出土している。それは、概ね縄文時代後期中葉に位置づけられる。十字形石器の出土時期としては、早い段階のものである。表2と第23・24図のように、大分県内出土の集成を試みた。出土の十字形石器は、17遺跡27例をあげられる。今回、図示していないが、大野郡緒方町の大石遺跡においても、土偶、勾玉、管玉に伴って出土している。以下、これら十字形石器の特徴をあげてみる。

まず、十字形石器の大きさとしては大・中・小の3タイプがある。大きいものとしては、大野町宮地前遺跡出土の最大長19.6cmの例があり、小さいものは、香々地町坂口遺跡出土の最小長6.4cmがある。しかし、10cm前後の中型サイズが、各遺跡とも圧倒的に多くみられたことから、中型品が基本サイズのようである。大型品は、丁寧に作られ、小・中型品には、比較的雑な作りのものが多く見ら



第23図 県内出土十字形石器実測図 1 (1/4)

第24図 県内出土十字形石器実測図 2 (1/4)

表2 十字形石器一覧表

番号	出土地点	縦長(cm)	横長(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	時期	備考
1	大分市・上七曾子遺跡	(9.55)	(6.85)	1.15	81.5	角閃石安山岩	北久根・西平	上半欠損
2	大分市・横尾遺跡	9.40+α	9.40	1.4	84	結晶片岩	西平	表採
3	千歳村・鹿道原遺跡	8.7+α	4.6+α	0.9	39.5	緑色片岩	三万田～晚期	
4	"	7.4	7.25	1.05	36.5	結晶片岩	三万田～晚期	
5	大野町・光昌寺遺跡	(7.5)	(7.5)	0.8		結晶片岩	西平～三万田	表裏とも研磨
6	"	(7.0)	(6.8)	0.9		輝石安山岩	西平～三万田	土偶・円盤形石器出土
7	"	7.9	8.2	1.0		輝石安山岩	西平～三万田	土偶・円盤形石器出土
8	"	11.8	(7.9)	1.1		輝石安山岩	西平～三万田	土偶・円盤形石器出土
9	緒方町・木野遺跡	14	11.8+α	0.7		石英粗面岩	西平～三万田・御領	
10	大野町・杉園遺跡	11.1	(7.95)	1.0	75	安山岩	西平～三万田	円盤形石器出土
11	大野町・神原遺跡	9.5	9.7	1.3	90	安山岩	三万田	円盤形石器出土
12	大野町・駒方C遺跡	11.6	12.8	1.2	134	安山岩	三万田	土偶・円盤形石器出土
13	野津町・内河野遺跡	10.5	9.9	0.6	52	緑色片岩	三万田	土偶出土
14	直入町・横枕遺跡	4.2+α	4.0+α	1.1+α	34	安山岩	三万田～晚期	石剣出土
15	大野町・光昌寺遺跡	(6.3)	6.0	0.9		結晶片岩	西平～三万田	表裏とも若干研磨
16	野津町・内河野遺跡	6.5+α	5.7+α	1	45	黒色片岩	三万田	一部のみ残存 土偶出土
17	野津町・内河野遺跡	14.3	12.3	1.5	158	粘板岩	三万田	土偶出土
18	宇佐市・尾畠遺跡	7.8	4.0	0.6	18.1	結晶片岩	晩期	円盤形石器・土偶とともに多量出土
19	宇佐市・尾畠遺跡	9.9	6.7	1.0	69.6	結晶片岩	晩期	円盤形石器・土偶とともに多量出土
20	大野町・宮地前遺跡	9.0	8.0			結晶片岩	三万田	抉入部表裏若干研磨・表採
21	宇佐市・尾畠遺跡	10.1	8.3	1.5	102.3	結晶片岩	晩期	円盤形石器・土偶とともに多量出土
22	香々地町・坂口遺跡	6.2	6.7	1.5		結晶片岩	晩期Ⅱ期	円盤形石器出土 掊入部表裏研磨
23	大分市・大分川河川敷採集	(9.0)	10.8	1.1		結晶片岩		抉入部及び先端部研磨・表採
24	国見町・陽弓遺跡	7.5	8.7	1.4	95	結晶片岩	三万田	土偶出土
25	大野町・宝福寺遺跡	9.6	(6.8)	1.2		輝石安山岩		三頭石器・表採
26	大野町・宮地前遺跡	19.6	(12.6)	1.0		結晶片岩	三万田～晩期	表裏面研磨
27	竹田市・上畠遺跡	18.2	(11)	1.8		緑色片岩	三万田?	抉入部表裏研磨・表採

れる。

石材としては、結晶片岩・安山岩・緑色片岩・粘板岩など各種の石材が使用されている。なかでも、結晶片岩と安山岩の使用が多く、扁平礫での加工・研磨が容易であるという観点から石材を選んでいえると言える。晩期になると、安山岩よりも結晶片岩の使用が多くなる。

十字形石器には、抉入部に若干の研磨を施しているものも認められる。刃部（頭部）の形状が弧状になるもの、直線状となるものがある。

刃部に使用痕が認められるものや、刃部（頭部）が、欠落しているものがあり、十字形石器がなんらかの道具として使用されたものであることを示唆している。

十字形石器は、縄文時代後期後葉から晩期前半の遺跡において、打製石斧・土偶・円盤形石器・勾玉・石劍に伴って出土する場合が多い。三万田式の時期に盛行し、晩期前半以降は姿を消す傾向にある。県下の広い範囲から出土しているが、大野川中流域からの出土が顕著である。もっとも、これは縄文時代後期の遺跡が多く分布する事による、現象かもしれない。

十字形石器の用途としては、土掘り具としての利用も考えられるが、結晶片岩など脆弱な石材が使用されている事や小形品が多いといった点で、この解釈にも難がある。

勾玉・土偶・円盤形石器・石劍などと同一遺跡で出土する例が多く、祭祀又は呪術具としての特殊な用途も考えられる。いずれにしても、こうした遺物が出現してくる背景として、生業の変化に伴うなんらかの文化的変容を想定したい（松本；2000）。

とはいえ、十字形石器の具体的用途を解明するのは困難であるといえよう。今後の解明を待ちたい。

【参考文献】

- 栗田勝弘 2001「鹿道原遺跡発掘調査報告書」文化財調査報告書第VI集 千歳村教育委員会
- 後藤一重 1985「内河野遺跡」「野津川流域の遺跡VI」大分県野津地区土地改良事業関係遺跡群発掘調査報告書 野津町教育委員会
- 後藤一重 1995「坂口遺跡」「香々地の遺跡II」香々地町文化財調査報告書第2集 香々地町教育委員会
- 小林昭彦 1995「尾畠遺跡」「一般国道10号 宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書（3）」大分県教育委員会
- 坂本嘉弘 1984「大野原の先史遺跡」「大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書」大分県文化財調査報告第65輯
- 潮見浩 1985「深訪 縄文の遺跡 西日本篇」有斐閣選書R34
- 高橋徹也 1988「上畠遺跡」「菅生台地の遺跡」竹田市教育委員会
- 高橋信武 1988「横枕遺跡」「日向塚遺跡」大分県直入郡直入町所在の発掘調査報告書 直入町教育委員会
- 鳥養孝好 2000「大野川流域に生きる人々」－考古学・民俗学・社会人類学的研究・文化財保護－ 鳥養孝好先生還暦記念事業会
- 松木直子 2000「認知考古学の理論と実践的研究」縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス 九州大学出版会
- 宮内克己 1983「第三章第四節二（三）祭祀具・装身具」「大分県史 先史篇I」 大分県
- 諸岡郁 1995「光昌寺遺跡」「大野地区遺跡群発掘調査報告書II」 大分県大野町教育委員会
- 綿貫俊一 1991「川南原遺跡群発掘調査報告書」大分県文化財調査報告書第84輯 大分県教育委員会

第IV章 まとめ

この遺跡は、『和名抄』にみえる荏隈郷に属しており、鎌倉時代にも国衙領であったことが『弘安図田帳』でみられる。また、18世紀末の『豊後国志』に「豊後国府、今古国府村是れ其の址也」と記されおり、このことから、古国府地域を国府跡としての推定地とされてきたところである。

しかし、古国府での豊後国府跡は、いまだ確認されていないのが現状であるが、ここ近年の発掘調査で羽屋井戸・園地区を中心に7世紀代の掘立柱建物跡群が確認されており、この遺構の性格については、国衙の前身である評衙の関連遺構か、大分君一族の本貫地として考えられている。これらは、大分君恵尺の墓と判断される畿内系終末期古墳である古宮古墳の造営が根拠となっている。この7世紀代掘立柱建物跡群の遺構の存在によって、古国府地域の遺跡を考える上で一つの光明がさしたことになる。また、大分県教委が平成7・8・9年度に渡り、210号線羽屋工区道路改良事業に伴う発掘調査を字上芦原・字土毛・字煤田・字鋤崎・字甲斐本地区で行っており、この調査区は当該調査区の西側にあたり、遺跡の性格については、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代の遺構及び遺物が出土している。また遺構については、弥生人の足跡や溝状遺構等が確認されている。

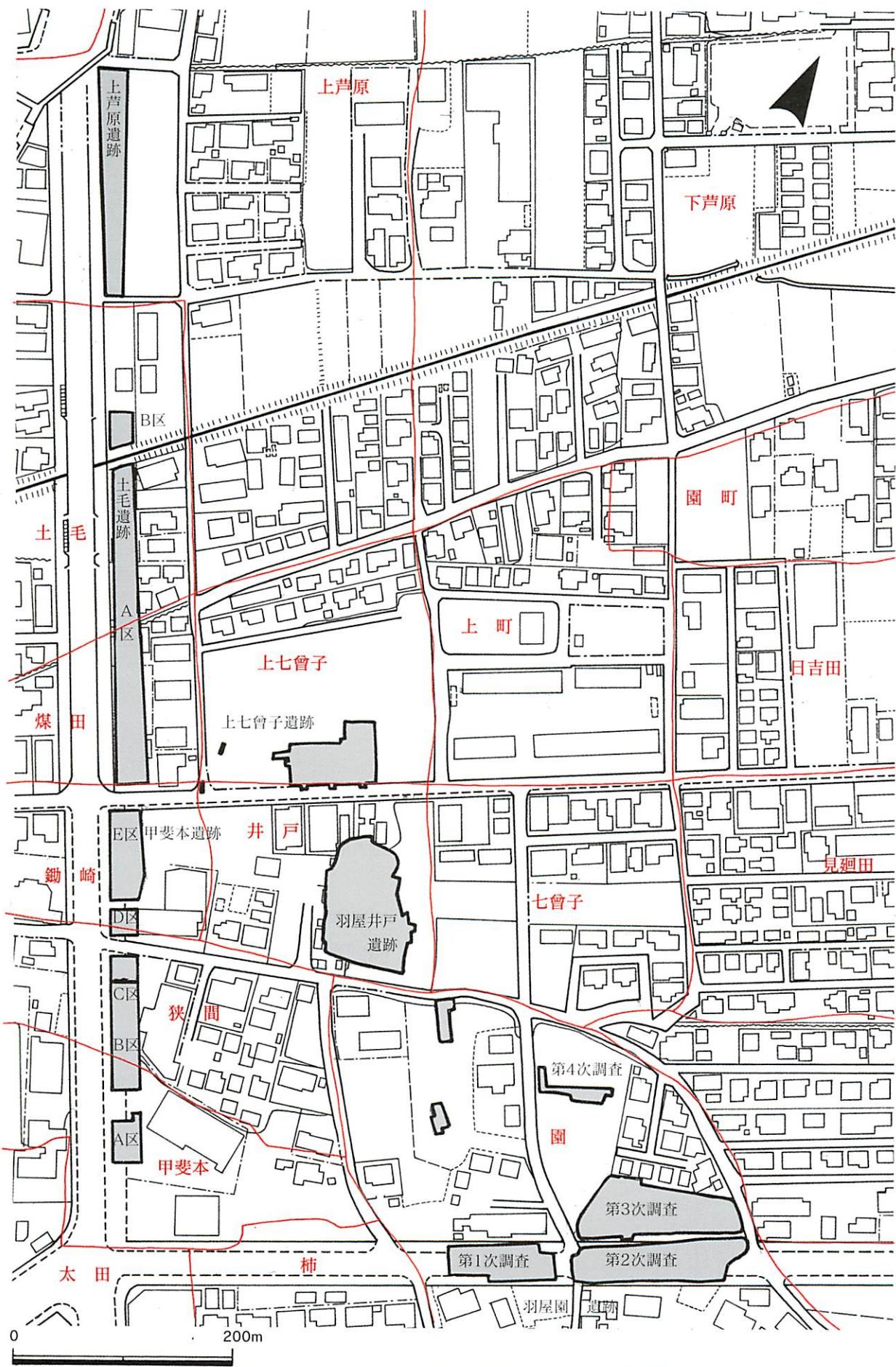
このため、隣接している当該調査区の遺構状況については、南北と東西方向の土層断面の観察から、南西側の旧地形が低くなっていること、東側と北側では高くなっていることが判明した。低くなる旧地形については、暗黒灰色粘質の堆積土からみて、旧地形は低湿地である沼地の状況がみられた。

弥生時代前期から中世にかけての遺構面については、後世の水田耕作地等を造るために削平が成されており、遺構の遺存状況は良好でなかったが、今回の調査では、深く掘られた溝状遺構・土坑・柱穴跡等を検出しておらず、少ない遺構の存在であったが、貴重な調査成果を得ることが出来た。とくに、市内でも数少ない弥生時代前期の溝状遺構（SD02）と特徴のある遺物の出土である。ここでは、遺構面を大規模な削平等により、竪穴住居跡等の生活遺構は確認されなかったが、おそらく2号溝（SD02）については、集落を囲むための施設として使用されたものであろうと考える。

大分県教委のF区調査（字煤川）で確認されている東西方向の溝1と当該調査区での同方向の溝状遺構4号溝（SD04）を確認しているが、時期に大きな差が生じている。溝1（F区）については、幅2.2m、深さ0.4mの規模で断面逆台形を呈しており、水田盤直下にあたる溝上層より祭祀に使用された可能性のあるミニチュア土人形等が検出され、7世紀初頭前後の時代が比定されており、この溝1を評衙地割と深い関係にあると考えているが、今回の調査では、SD04が溝1と同様な時期の成果を得ることができなかった。

SD04の土層断面形状から見ても古代の道路状遺構と側溝とSD03を切っており、遺物も古代の遺物は皆無であり、糸切り底の底部等が少量であるが確認されていることなどから、このSD04は、中世時代の遺構と比定した。溝状遺構は古代の道路状遺構と平行して掘られており、古代の条里地割に載っていることが明らかになった。

古代の道路状遺構については、市道や旧水田耕作等で削平され、遺存状況は良好でなかったが、道路側溝が施されており、道路幅については、調査区外のため全体の規模は不明であるが、道路状遺構は、現道（市道）の直下になっていることから、現道が古代の道路状遺構を踏襲する形で造られていることが判断できる。



第25図 古国府遺跡群字図及び周辺調査地点位置図 (1/5,000)

また古代遺構の展開については、道路状遺構を境にして、南寄りに展開している羽屋・井戸遺跡や園遺跡から区画性のある掘立柱建物跡群が検出されており、この南側の地域に展開することが今回の調査で明らかとなった。

今回、確認された道路状遺構については、ほぼ直線状に条里地割にのっており、上野岩屋寺遺跡の西側に高坂横道として比定される道が所在している。この道沿いに高坂駅が推定できる。高坂横道が所在する岩屋寺石仏から字鋤崎まで、ほぼ直線状に条里地割にのって走っている官道と考えられる。おそらくこの直線状の官道は、三ヶ田町交差点から賀来まで延びていたと考えられる。

弥生時代の溝状遺構(SD02)より出土した遺物については、下城式土器が出現する前段の一括遺物資料である。この資料を考える上で、弥生早期から前期の下城式土器出現までの弥生土器編年を行っている高橋徹氏の編年にしたがって当該遺物を当てみると、大分県史『先史篇II』の第一章弥生時代・第二節弥生文化の成立の中で、II期-1（前期初頭～中葉）の早期遺構「下城式」成立以前の段階で、ほぼ北部九州の板付I式～板付II式aの時期に対応するものと考えるとしており、また曲遺跡報告で第IV章付論の中で、下志村遺跡出土土器編年でII期-1に対応できるものが好資料として包含層から確認されており、刷毛目を施す刻目突帯甕が明らかになった意義は非常に大きいと報告されている。

今回は溝状遺構(SD02)より一括資料（第15・16図）としてまとまって出土したものは、このII期-1の時期に位置づけられる良好な資料である。

【参考文献】

- 真野和夫・讚岐和夫 1982 「古宮古墳」 大分市教育委員会
「大分市史」 上巻 1987 大分市
高橋徹 1989 「大分県史 先史篇II」『第1章弥生時代・第2節・2 刻目突帯文土器と下城式土器』 大分県
坪根伸也・池邊千太郎 1992 「園遺跡」 大分市教育委員会
塙地潤一 1995 「上野岩屋寺遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報6』 大分市教育委員会
讚岐和夫 1996 「羽屋・井戸遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報7』 大分市教育委員会
坪根伸也・塙地潤一 1996 「豊後國府推定地周辺の発掘調査II」『大分県地方史第163号』 大分県地方史研究会
高橋徹・塔鼻光司 1996 「曲遺跡」九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会
塙地潤一 1997 「羽屋・園遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報8』 大分市教育委員会
村上久和・江田豊・吉田博嗣 1999 「古国府遺跡群」 大分県文化財調査報告書第104集 大分県教育委員会

第V章 上七曾子遺跡2号溝(SD02)出土の弥生土器について

I 上七曾子遺跡出土土器の様相

大分市域における、弥生時代早期の土器について、高橋 (1980) が下黒野遺跡出土の遺物を用い「下黒野式」を設定し、その編年的位置づけを考察している。しかし、良好な資料の欠如により「下黒野式」以降の様相がはっきりしない状況であった。その後、荏隈杉下遺跡・二反田遺跡、種田市遺跡・種田平石遺跡・一方平IV遺跡・下志村遺跡・東田室遺跡第2次調査など、近年良好な資料を含む遺跡が発掘され、坪根 (2000) や高橋 (2000・2001) により土器編年案が提示され、様相が解明されつつある。

今回、上七曾子遺跡において、弥生前期に比定される良好な資料が2号溝(SD02)より出土した。2号溝(SD02)は、1号溝(SD01)を切って造られており東西に延びている。溝の側面、底面には灰白色粘土が貼られており、防水機能の強化を考えた上で、より丁寧に造られたものである(第8・9図参照)。

遺物は溝の西側の限られた範囲(G～F-1～5)から廃棄された状況で検出された(第4図)。なかでも壺・甕(第15図1・2)各1個体がまとまった状況で出土しており、他の破片資料とは違う出土傾向が見られる。時期差も想定されるが、取り上げ遺物のレベルに差異がなく、いずれも同じ堆積層から出土している点から、同時期の可能性が高いと判断した。

壺(1)は、短く外反する口縁部、内傾する頸部、球形状の胴部からなる。頸部がやや緩やかに伸びていること、などにおいて板付式の影響を受けていると考えられる夜臼系の壺である。

甕(2)は、如意形の口縁部をもち、口唇部下端に2mm程の長さで、約4mm間隔の刻目を有し、体部と口縁部の境には段を有している。器形は胴部最大径に対し底径が大きく、すん胴の体部となっており、これらの特徴から板付IIa式の古相に相当すると考えられる。

ほかに、下城式甕の祖形と考えられる刻目突帯文甕が出土している(第16図5・6・8～15)。内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁直下に突帯が付くこと、口縁端部は尖り気味であること、器面調整は、内・外面がハケ目調整では無く、磨きとナデ調整であることを特徴とする。

浅鉢(4・6)が出土している。縄文時代晩期の浅鉢の系譜を継ぐものである。出土した底部は、浅い凹状を呈している。土器の接合は内傾接合の土器も存在するが、外傾接合の土器も見られ、弥生土器の特徴を示している。このような土器群に近い様相を示す資料として、福岡県橋本一丁目遺跡第2次調査(SK28)、原東遺跡第2次調査(環濠)の出土土器を、挙げることができる。上述した内容が、上七曾子遺跡出土土器の様相である。

II 大分市域の弥生時代早・前期土器編年案

以下、当該期の土器編年を試みる(第26図)。

「下黒野式」1～11は下黒野遺跡、12～20は種田市遺跡出土の壺・甕・浅鉢である。壺(1～3・13・15)は球形の胴部に短く外反する口縁部、強く内傾する頸部からなり、外面は焼成前に丹塗り研磨されている。14の高台付き底部は外面に横方向の丹塗り磨研が施されており、壺の底部と判断される。

甕は、体部上部が逆「く」の字状に内傾するもの4・6・16・18(A類)と、直線的に立ち上がるも

の7・17（B類）がある。口縁部外面の若干下った位置に一条の刻目突帯文が巡る。刻目は概して粗い。胴屈曲部に、突帯や刻目は施さない。器面調整は、内・外面とも横方向の貝殻条痕の調整が見られる。

浅鉢8・19は体部上部を逆「く」の字状に内傾し、その屈曲部に浅い沈線や段を施す。口縁は極弱く外反し、端部は尖り気味である。器面調整は、磨き又はナデである。浅鉢9は内傾する体部で、細く短い口縁部が上方に引き出されている。屈曲部以下の外面は横方向の貝殻条痕文、内面は横方向の磨き調整である。浅鉢10は、逆「く」の字状に内傾する胴部と外反する比較的に長めの口縁部を持つ。口縁部内面は、軽い丸みを帶びて外反する。胴部の屈曲部に刻目を施す。器面調整は、9と同じである。浅鉢11・20は、体部上部が「く」の字状に曲がり口縁部は立ち気味に伸びる。口縁端部は、細く尖っている。器面調整は、他の浅鉢同様である。

両遺跡とも包含層からの出土資料であるが、限られた範囲からの出土であることや、他時期の遺物が混入されていないこと等を考慮すると、比較的まとまった資料と評価されている。これらの土器の様相は、高橋の提唱した刻目突帯文単純期の「下黒野式」（高橋1980）と同様の形式内容を示している。

「一方平IV式」一方平IV遺跡出土の遺物を標式とする（21～29）。

壺21は頸部から胴部にかけての段、球形の胴部をもつ平底の壺に復元できる。器面調整は内面ナデ、外面は磨きが施されている。

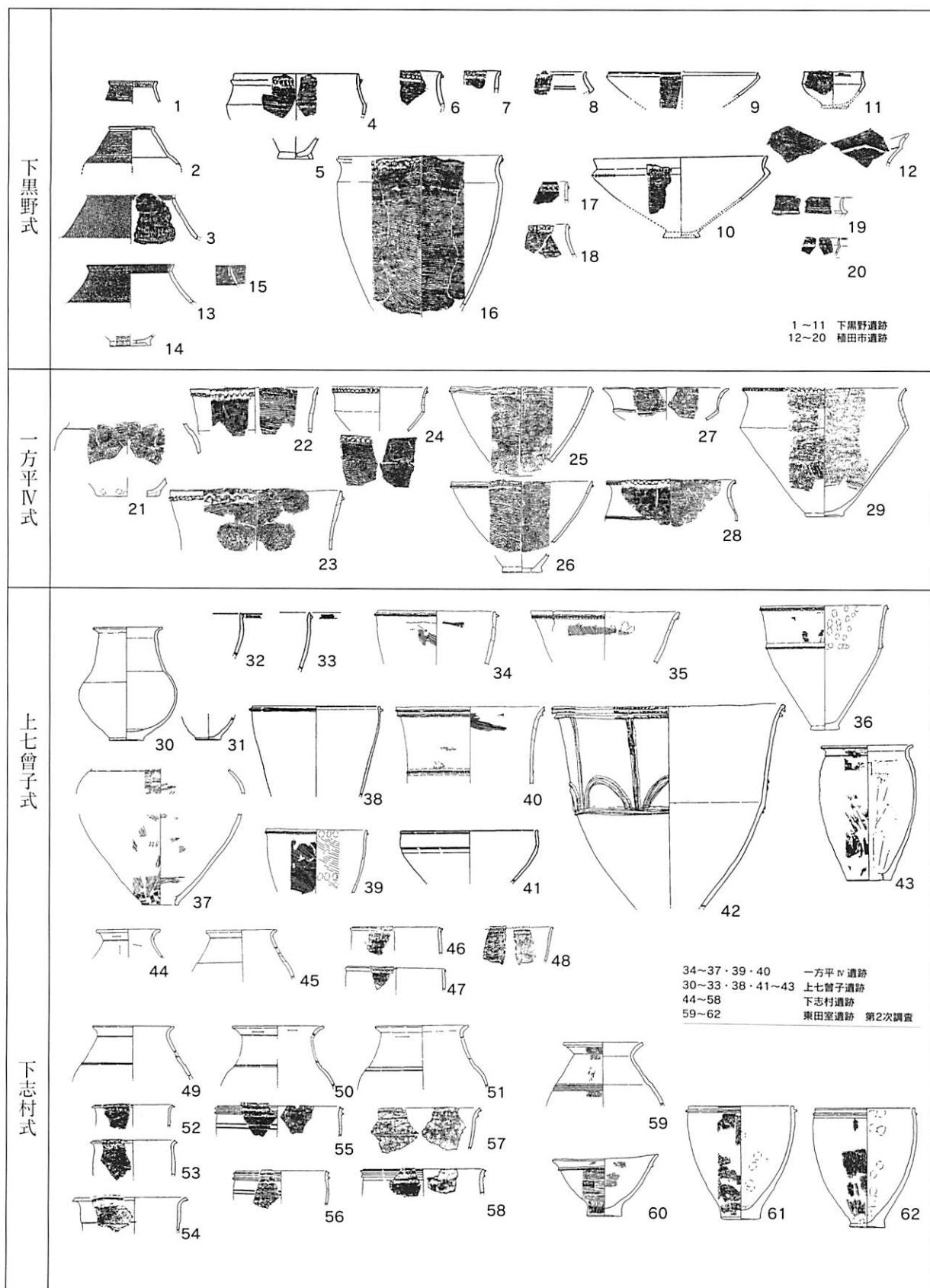
甕22・23は体部屈曲部より緩く外傾しながら伸び、口縁端部は尖り気味で、口縁部のやや下に一条の刻目突帯文を巡らす。甕24は胴部上位で屈曲し、外傾しながら口縁部にむかって立ち上がり一条の刻目突帯文を巡らす。器面調整は、内・外面とも貝殻条痕の後ナデ調整である。口縁部下に無刻目の突帯を巡らす25、刻目の突帯を巡らす26は、どちらとも、底部から胴部、口縁部へと大きく開くもので口縁端部は尖り気味である。底部は外側にやや張り出した平底を呈している。器面調整は、貝殻条痕の後ナデ調整である。甕28は、体部上部を「く」の字状に湾曲し、口縁部下端に刻目突帯文を巡らす。屈曲部に二本の沈線を巡らしている。29も同様の器形を呈しているが胴部屈曲部は、刻目や沈線を施していない。

浅鉢27は、逆「く」の字状に内傾する胴部から湾曲しながら口縁部へやや長めに伸び、屈曲部に沈線を巡らせる。器面調整は、内面はナデ、外面は磨きである。

一方平IV遺跡の貝殻条痕調整の土器群は、口縁端部が尖り気味であること、屈曲部の沈線が、前段階の刻目から変化したものであると考えられる甕などから、下黒野式に比べ後出するものである。浅鉢に関しても同様に後出する要素が見られ、甕の変化の想定を支持している。これらの資料は上七曾子遺跡出土土器よりは明らかに古い様相をしめしている。おおむね板付I式の併行期に位置づけられよう。

「上七曾子式」上七曾子遺跡出土土器群（30～33・38・41～43）、一方平IV遺跡出土土器群の一部（34～37・39・40）を標式にする。現状で壺・甕・浅鉢を確認できる。

壺30は、板付式の影響を受けていると考えられる夜臼系の壺である。37は、段を有する頸部、やや



第26図 大分市域の弥生時代早・前期土器編年 (縮尺は1/12)

球形の胴部を持つ丹塗磨研の壺である。器面調整は内面ナデ、一部磨き、外面ハケ目調整後磨きを施している。

甕35の形態は、25・26に類似するが、外面調整は横方向の貝殻条痕からハケ目調整後ナデへと変化している。32～34も同様の形態をしているが口縁部の立ち上がりが急で、口縁端部は尖り気味である。口縁直下に細かい刻目突帯を巡らす。下城式甕の祖形甕と考えられる一群である。36・40・42は、やや外反する口縁部と屈曲する胴部を持つ甕である。口縁直下及び胴部屈曲部に一条巡らす36、二条の刻目突帯を巡らす40・42がある。42は上下の突帯間に縦二条の刻目突帯を等間隔に8本施し、その空間に下位に半円形の刻目突帯を施すものである。

浅鉢41の調整は内・外面ともナデ調整であり、胎土も弥生土器の特徴を示す。

以上、板付式の影響を受けていると考えられる壺、如意形の甕、深鉢から形式変化した下城式甕の祖形甕、広がり気味に口縁が伸びる刻目突帯文甕、浅鉢の一群を「上七曾子式」とした。これらは、貝殻条痕調整からハケ目後ナデ調整と言った変化が見られる一群である。板付IIa式の古段階に相当しよう。

「下志村式」44～58は、下志村遺跡出土の壺・甕である。

壺44・45は強く外湾する口縁部を持ち頸部との境に僅かながら段部を有し、内傾する太く短い頸部、球形状の胴部からなる。49・51は頸部と胴部の境に削り出し突帯を有するものである。50は頸部が長く伸び、胴部との境に小さな一条の突帯を巡らす。下志村遺跡出土の壺は、削り出し突帯を有するものが主体を占める。器面調整は、内・外面とも丁寧な磨きが施される。

甕46・47は直立する口縁部を平坦に仕上げ、その両端に刻目を施したものである。48は口縁端部の極わずか下方に刻目突帯文を巡らすものである。52～54は体部がやや直線的に立ち上がり口縁部下に刻目を巡らすものである。55～58は口縁部がやや厚く口縁部下に刻目を巡らすものである。55・56のように口縁部下4～5cmの所に二条の沈線を巡らすものもある。甕はすべてハケ目調整である。

以上が下志村遺跡の土器の様相である。壺・甕の形態を見ると、如意状の口縁部をもち口唇部に刻目をもつ所謂板付式甕の存在は無いが、下城式甕の祖形と考えられる甕の存在、短く外反し、肥厚する口縁部、球形の胴部に内傾する頸部、頸部と胴部の境の削り出し突帯などの特徴を持つ壺のありようは、板付IIa式の段階に相当しよう。

59～62は、東田室遺跡第2次調査SK09出土の壺、鉢、甕である。59は削り出しの突帯を有する壺である。器面外面は磨き調整である。60は、「ハ」の字状に開く鉢で、口縁部のかなり下に一条の刻目突帯を巡らす。外面は、ハケ目後磨き調整である。61・62は砲弾形の器形を有し、口縁部下に刻目突帯を巡らす甕である。外面はハケ目調整である。削り出し突帯を有する壺が見られる事から、板付IIa式の時期を考えた。壺の口縁の伸び、やや平坦化した甕の口縁部形態を見ると、下志村の土器よりやや後出の感がする。壺の頸部と胴部の境に沈線を巡らすのではなく、削り出す突帯である特性をみると、下志村式の範疇にあると想定できる。

以上、下志村遺跡出土の壺、甕等は、上七曾子式と差異は無いように見えるが、下城式甕祖形甕の口縁端部の尖りが、やや弱くなっていること、土器の調整が、ハケ目を施した後ナデや磨きを行う段

階からハケ目のみの段階への変化が窺えること、上七曾子で見られた縄文の系譜を継いだ浅鉢が見られないこと、内傾接合が見られなくなることなど、これらを考え合わせると下志村式は、上七曾子式にやや後出する感がある。

今回上七曾遺跡2号溝の出土遺物は数少ない遺物量であったが、壺、如意状口縁甕、下城祖形甕、大形の突帯文甕、浅鉢と言った豊富な器種が見られた。特に板付式の影響受けていると考えられる壺、如意状口縁甕、縄文時代の甕の系譜を継いだと思われる刻目突帯甕が、セット関係で確認できたことにより、弥生前期の様相を補完しうる資料といえる。

【参考文献】

- 真野和夫、渋谷忠章 1974 「下黒野遺跡」 大分県教育委員会
- 甲斐寿義 1999 「一方平IV遺跡」「スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書（第3分冊）一方平II遺跡・一方平III遺跡・一方平IV遺跡」「大分県文化財発掘調査報告書第103輯」 大分県教育委員会
- 江田豊 1999 「佐隈杉下遺跡」「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書11」 大分県教育委員会
- 江田豊 1999 「二反田遺跡」「玉沢地区条里遺跡群」「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書12」 大分県教育委員会
- 染谷和徳 1994 「植田平石遺跡」「精神保健センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 大分県教育委員会
- 高橋徹 1980 「大分県考古学の諸問題（1）－刻目突帯文土器の出現とその展開について－」「大分懸地方史 第98号」 大分県地方史研究会
- 高橋徹 1983 「東九州における突帯文土器とその周辺」「古文化談叢 第12集」 九州古文化研究会
- 高橋徹 1984 「大分県史 先史篇II」 大分県
- 高橋徹 1996 「第IV章 付論大分平野周辺前期～中期の弥生土器について」「曲遺跡」「九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 大分市教育委員会
- 高橋徹 2000 「下城式土器の周辺」「土器持寄会論文集 突帯文と遠賀川」 土器持寄会論文集刊行会
- 高橋徹 2001 「大分の弥生・古墳時代土器編年」「大分県立歴史博物館 研究紀要」 大分県立歴史博物館
- 高畠豊 2002 「東田室遺跡第2次調査」「大分市埋蔵文化財調査年報vol.13 2001年度」 大分市教育委員会
- 坪根伸也 2000 「東九州における弥生前期土器の諸相－口縁下端凸状甕と下城式甕」「土器持寄会論文集 突帯文と遠賀川」 土器持寄会論文集刊行会
- 坪根伸也 2001 「弥生文化成立期の具体像（東部九州）」「第47回埋蔵文化財研究集会 弥生文化の成立－各地域における弥生文化成立期の具体像－」 埋蔵文化財研究集会
- 吉田寛 1998 「植田市遺跡」 大分県教育委員会

表3 繩文土器遺物観察表(1)

挿図番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第10図1	FG9	角閃石△	微粒 白色粒子○	暗茶褐色	黑色	横方向の磨き	磨消繩文			口縁部
第10図2	SD04 H.7.8.9.10	角閃石△	細粒 赤色粒子△ 黒色粒子○ 白色粒子○	淡茶褐色	淡灰色	磨き風ナデ	磨消繩文	7.5		口縁部
第10図3	FG9	角閃石○	細粒 黒色粒子○ 白色粒子○	暗茶色	淡黄色	ナデ	磨消繩文	(18.6)		鉢 口縁部
第10図4	SD02 F9.10	角閃石○	微粒 雲母△ 黒褐色○ 白色粒子○	茶褐色 微粒	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			口縁部
第10図5	SD02 F.9	石英△	細粒 角閃石○ 赤色粒子△ 黒色粒子○ 白色粒子○	茶褐色 微粒	茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			口縁部
第10図6	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 白色粒子○ 黒色粒子○	淡茶褐色 微粒	淡茶褐色	ナデ	磨消繩文			口縁部 きめ細かい粘土
第10図7	FG9	石英△	細粒 角閃石○ 雲母○ 白色粒子○ 黒色粒子○	暗茶褐色 微粒 微粒	黒褐色	ナデ	ナデ風磨消繩文			
第10図8	SD04 IJ 2	角閃石○	細粒 黒色粒子○ 白色粒子○	暗茶褐色	淡灰色 一部赤褐色	磨り消し・ナデ	ナデ			口縁部 砂粒混入
第10図9	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 赤色粒子○ 長石	淡茶褐色 微粒	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			きめ細かい粘土
第10図10	G8 F9	角閃石△	微子 白色粒子○ 長石○	暗橙褐色 細粒	暗茶褐色	横方向の磨き風ナデ				
第10図11	FG9	石英○	小粒～細粒 角閃石△ 雲母○ 黒色粒子○ 白色粒子○ 砂粒○ 長石	茶褐色 微粒 微子	茶褐色	横方向のナデ	磨消繩文			
第10図12	SD04 HI 3～6	角閃石○	細粒 雲母○ 黒色粒子○ 白色粒子○	淡灰色 細粒	茶褐色～橙色	磨き風ナデ	磨消繩文			胴部
第10図13	FG9	角閃石○	微粒 雲母○ 砂粒 白色粒子○ 黒色粒子○	茶褐色 微粒	暗茶褐色	ナデ	磨消繩文			胴部
第10図14	SD04 H 6～7	石英△	細粒 黒色粒子○ 白色粒子○	暗茶褐色	橙色	横方向の磨き風ナデ	磨消繩文			
第10図15	FG9	角閃石	微粒 黒色粒子○ 白色粒子○ 長石	淡灰色	淡茶褐色	磨き	磨消繩文			きめ細かい粘土
第10図16	FG9	角閃石○	微粒 白色粒子○ 長石 砂粒○	暗灰色	暗灰色	ナデ	磨消繩文			
第10図17	FG9	角閃石△	微粒 白色粒子○ 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			
第10図18	FG9	角閃石○	微粒 黒色粒子○ 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ	磨消繩文			
第10図19	FG9	石英△	粒子 角閃石○ 雲母△ 黒色粒子○	淡黄灰色 微粒 微粒	淡黄灰色	磨き風ナデ	磨消繩文			

表3 繩文土器遺物觀察表(2)

拂図番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第10図20	FG9	角閃石	微粒 長石	茶褐色	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			
第10図21	FG9	角閃石○	細粒 白色粒子○ 長石	暗茶褐色	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			
第10図22	FG9	石英△	細粒 角閃石○ 雲母○ 白色粒子○	茶褐色 微粒 微粒	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			脚部
第10図23	一括	角閃石○	微粒 白色粒子○ 長石	淡茶褐色 微粒子	暗灰色	横方向の磨き風ナデ	磨消繩文			
第10図24	SD04 H7.8.9.10	角閃石○	微粒 雲母△ 黑色粒子○ 白色粒子○	淡黃褐色 微粒	暗灰色	磨き	磨消繩文			きめ細かい粘土
第10図25	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 白色粒子○	暗茶褐色 微粒	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			
第10図26	FG9	石英△	小粒 角閃石○ 黑色粒子○ 白色粒子○	茶褐色 微粒	黑褐色	横方向のナデ	条痕後磨き			
第10図27	FG9	石英△	微粒 角閃石○ 雲母○ 白色粒子○	淡灰色 微粒 微粒	淡黒褐色	ナデ	磨消繩文			脚部
第10図28	FG9	角閃石△	細粒 赤色粒子△ 黑色粒子○ 白色粒子○	灰褐色	淡灰褐色	ナデ	磨き風ナデ			脚部にスカシ風の孔がある。
第10図29	FG9	角閃石△	微粒 雲母△	茶褐色	茶褐色	磨き	磨き			口縁部
第10図30	FG9	石英△	粒子 角閃石○ 雲母△ 白色粒子○ 黑色粒子○ 砂粒○	茶褐色 細粒 微粒	茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			口縁部
第10図31	SD04 IJ 3	石英△	細粒 角閃石○ 雲母△ 黑色粒子○	茶褐色 細粒 微粒	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			口縁部
第10図32	FG9	角閃石○	細粒 雲母△ 赤色粒子△ 黑色粒子○ 白色粒子○	黑褐色 微粒	暗灰褐色	横方向のナデ	磨消繩文			口縁部
第11図33	SD04 IJ 2	石英	微粒 角閃石 白色粒子○	暗灰色 細粒	暗灰色	磨き	磨消繩文			口縁部
第11図34	SD04 H7.8.9.10	角閃石△	微粒 黑色粒子 白色粒子○	淡黃褐色	淡黃褐色	横方向のナデ	磨消繩文			きめ細かい粘土 口縁部
第11図35	SD04 H 1 3~6	角閃石○	微粒 黑色粒子○ 白色粒子○	黑褐色	暗灰色	磨き風ナデ	磨消繩文			きめ細かい粘土 口縁部
第11図36	FG9	角閃石△	微粒 白色粒子○	淡灰色	淡灰色	磨き風ナデ	磨消繩文			口縁部
第11図37	FG9	角閃石△	細粒 雲母△	暗黃褐色 粒子 黑色粒子○	淡黄色	磨き	磨消繩文			鉢 口縁部
第11図38	SD02	石英△	細粒 角閃石○ 雲母△ 長石	茶褐色 微粒 微粒	茶褐色	ナデ	磨消繩文	(24.8)		
第11図39	SD04 IJ 2	角閃石○	微粒 雲母△ 白色粒子○ 長石	茶褐色 微粒	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨き風ナデ			
第11図40	FG9	角閃石○	微粒 赤色粒子△ 長石	暗茶褐色 細粒	黑褐色	磨き	磨消繩文			
第11図41	SD02	角閃石○	微粒	黑褐色	黑褐色	磨き	磨消繩文			

表3 繪文土器遺物観察表(3)

検査番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第11図42	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 黒色粒子○ 白色粒子○	淡灰色 微粒	淡茶褐色	横方向の磨き風ナデ	磨消繩文			頭部?
第11図43	I J I.2,3	角閃石○	微粒 雲母△ 黒色粒子○ 白色粒子○ 長石	暗茶褐色 微粒	暗灰色	磨き風ナデ	磨消繩文			
第11図44	一括	石英△	細粒 角閃石○ 白色粒子○ 黒色粒子○ 長石△	暗灰色 微粒	暗灰色	磨き	磨消繩文			口縁部
第11図45	FG9	角閃石○	微粒 黒色粒子○ 白色粒子○ 砂粒○	暗茶褐色	橙色~茶褐色	条痕後ナデ	磨消繩文			
第11図46	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 長石	淡黄色 微粒	暗灰色	磨き	磨消繩文			
第11図47	トレンチGF8	石英△	細粒 角閃石○ 雲母△ 長石	茶褐色 微粒 微粒	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			
第11図48	SD02 2層	石英○	微粒 角閃石○ 雲母△ 砂粒○ 長石	暗橙色 微粒 微粒 微粒	暗橙色	ナデ	磨消繩文			
第11図49	FG9	角閃石○	細粒 雲母○ 黒色粒子○ 白色粒子○ 長石	灰色 細粒	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			
第11図50	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 赤色粒子△ 白色粒子○ 長石 砂粒	暗茶褐色 微粒 微粒	暗茶褐色	ナデ	磨消繩文			
第11図51	一括	角閃石○	微粒 赤色粒子△ 黒色粒子○ 白色粒子○	淡茶褐色	暗灰色	ナデ	磨消繩文			
第11図52	FG9	角閃石○	細粒 黒色粒子○ 長石 砂粒○	黑褐色及び 白灰色 橙褐色	磨き風ナデ	磨消繩文				
第11図53	FG9	角閃石△	微粒子 長石○	暗茶褐色 微粒子	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			きめ細かい粘土 頭部?
第11図54	FG9	角閃石○	微粒 白色粒子○	茶褐色	灰褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			きめ細かい粘土
第11図55	A.B.C7~10	石英△	細粒 角閃石○ 赤色粒子△ 白色粒子○	淡茶灰色 微粒	暗茶灰色	磨き	磨消繩文			
第11図56	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 黒色粒子○ 白色粒子○ 長石	暗灰褐色 微粒	暗灰褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			
第11図57	FG9	角閃石△	微粒	暗灰褐色	黑褐色	磨き	磨消繩文			
第11図58	FG9	石英△	粒 角閃石△ 白色粒子○	黑褐色 微粒	黑褐色					口縁部
第11図59	FG9	石英△	細粒 黒色粒子○ 白色粒子○	茶褐色	茶褐色	横方向のナデ	磨消繩文			口縁部 きめ細かい粘土
第11図60	FG9	黒色粒子○	白色粒子○	暗茶褐色	黑褐色	磨き	磨消繩文			口縁部 きめ細かい粘土
第11図61	FG9	角閃石○	微粒子 白色粒子○	黑褐色	黑褐色	磨き	磨消繩文			口縁部 きめ細かい粘土

表3 繩文土器遺物観察表(4)

埠団番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第11図62	FG9	角閃石○	細粒 長石	茶褐色	茶褐色	磨き	磨消繩文			きめ細かい粘土
第11図63	FG9	角閃石○	微粒	黒褐色	黒褐色	磨き	磨消繩文			鉢 口縁部
第11図64	FG9	角閃石○	微粒 白色粒子○	淡灰茶色	淡黒褐色	ナデ	磨消繩文			口縁部
第11図65	SD04 HI3~6	角閃石○	細粒 雲母○ 白色粒子	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ	磨消繩文			口縁部
第11図66	一活	石英△	細粒 角閃石○ 黑色粒子○ 白色粒子○ 長石 砂粒○	暗灰褐色 細粒	茶褐色	磨き	磨消繩文			内面鉄分付着のため、調整不明瞭
第11図67	FG9	石英△	微粒 角閃石○ 白色粒子○	赤褐色 微粒	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			
第11図68	SD04 IJ2	石英△	小粒 角閃石○ 雲母△ 赤色粒子△ 黑色粒子○ 白色粒子○	淡茶褐色 微粒 微粒	黒褐色	ナデ	磨消繩文			外面鉄分付着
第11図69	FG9	角閃石○	微粒 赤色粒子△ 黑色粒子○ 白色粒子○	暗茶褐色 細粒	黒褐色	磨き風ナデ	磨消繩文			
第11図70	FG9	石英△	細粒 角閃石○ 雲母△ 白色粒子○	黑色 微粒 微粒	茶褐色	ナデ	磨消し繩文			
第11図71	SD04 H.7.8.9.10	石英△	細粒 角閃石○ 雲母△ 赤色粒子△ 黑色粒子○ 白色粒子○ 砂粒	灰茶褐色 細粒 微粒 小粒	灰茶褐色	斜め方向のナデ条痕	磨消繩文			
第11図72	FG9	角閃石○	細粒 黑色粒子○ 白色粒子○	暗茶褐色	暗茶褐色	磨き風ナデ	条痕			
第11図73	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 黑色粒子○ 白色粒子○ 長石	暗茶褐色 微粒	暗茶褐色	磨き	磨消繩文			
第11図74	FG9	石英△	細粒 角閃石○ 白色粒子○ 黑色粒子○	茶褐色 微粒	淡茶褐色	横方向の磨き風ナデ	磨消繩文			脇部?
第12図75	SD04 H.7.8.9.10	角閃石○	微粒 白色粒子○	茶褐色	茶褐色	磨き風ナデ	ナデ			鉄分付着のため調整不明瞭 口縁部
第12図76	SD04 H3~6	角閃石○	細粒 雲母△ 黒褐色○ 砂粒	茶褐色 微粒 粒子	茶褐色	横方向のナデ	横方向のナデ			口縁部
第12図77	FG9	角閃石○	細粒 黑色粒子○ 白色粒子○	茶褐色	暗茶褐色	横方向のナデ	横方向のナデ			鉢 口縁部 きめ細かい粘土
第12図78	SD02 NO.105	角閃石○	微粒 雲母△ 黑色粒子○	黄褐色 微粒	黄褐色	一部磨き	横方向のナデ	(34)		きめ細かい粘土 口縁部
第12図79	FG9	角閃石○	微粒 白色粒子○ 黑色粒子○	暗褐色	暗褐色	磨き風ナデ	横方向のナデ	(19.9)		鉢 口縁部
第12図80	FG9	角閃石○	微粒 黑色粒子○	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ			口縁部
第12図81	FG9	角閃石○	細粒 雲母△	暗灰色 微粒	淡茶褐色	磨き風ナデ	磨き風ナデ			口縁部
第12図82	FG9	角閃石○	粒子 黑色粒子○ 石英△	赤褐色	暗褐色	横ナデ	磨き風ナデ	(47.4)		鉢 口縁部
第12図83	SD04 HI3~6	角閃石○	細粒 雲母○	茶褐色 微粒	茶褐色	磨き	磨き			きめ細かい粘土 口縁部

表3 繩文土器遺物観察表(5)

掲番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第12図84	FG9	角閃石△	白色粒○ 微粒 白色粒子○ 黑色粒子○	茶褐色	暗茶褐色	磨き	磨き			口縁部 きめ細かい粘土
第12図85	FG9	角閃石○	細粒 赤色粒子△ 黑色粒子○	淡褐色	淡褐色	横方向の条痕	横方向のナデ			口縁部
第12図86	FG9	角閃石△	細粒 白色粒子○	淡黒褐色	淡灰色	磨き	ナデ			口縁部
第12図87	FG9	角閃石○	細粒 白色粒子○ 黑色粒子○	淡灰褐色	淡灰褐色	磨き風ナデ	横方向のナデ			鉢? 口縁部
第12図88	FG9	角閃石○	細粒 雲母○ 赤色粒子△ 白色粒子○	暗茶褐色 微粒	淡灰色	横方向のナデ	磨き風ナデ			口縁部
第12図89	一活	角閃石○	微粒 雲母○ 赤色粒子△ 黑色粒子○ 白色粒子○	暗茶褐色 微粒 粒子	茶褐色	横方向のナデ	横ナデ			口縁部
第12図90	FG9	角閃石○	微粒 白色粒子○ 黑色粒子○	淡茶褐色	淡茶褐色	横方向のナデ	磨き			鉢? 口縁部
第12図91	FG9	角閃石○	細粒 白色粒子○	淡灰黒色	淡灰黒色	横方向のナデ	横方向のナデ	(17.4)		鉢 口縁部
第12図92	FG9	角閃石○	微粒 黑色粒子○ 白色粒子○	淡褐色	淡灰色	横方向のナデ	横方向のナデ			鉢 口縁部
第12図93	FG9	角閃石○	細粒 白色粒子△	黒褐色	黒褐色	横方向のナデ	横方向のナデ	(19.4)		深鉢 口縁部
第12図94	SD04	石英△	細粒 角閃石○ 雲母○ 黑色粒子○ 白色粒子○	淡灰色 細粒 微粒	淡灰色	ナデ	ナデ	(30.2)		口縁部
第12図95	FG9	角閃石○	細粒 雲母○ 白色粒子○	茶褐色 微粒	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨き風ナデ	(28.6)		鉢 口縁部
第12図96	FG9	石英○	細粒 角閃石○ 砂粒○ 白色粒子○	暗茶褐色 微粒	茶褐色	横方向のナデ	条痕後横ナデ			口縁部
第12図97	FG9	角閃石○	微粒 白色粒子○	暗茶褐色 一部黒色	暗茶褐色 一部黒色	磨き風ナデ 一部黒色	ナデ	(33.6)		きめ細かい粘土 波状口縁部 深鉢
第12図98	SD04 HI3~6	角閃石○	細粒 白色粒子○	暗灰色 微粒子	暗茶褐色	横方向のナデ	横方向のナデ			
第12図99	FG7	角閃石○	細粒 雲母△ 白色粒子○ 砂粒 長石	灰褐色 微粒 微粒	灰褐色	縱方向のナデ	磨消繩文			
第13図100	FG9	角閃石○	白色粒子○ 角閃石○ 白色○	淡黄色 微粒 微粒子	淡黄色	横方向のナデ	斜め方向のナデ	(28.3)		口縁部~胴部 きめ細かい粘土 深鉢
第13図101	EF 1~7	角閃石○	微粒 雲母○ 白色粒子○ 砂粒	暗灰褐色 微粒 粒子	暗褐色	ナデ	磨消繩文			
第13図102	FG9	角閃石○	微粒 赤色粒子△ 長石 黒褐色○ 白色粒子○	黒褐色 細粒 微粒子 微粒子	茶褐色	磨き	磨き			
第13図103	FG9	角閃石○	細粒 雲母△ 黑色粒子○ 白色粒子○	灰色 微粒 微粒子 微粒子	暗茶褐色	磨き風ナデ	斜め方向の条痕	後磨消し		
第13図104	一活	角閃石○	細粒 雲母○ 黒褐色○	暗茶褐色 微粒 微粒子	暗茶褐色	上部指ナデ	横方向のナデ 下部斜め方向のナデ			口縁部

表3 繩文土器遺物観察表(6)

鉢図番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
		砂粒○								
第13図105	SD04 HI3~6	角閃石○	雲母△ 雲母○	暗茶灰色	暗茶灰色	横方向のナデ	横方向のナデ			口縁部
第13図106	SD04 IJ2	角閃石○	細粒 雲母○ 赤色粒子△ 黒褐色○ 白色粒子○ 微粒子	暗茶褐色 細粒 細粒 微粒子 微粒子	黑色及び 淡茶灰色	磨き風ナデ 淡茶灰色	磨き風ナデ	(24.2)		波状口縁部
第13図107	SD02 N O106	角閃石○	微粒 雲母○ 白色粒子○ 微粒子	黄褐色 微粒 微粒子	暗黄褐色	磨き	横方向のナデ			口縁部
第13図108	SD04 IJ2	角閃石○	細粒 黒褐色○ 白色粒子○ 微粒子	淡灰色 微粒子 微粒子	淡灰色	横方向のナデ	横方向のナデ			口縁部
第13図109	FG9	石英	細粒 角閃石 赤色粒子△ 砂粒 長石	黒色～ 細粒 細粒 細粒	淡茶褐色 淡橙白色	ナデ	ナデ	(25.8)		口縁部～胴部 深鉢 きめ細かい粘土 内外面共に黒斑あり
第13図110	SD04 H7.8.9.10	角閃石○	微粒 雲母△ 赤色粒子△ 黒褐色○ 白色粒子○ 微粒子	黒褐色 微粒 粒子 微粒子 微粒子	暗茶褐色	磨き風ナデ	磨き			
第13図111	SD04 I 3	角閃石○	細粒 赤色粒子△ 白色粒子○ 黒色粒子○ 微粒子	淡黄灰色 粒子 微粒子 微粒子	暗茶褐色	磨き風ナデ	横方向のナデ	(32.2)		口縁部～胴部
第13図112	HI3~6	石英△	細粒 角閃石○ 黒色粒子○ 白色粒子○ 微粒子	淡黄色 微粒 微粒子 微粒子	淡黄色	磨き風ナデ	磨き風ナデ			
第13図113	F8.9.10	角閃石○	黒褐色○ 白色粒子○ 長石 砂粒○	暗茶褐色	暗茶褐色	磨き	ナデ			
第14図114	一括	石英△	細粒 角閃石○ 雲母○ 赤色粒子△ 黒色粒子○ 長石	暗褐色 微粒 細粒 細粒 微粒	暗灰色	磨き	ナデ			
第14図115	FG9	角閃石○	微粒 雲母○	黑色 微粒	黑色	ナデ	磨き			胴部 きめ細かい粘土
第14図116	FG9	角閃石○	微粒 雲母○ 白色粒子○	黒褐色 細粒	暗茶褐色	ナデ	磨き			底部
第14図117	FG9	石英△	小粒 角閃石△ 赤色粒子△ 結晶片岩 砂粒○	淡橙褐色 細粒 細粒	橙褐色	ナデ	ナデ			底部
第14図118	FG9	角閃石○	細粒 雲母△ 砂粒○ 白色粒子○	黑色 微粒	橙褐色	ナデ	ナデ			底部
第14図119	FG9	石英△	小粒	黑色 角閃石○ 雲母 白色粒子○ 砂粒○	橙褐色 細粒 微粒	ナデ	ナデ			底部
第14図120	FG9	角閃石○	小粒 結晶片岩 長石 白色粒子 黒色粒子	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ			底部
第14図121	FG9	角閃石○	微粒 赤色粒子△ 黒色粒子○ 白色粒子○ 砂粒○	淡茶褐色	赤褐色	縱方向のナデ	斜め方向のナデ			胴部？

表3 繩文土器遺物観察表(7)

挿図番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底 径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第14図122	FG9	角閃石○	細粒 白色粒子○ 黒色粒子○ 長石	黒褐色 粒子	橙褐色	ナデ	ナデ		(6.0)	底部
第14図123	FG9	石英△	細粒 角閃石○ 赤色粒子△ 白色粒子○ 黒色粒子○ 砂粒 長石	灰褐色 細粒 細粒 微量	橙褐色	ナデ	ナデ		(4.1)	底部
第14図124	FG9	白色粒子○	黒褐色 砂粒○	黒褐色	茶褐色	ナデ	ナデ		(5.1)	底部
第14図125	FG9	角閃石△	細粒 砂粒○ 長石	淡茶褐色 微量	淡茶褐色	ナデ	ナデ		(8.0)	底部
第14図126	FG9	角閃石○	細粒 長石 赤色粒子△ 白色粒子○ 黒色粒子○	茶褐色 微量 細粒 粒子 粒子	淡橙色	調整不明	横方向のナデ		(8.1)	底部
第14図127	一活	石英○	細粒 角閃石○	橙褐色 細粒	橙褐色	ナデ	ナデ		(8.8)	底部
第14図128	SD04 H7.8.9.10	角閃石○	微粒 雲母△	茶褐色 微粒	茶褐色	横方向のナデ	横方向のナデ			
第14図129	FG9	角閃石○	微粒 赤色粒子△ 白色粒子○ 黒色粒子○	淡灰褐色	暗茶褐色	磨き	ナデ		(6.9)	底部 きめ細かい粘土
第14図130	F8.9.10	石英△	細粒 角閃石○ 雲母△ 赤色粒子△ 長石 黒色粒子○	淡灰色 細粒 微粒 細粒 微粒	橙褐色	ナデ	ナデ			
第14図131	FG9	角閃石○	細粒 雲母○ 白色粒子○ 黒色粒子○ 砂粒混入	淡灰褐色 細粒	淡橙褐色	磨き風ナデ	ナデ		(8.7)	底部 内面に黒斑あり
第14図132	FG9	角閃石○	細粒 雲母○ 赤色粒子△ 白色粒子 長石	暗茶褐色 細粒 小粒	茶褐色	磨き風ナデ	磨き		(6.4)	底部～胴部
第14図133	一活	角閃石○	細粒 赤色粒子△ 長石 黒色粒子○ 白色粒子	茶褐色 細粒	暗茶褐色	磨き	ナデ			底部
第14図134	FG9	角閃石△	微粒 砂粒○ 白色粒子○ 黒色粒子○	淡赤褐色	淡黃褐色	ナデ	磨き風ナデ			底部
第14図135	SD04 HI3~6	角閃石○	微粒 黒褐色○ 白色粒子○ 長石 砂粒○	黒色 微量	橙色	ナデ	ナデ		(4.1)	底部
第14図136	SD02完點時	石英△	細粒 角閃石○ 赤色粒子△ 白色粒子○ 砂粒	淡茶褐色 細粒 細粒	淡茶褐色	ナデ	ナデ		(5.4)	底部
第14図137	FG9	角閃石○	細粒 雲母△ 白色粒子○ 赤色粒子△ 黒色粒子○	黒色 微量	茶褐色	ナデ	斜め方向のナデ		(5.4)	底部
第14図138	F8.9.10	角閃石○	細粒 長石 黒色粒子○ 白色粒子○	淡茶褐色	橙褐色	磨き	ナデ		(6.0)	底部

表3 繩文土器遺物観察表(8)

拂図番号	出土区・遺構	胎 土		色 調		器面調整		口 径 (cm)	底 径 (cm)	備 考
		混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面			
第14図139	FG9	角閃石○	微粒 雲母△ 黒色粒子○ 白色粒子○	黒褐色 微粒	茶褐色	ナデ	横方向のナデ		(9.5)	底部
第14図140	FG9	角閃石△	細粒 雲母△ 長石 白色粒子○	黑色 細粒	淡橙褐色	ナデ	ナデ		(6.55)	底部

表4 弥生土器遺物観察表(1)

指図番号	出土地点	器種	胎 土		色 調		器面調整		口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備 考
			混和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面				
第15図1	SD02	壺	砂粒		淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ 磨き	ナデ	14.8	24.3	7.3	
第15図2	SD02	甕	石英 角閃石 雲母 砂粒	小粒 細粒 小粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ 指押さえ	ハケ目 ハケ目後 ナデ消シ	(19.3)	(28.9)	(9.3)	胴部最大21cm 9本/1cmハケメ単位 板付目式
第15図3	SD02	甕	石英 角閃石 赤色粒 砂粒	細～小粒 細粒	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ	ナデ	(49.3)	(43.3+α)		
第16図4	SD02	鉢	石英 角閃石 赤色粒 白色粒 砂粒	小粒 微粒	淡黄茶褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ				口縁部 内面煤付着
第16図5	SD02	甕	角閃石 白色粒 砂粒 長石	細粒	黑色及び 淡橙白色	淡赤褐色	丁寧なナデ	横ナデ				口縁部 内面煤付着
第16図6	SD02	甕	砂粒 石英 角閃石 白色粒	微粒 微粒	淡橙白色	淡橙灰色	ナデ	ナデ				外面黒斑あり
第16図7	SD02	甕	石英 角閃石 赤色粒 白色粒 長石	細粒 細粒 細粒	淡茶灰色	淡茶褐色	ナデ	ナデ				口縁部
第16図8	E03	甕	石英 角閃石	細粒 細粒	淡橙白色		ナデ	ナデ				口縁部
第16図9	SD02	甕	角閃石 白色粒 長石	微粒 微粒	暗橙色	淡橙色	ナデ	ナデ				口縁部
第16図10	SD02	甕	石英 角閃石 白色粒 長石	小粒 微粒 微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ				口縁部
第16図11	NO107	甕	砂粒 角閃石 雲母 赤色粒	微粒 細粒 細粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ				口縁部 外傾接合
第16図12	SD02	甕	角閃石 白色粒 長石	微粒 微粒	淡茶褐色	淡茶灰色	ナデ	ナデ				口縁部
第16図13	SD02	甕	石英 角閃石 白色粒	小粒 微粒	淡茶褐色	淡茶灰色	工具による 磨き風ナデ	工具による 磨き風ナデ				口縁部
第16図14	SD02	甕	石英 角閃石 白色粒	小粒 細粒	淡橙灰色	淡橙灰色	丁寧なナデ	ナデ				口縁部
第16図15	SD02	甕	石英 角閃石 黒色粒	小粒 細粒	淡黄茶褐色 黑色及び 淡黄茶褐色	ナデ 磨き風ナデ	工具による 磨き風ナデ	磨き風ナデ	(27)			口縁～胴部 内傾接合
第16図16	SD02	鉢	砂粒 石英 角閃石 赤色粒	細粒 微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	(29.4)			口縁～胴部 外傾接合

表4 弥生土器遺物観察表(2)

指図番号	出土地点	器種	胎 土		色 調		器面調整		口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備 考
			混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面				
		白色粒										
第16図17	SD02	壺	石英 角閃石 赤色粒 砂粒	小粒 細粒 小粒	黒色及び 灰白色	黒色及び 灰白色	ナデ	縦方向の 磨き風ナデ			(4.9)	底部完存 内・外面煤付着
第16図18	SD02	壺	石英 角閃石 砂粒	小粒 細粒	黒色	淡橙色	ナデ	ナデ				底部
第16図19	SD02	壺?	石英 角閃石 長石 砂粒 黒色粒	小粒 細粒 細粒	淡褐色	淡赤褐色	磨き	ナデ			(7)	底部
第16図20	SD02	壺	石英 角閃石 砂粒 赤色粒 黒色粒	小粒 細粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	磨き風ナデ			(6.7)	底部
第16図21	SD02	壺	石英 角閃石 砂粒 長石	小粒 細粒 細粒	淡橙色	淡橙色	磨き風ナデ 指おさえ	磨き風ナデ			8.4	底部 内面黒斑あり
第16図22	SD02	壺	石英 角閃石 赤色粒 白色粒 黒色粒 砂粒	細粒 細粒 小粒	淡橙白色	淡橙灰色	ナデ 指おさえ	磨き風ナデ 指おさえ			(8.8)	底部完存 外面一部煤付着
第16図23	SD02	壺	石英 角閃石 砂粒 黒色粒?	小粒 細粒	淡橙白色	淡橙色	ナデ	ハケ目後ナデ			7	底部
第16図24	SD02	壺	石英 角閃石 白色粒 砂粒	小粒 細粒	灰褐色	淡橙白色	ナデ	工具ナデ			(9.4)	底部
第16図25	SD02	甕	石英 角閃石 砂粒	小粒 細粒	淡橙白色	赤褐色	工具ナデ	工具ナデ			7.1	底部
第16図26	SD02	壺	石英 角閃石 赤色粒 白色粒 砂粒 長石	小粒 細粒 小粒 細粒	淡橙白色	淡赤褐色	ナデ	ナデ			7.85	底部 外面煤付着
第16図27	SD02	壺	石英 角閃石 赤色粒	小粒 微粒 小粒	暗橙色	暗橙色	工具ナデ	工具ナデ			8.7	底部 6~7本/cm
第16図28	SD02	甕	石英 角閃石 白色粒	小粒 細粒	暗橙色	橙色	ナデ	ハケ目後ナデ			(7.9)	底部 ハケ目単位
第16図29	SD02	甕	石英 角閃石 赤色粒 黒色粒 砂粒	小粒 細粒	黒色及び 淡橙白色	淡橙色	磨き風ナデ 指おさえ	ハケ目後 縦方向の 磨き風ナデ			(7.9) 7.9 7.85	底部 工具によるケズリ 黒斑あり 二次焼成による 土器のはく離あり

表5 その他の遺構出土遺物観察表

番号	出土地点	器種	胎土		色調		調整		備考
			内面	外面	内面	外面			
第17図1	BCD-7地点	弥生甕	砂粒 石英 黒色粒子	小粒	淡橙色	淡橙色	ナデ	ナデ	
第17図2	SF-01	土師器口縁部	石英 角閃石 白色粒子	細粒	白橙色	白橙色	ナデ	ナデ	
第17図3	SD03	須恵器坏			灰色	灰色			
第17図4	ABC-7・8地点	青磁皿			青灰色	青灰色			復元口径8.8cm
第17図5	表探	土師器坏	赤色粒子 白色粒子		淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	
第17図6	ABC7～10地点	瓦質鍋	角閃石	細粒			ナデ	ナデ	
第17図7	A-7地点	甕底部	石英 角閃石 赤色粒子 白色粒子	細粒	橙色	淡赤褐色	ナデ	ハケメ	
第17図8	表探	土師器坏	砂粒		淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	復元底径7.8cm
第17図9	SKO 4	土師器坏	砂粒		淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	糸きり
第17図10	ABC-7・8地点	土師器坏	砂粒		黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	
第17図11	ABC7～10地点	土師器坏	砂粒		黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	糸きり
第17図12	E-6・7地点	土師器坏	砂粒		淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	糸きり復元底径9.2cm
第17図13	ABC7～10地点	土師器坏	砂粒		淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	糸きり復元底径10.2cm
第17図14	ABC7～10地点	瓦質甕	白色粒子						亀山焼き?
第17図15	F-8・9地点	土鍾	石英 角閃石 赤色粒子			淡茶褐色			長さ3.5cm幅1.35cm
第17図16	F-8・9地点	土鍾	砂粒 石英 角閃石 赤色粒子			茶褐色			長さ4.9cm幅6.5cm

表6 石器観察表

指図番号	出土区・遺構	器種	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
第20図1	SO10 ②	石錐	結晶片岩	8.45	7.00	1.20	90	上端右半欠損
第20図2	H・I-3~6	打製石斧	角閃石安山岩	(5.30)	9.40	1.50	122	上端・下端欠損
第20図3	SD03	扁平打製石斧	結晶片岩	(8.90)	6.75	1.50	99.5	上端欠損
第20図4	SD04	扁平打製石斧	安山岩	(8.10)	6.50	1.10	60	上端・右側欠損
第20図5	F・G-9	扁平打製石斧	結晶片岩	(2.30)	(6.90)	0.50	11	刃部のみ
第20図6	F・G-9	扁平打製石斧	結晶片岩	(4.70)	6.45	0.55	24	上半欠損
第20図7	E・F-2	打製石斧?	砂岩	(6.90)	1.30	1.30	85.5	下半欠損 赤化
第20図8	SD04	磨石	砂岩	7.10	7.20	3.90	251	下端に磨り面
第20図9	F・G-7	石皿	花崗岩	13.00	8.50	2.50	308.5	左右側欠損
第20図10	F・G-8	石皿	角閃石安山岩	(7.60)	(7.80)	(7.80)	484	赤化上端・左右側欠損
第20図11	F・G-9	十字形石器	角閃石安山岩	(9.55)	(6.85)	(1.15)	81.5	上半欠損
第20図12	SD04	石核片	サヌカイト	4.65	1.80	1.00	13.4	金山産
第20図13	SD04	剥片	姫島産黒曜石	(2.60)	2.60	1.00	4.8	下半欠損
第20図14	SD04	剥片	ガラス質安山岩	(3.15)	3.75	0.75	7.9	右側欠損
第20図15	F・G-9	砥石	角閃石安山岩	(13.10)	14.80	1.70	481	上半・下端左欠損
第20図16	SK02	砥石	角閃石安山岩	(11.00)	9.00	7.00	867.5	下端欠損・裏面磨き
第20図17	SD02	磨製石斧	綠泥片岩	(7.75)	(4.65)	3.60	125	上半欠損
第20図18	SK06	磨製石斧	結晶片岩	(7.70)	8.90	0.55	60.5	上半欠損
第20図19	SK06	砥石	角閃石安山岩	(8.50)	11.80	0.90	111.5	上半欠損
第20図20	SD04	石包丁状石製品	角閃石安山岩	6.00	11.80	0.70	64.5	上端・右・左側欠損
	SD02	扁平打製石斧	角閃石安山岩	(3.60)	(4.55)	1.00	19.4	
	SD04	磨石	砂岩	(5.40)	9.75	4.20	262	上半欠損
	SD04	調整剥片	砂岩	2.95	4.60	0.60	8.1	
	SD04	調整剥片	調整剥片	(2.10)	3.00	0.30	1.9	
	SD04	石核棱付き剥片	安山岩	5.35	1.85	1.35	8.4	
	SD04	調整剥片	結晶片岩				2.2	
	SD04	調整剥片	結晶片岩				2.0	
	SD04	碎片	姫島産黒曜石				0.1	
	SD04	碎片	ガラス質安山岩				13.4	
	S101	調整剥片	ガラス質安山岩				1.5	末端のみ残存
F・G-9	二次加工剥片	角閃石安山岩	10.85	(5.35)	0.70	50.0	下端・左側欠損	
F・G-9	剥片	ガラス質安山岩	1.70	3.10	0.60	3.0		
F・G-括	剥片	ガラス質安山岩	1.45	3.60	0.60	2.9		
H・i-3~6	剥片	姫島産黒曜石	1.60	2.25	1.05	3.6		
一括	二次加工剥片	角閃石安山岩				25.2	上端・下端・右側縁欠損	
一括	剥片	ガラス質安山岩	1.65	2.40	0.65	2.2		
一括	調整剥片	結晶片岩	(1.40)	(2.40)	0.40	1.5		

写 真 図 版



調査区全景（空中写真）

図版2



SD01・02完掘状況

西方向から



SD01完掘状況

西方向から



SD02完掘状況

西方向から



SD02粘土検出状況

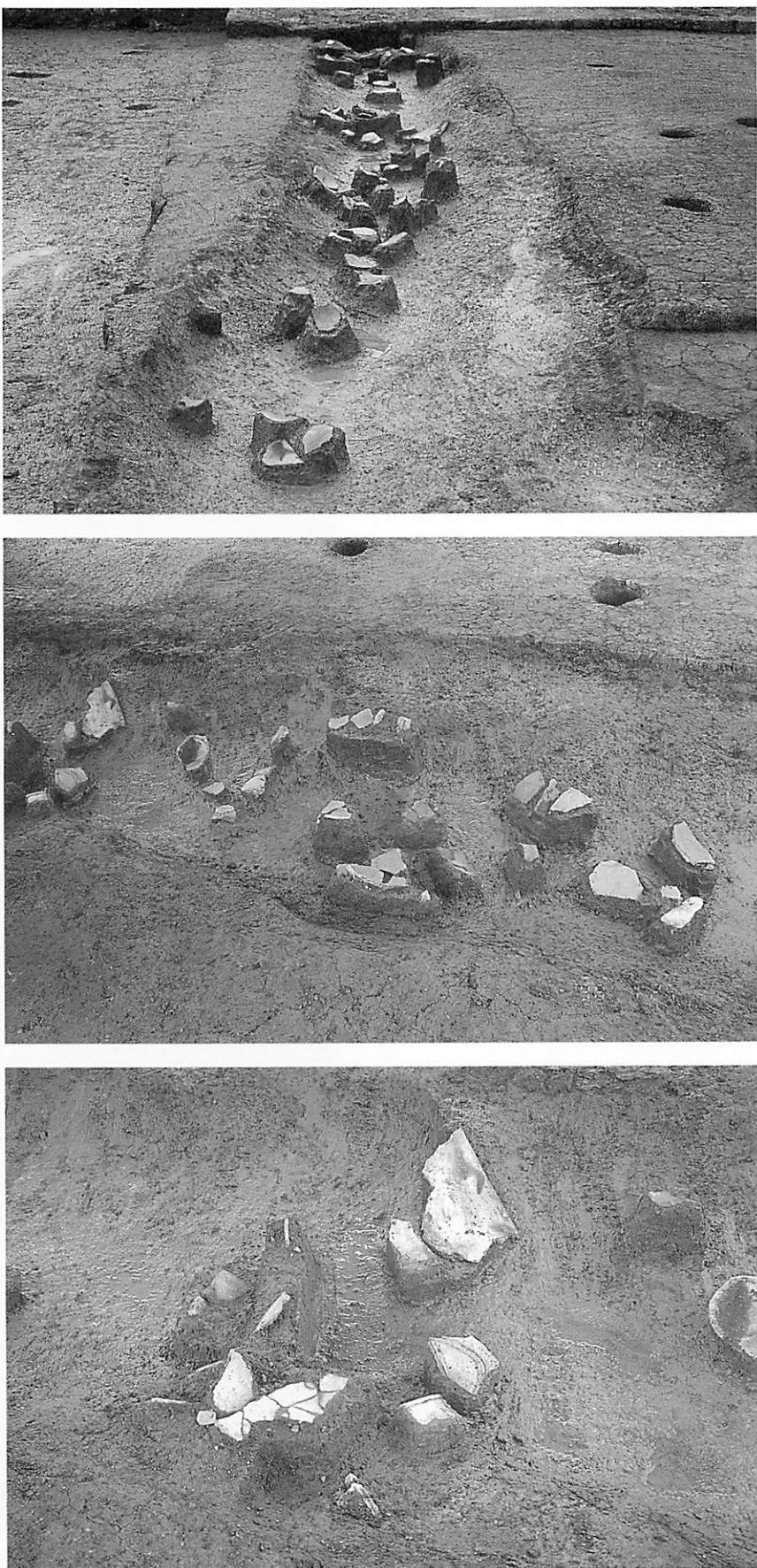
西方向から

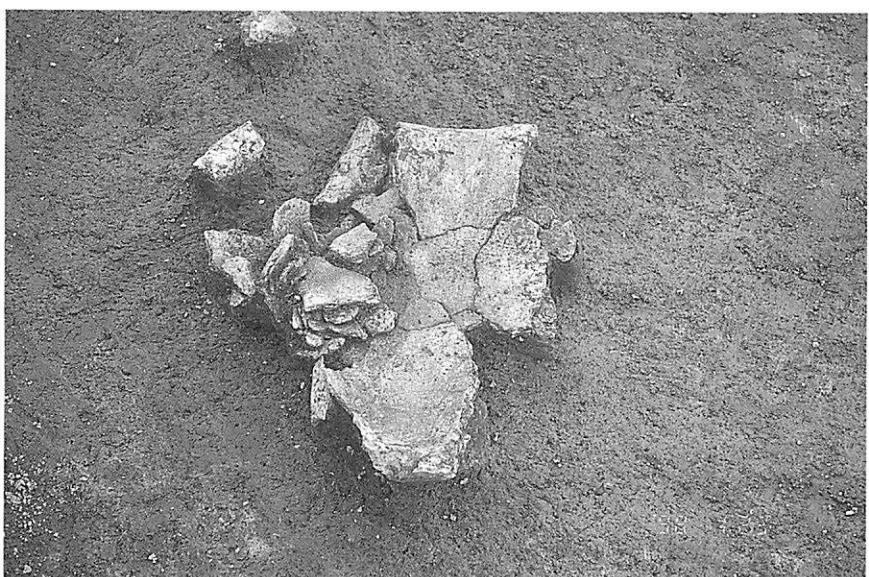


SD02粘土完掘状況

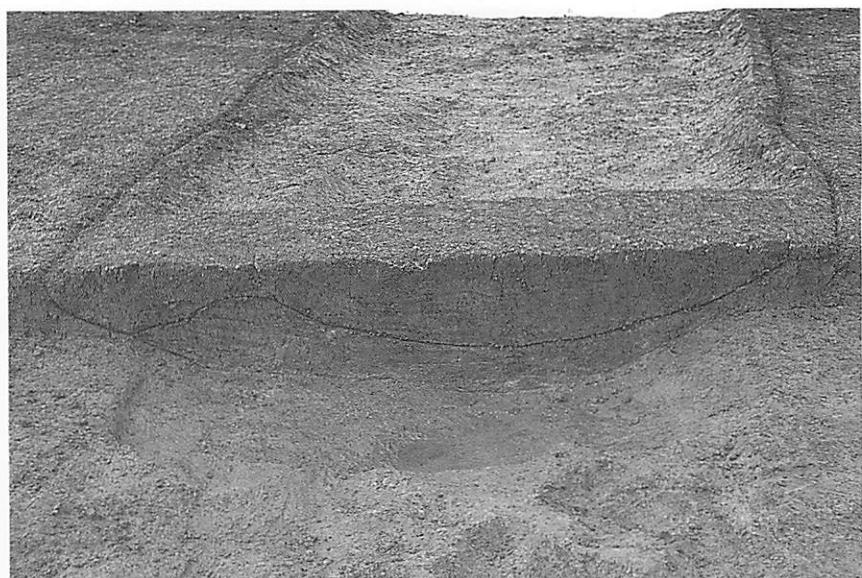
西方向から

図版4





図版6



SD02土層断面状況

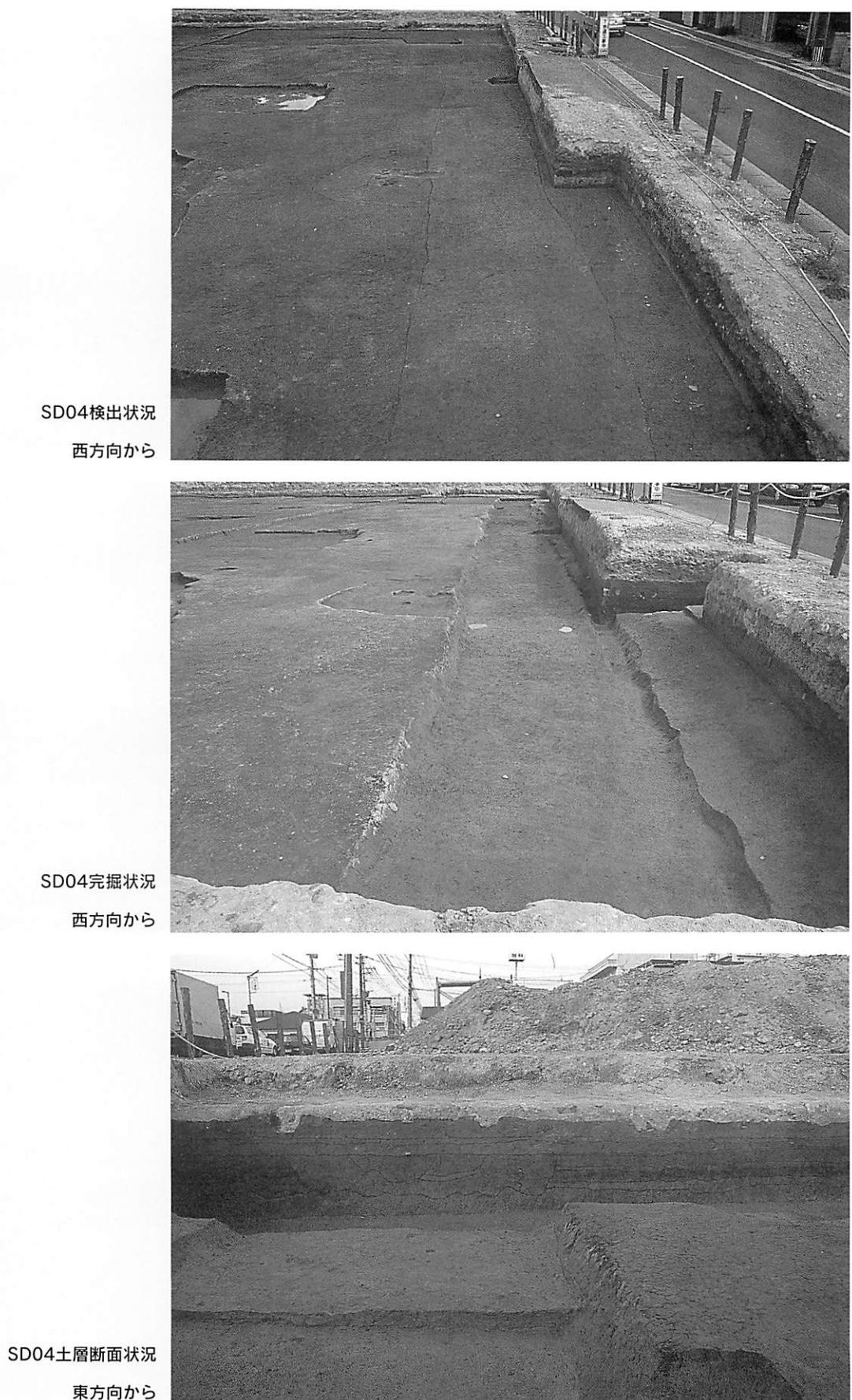
東方向から



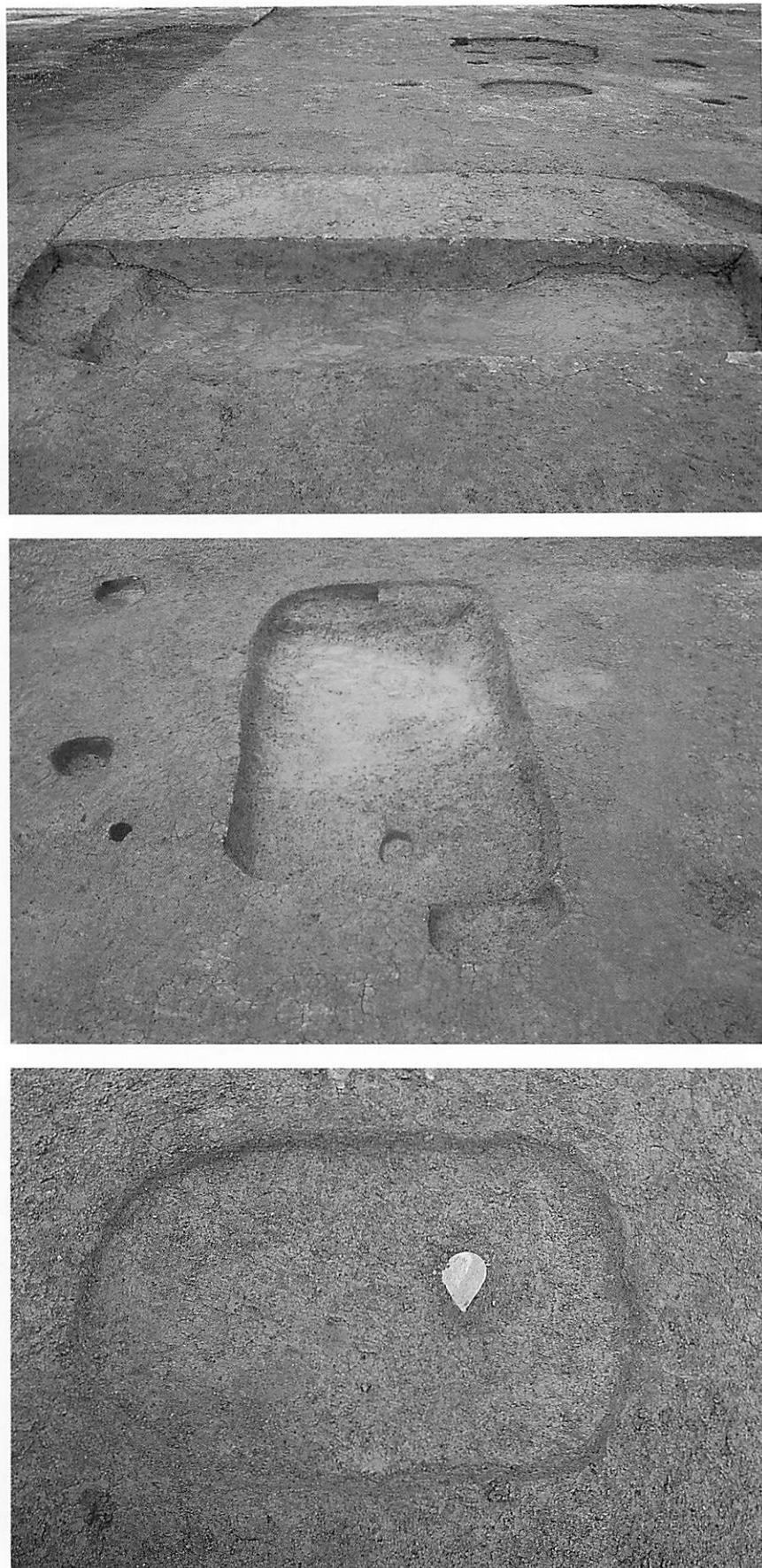
SD03道路側溝状況

西方向から

図版7



図版8





道路状遺構(SF01)断面状況

西方向から



発掘風景



大雨後の調査区

図版10



出土縄文土器 1

図版11



出土縄文土器 2

图版12



出土繩文土器 3

図版13



出土縄文土器 4

図版14



出土縄文土器 5



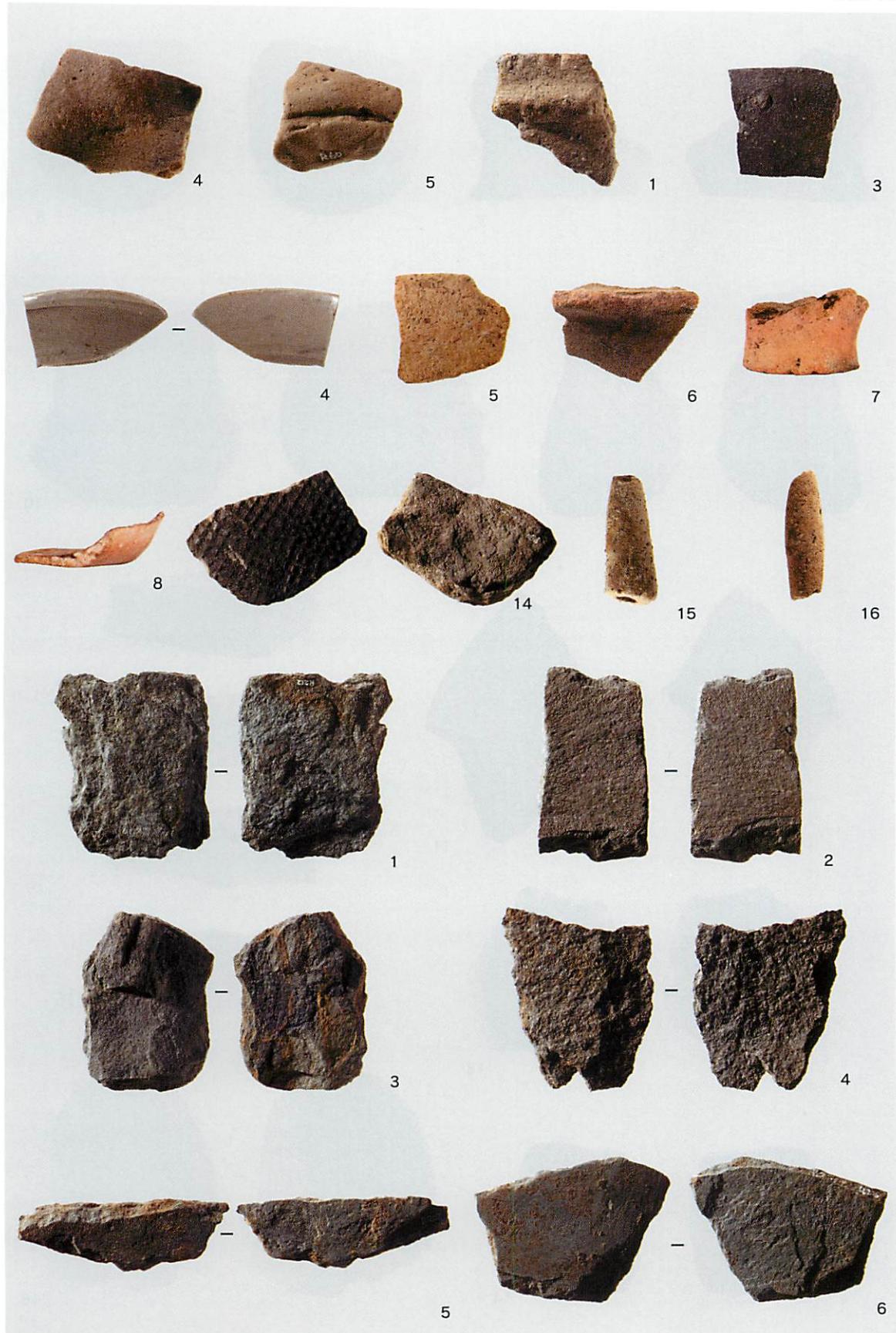
SD02 出土土器 1

图版16



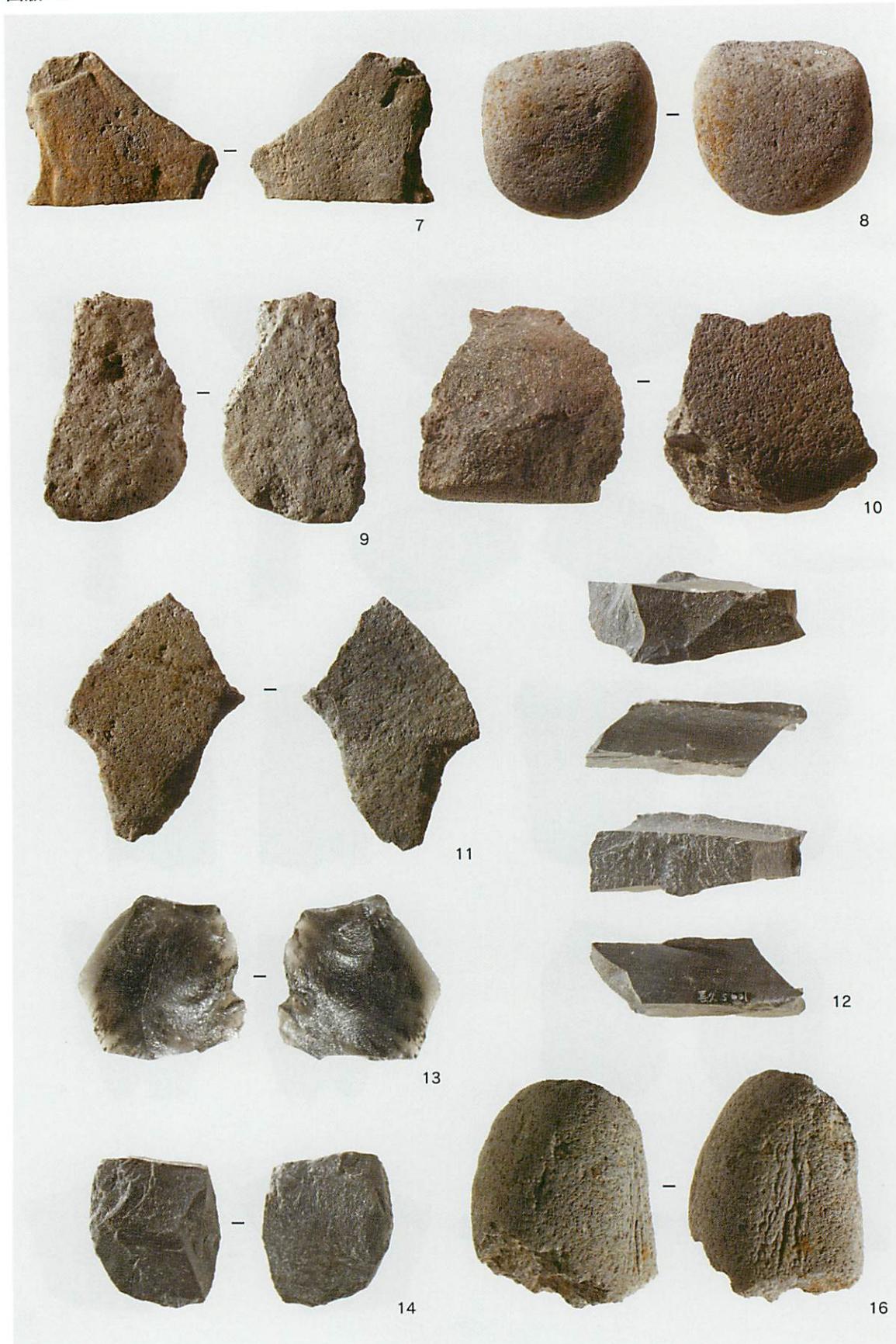
SD02 出土土器 2

図版17



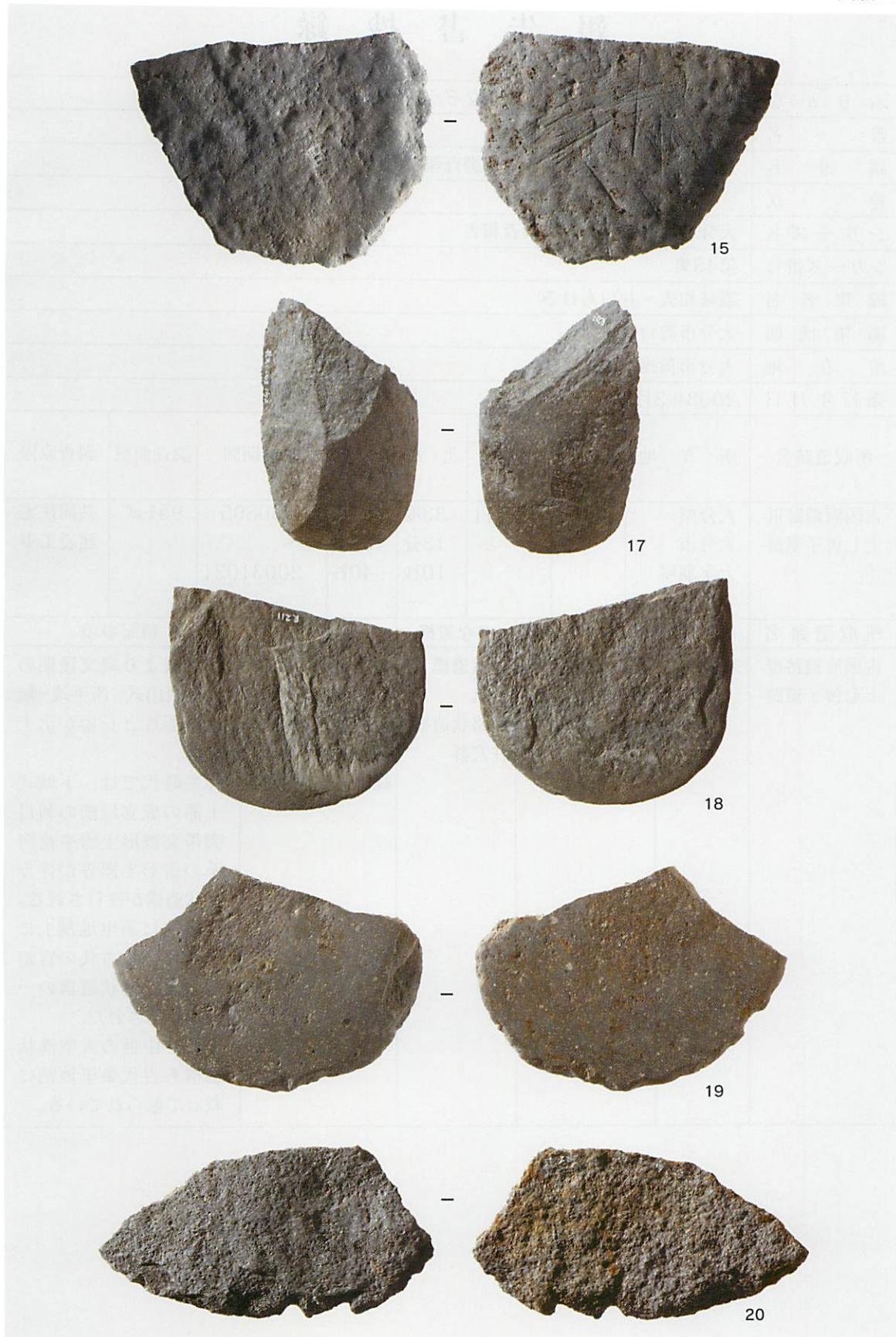
SK02出土遺物（上段4・5）その他の遺構出土遺物（1～16）出土石器 1

図版18



出土石器 2

図版19



出土石器 3

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふるごういせきぐん・かみななぞうしいせき							
書名	古国府遺跡群・上七曾子遺跡							
副書名	共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第45集							
編集者名	讃岐和夫・井口あけみ							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	大分市荷揚町2番31号							
発行年月日	2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古国府遺跡群 上七曾子遺跡	大分県 大分市 大字羽屋 字上七曾子	44201	322041	33度 13分 10秒	131度 35分 40秒	20030805 ~ 20031021	951m ²	共同住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
古国府遺跡群 上七曾子遺跡	条里跡等	縄文時代後期 弥生時代前期 初頭～中葉 古代 中世	溝状遺構 土坑 道路状遺構 柱穴群	縄文後期土器 弥生前期土器 土師器 須恵器 縄文・弥生土器	包含層より縄文後期の 北久根山式・西平式・無 文土器片と石器が出土 した。 弥生時代では、下城式 土器の成立以前の刻目 突帯文甕形土器や夜臼 系の壺形土器等が伴う 溝状遺構が注目される。 直線的に条里地割上に 載っている古代の官道 として道路状遺構の一部 が確認された。 また、中世の大型溝状 遺構も古代条里地割に 載って掘られている。			

大分市埋蔵文化財発掘調査報告 第45集
古国府遺跡群・上七曾子遺跡
－共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書－

発行日
平成15年3月31日
編集・発行
大分市教育委員会文化財課
大分市荷揚町2番31号
〒870-0025 (097)534-6111
印刷
大分市新貝4-50
丸徳印刷(株)
